

九州国立博物館天満宮アクセス道路関係埋蔵文化財調査報告書

浦ノ田遺跡Ⅳ

—福岡県太宰府市大字宰府所在中世石塔群の調査—

福岡県文化財調査報告書 第189集

2004

福岡県教育委員会

九州国立博物館天満宮アクセス道路関係埋蔵文化財調査報告書

浦ノ田遺跡Ⅳ

—福岡県太宰府市大字宰府所在中世石塔群の調査—

福岡県文化財調査報告書 第189集

1. 調査区全景
(南から)



2. P群全景
(南から)



3. 銅製筒形容器・
火葬骨出土状況
(西から)





1



2



3



4

II-5 トレンチ出土銅製筒形容器

1. 正面（出土時の状態に復元）
2. 側面
3. 蓋上面
4. 内面・底部

序

本書は、福岡県教育委員会が福岡県総務部国立博物館対策室から執行委任を受けて実施した、九州国立博物館天満宮アクセス道路建設予定地における事前の発掘調査の記録です。

本書に掲載した浦ノ田遺跡4次調査区は、菅原道真公をまつることで知られる太宰府天満宮境内の丘陵斜面に位置しています。今回の発掘調査では、鎌倉時代から室町時代にかけての五輪塔・板碑などの石塔群と、それに伴って火葬墓が多数発見されました。これらは中世の大宰府の歴史を知る上で非常に貴重な資料になるものと思われます。本書を通して地域の文化財愛護思想の普及や学術研究の一助となれば幸いです。

発掘調査及び報告書の作成にあたりましては、地域の方々をはじめ多くの皆様の御協力を賜りました。関係各位に心から感謝申し上げます。

平成16年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 森山 良一

(例 言)

1. 本書は平成13年度及び平成14年度に福岡県教育委員会が福岡県総務部国立博物館対策室から執行委任を受けて実施した、浦ノ田遺跡第4次発掘調査の報告である。
2. 遺構の実測は、調査担当の岸本圭・進村真之・辻田淳一郎の他、吉村靖徳・秦憲二・森井啓次・宮地聡一郎・岡寺未幾・坂元雄紀・古賀千都子・古賀公子・八尋すみえ・原田智也・濱田嘉信・仲村亮一・橋之口雅子・荒川妙が行った。
3. 遺構写真は岸本・進村・宮地・辻田が、遺物写真は九州歴史資料館の石丸洋・北岡伸一が撮影した。空中写真については、九州航空株式会社・東亜航空株式会社に委託した。
4. 金属器の処理は九州歴史資料館学芸第二課の加藤和蔵、出土遺物の整理・復元は文化財保護課岸本圭・今井涼子・坂元雄紀の指導のもと、九州歴史資料館で行った。
5. 出土遺物の実測は平田春美・棚町陽子・田中典子・久富美智子・坂田順子・若松三枝子・堀江圭子・中村洋子・栗林明美・中川真理子・寺岡和子・橋之口雅子・荒川妙・西亜彩子と岸本・進村・辻田が行った。
6. 遺構・遺物の製図は豊福弥生・原カヨ子・江上佳子と辻田が行った。
7. 第4章第2節については九州大学大学院比較社会文化研究院中橋孝博先生・同大学院修士課程小田裕樹氏の玉稿をいただいた。
8. 本書の執筆は、第1章第1節・第2章第3節を岸本が、第2章第1節を坂本真一が、第2章第4節を岡寺良が、第4章第1節を加藤和蔵が、それ以外を辻田が行った。また本書の編集は岸本・進村の協力を得て辻田が行った。

本文目次

	頁
第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯と調査の経過	
第2節 調査・報告の関係者	
第2章 位置と環境	3
第1節 浦ノ田遺跡周辺の地理的・歴史的環境	
第2節 浦ノ田遺跡の既往の調査	
第3節 太宰府市清水谷隧道の調査	
第4節 宝満山遺跡群第23次調査の補遺	
第3章 調査の内容	10
第1節 調査方法と遺構の概要	
第2節 I区～II区(-9～16)・III区の調査	
1. 石塔群と出土遺物	
2. 蔵骨器	
3. ビット・土坑と出土遺物	
4. 包含層からの出土遺物	
5. III区の調査と出土遺物	
第3節 II区-1～8トレンチの調査	
第4節 IV区の調査	
第4章 自然科学的分析	84
第1節 銅製筒形容器の構造・材質分析と保存処理	
第2節 福岡県太宰府市浦ノ田遺跡4次調査出土の中世火葬人骨	
第5章 浦ノ田遺跡4次調査の成果と課題	99

表目次

	頁
表1 浦ノ田遺跡4次調査出土土師皿法量表	53
表2 浦ノ田遺跡4次調査出土火葬骨一覧表	97

挿図目次

		頁
第1図	道路配置及びトレンチ位置図 (1/1,200)	1
第2図	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	4
第3図	浦ノ田遺跡周辺地形図 (1/7,500)	6
第4図	清水谷隧道の位置 (左 明治34年、右 昭和31年)	8
第5図	清水谷隧道実測図 (1/40)	8
第6図	清水谷隧道題額拓影 (1/8)	8
第7図	清水谷隧道の現況 (写真)	8
第8図	宝満山遺跡群第23次調査出土石器実測図 (2/3)	9
第9図	調査区周辺地形図① (1/400)	11
第10図	調査区周辺地形図② (1/200)	12
第11図	調査区周辺地形図③ (1/200)	13
第12図	断ち割りトレンチ土層図① (1/80)	14
第13図	断ち割りトレンチ土層図② (1/80)	15
第14図	断ち割りトレンチ出土遺物実測図 (1/3・1/8)	16
第15図	I区3層～4層出土遺物実測図 (1/3・1/2)	17
第16図	図A～E群位置関係図 (1/80)	18
第17図	A群・B群上層実測図 (1/40)	20
第18図	A群・B群下層実測図 (1/40)	21
第19図	A群・B群出土遺物実測図 (1は1/8、2・4・5は1/3、3は1/4、6は1/1)	22
第20図	C群実測図 (1/40)	23
第21図	C群及びC群下層出土遺物実測図 (2は1/8・他は全て1/3)	24
第22図	D群実測図 (1/40)	25
第23図	E群実測図 (1/40)	26
第24図	F群実測図 (1/40)	27
第25図	F群出土遺物実測図 (1/8)	28
第26図	G群・土器出土状況実測図 (1/30)	29
第27図	G群出土遺物実測図 (1/8・1/3)	30
第28図	H群実測図 (1/40)	31
第29図	I群実測図 (1/30)	32
第30図	H群・I群出土遺物実測図 (1～3は1/8・他は全て1/3)	33
第31図	J群実測図 (1/40)	34
第32図	断ち割り5トレンチ土層図 (1/60)	35
第33図	K群実測図 (1/20)	35
第34図	L群板碑・土師皿出土状況実測図 (1/20・1/5)	36
第35図	L群付近出土遺物実測図 (1/3・1/1)	36
第36図	M群実測図 (1/40)	37・38

第37図	N群実測図 (1/40)	39
第38図	N群出土遺物実測図 (1/8・1/3)	39
第39図	O群実測図 (1/40)	40
第40図	P群実測図①・② (1/40)	41~44
第41図	P群出土遺物実測図 (1~4は1/8・5~7は1/3)	46
第42図	I区出土須恵器転用蔵骨器 (1/3)	46
第43図	ピット1・2・土1・土2実測図 (1/30・1/60)	47
第44図	土3実測図 (1/20・1/5)	48
第45図	土2・土3出土遺物実測図 (1/2・1/1)	48
第46図	包含層出土土師皿実測図(1) (1/3)	50
第47図	包含層出土土師皿実測図(2) (1/3)	51
第48図	包含層出土土師皿実測図(3) (1/3)	52
第49図	包含層出土土器・陶磁器類・瓦実測図 (1/3)	57
第50図	包含層出土石塔類実測図(1) (1/8)	59
第51図	包含層出土石塔類実測図(2) (1/8)	60
第52図	板碑拓本集成 (1/8)	61
第53図	包含層出土銅製五輪塔実測図 (1/6)	63
第54図	包含層出土銅銭拓本 (1/1)	63
第55図	包含層出土銅製品・勾玉・石鍬実測図 (1/1)	64
第56図	II-1トレンチ区実測図 (1/30)	65
第57図	II-2トレンチ実測図 (1/80・1/40)	66
第58図	II-2トレンチ内土器出土状況実測図 (1/30)	66
第59図	II-1・2トレンチ出土遺物実測図 (1/3)	67
第60図	II-3トレンチ実測図 (1/30)	68
第61図	II-3トレンチ出土遺物実測図 (1/1)	68
第62図	II-4トレンチ・蔵骨器出土状況実測図 (1/30)	71・72
第63図	II-4区トレンチ出土遺物実測図 (1・3~16, 2は1/4・26, 27は1/6, それ以外は1/8)	73
第64図	II-5トレンチ実測図 (1/40・1/120)	74
第65図	II-5トレンチ土層図 (1/40)	75
第66図	II-5トレンチ凝灰岩板碑拓本 (1/8)	75
第67図	II-5トレンチ火葬墓・筒形容器出土状況 (1/15)	76
第68図	II-5トレンチ出土遺物実測図 (1/2)	78
第69図	II-6トレンチ実測図 (1/30)	79
第70図	II-6トレンチ出土遺物実測図 (1/3)	80
第71図	II-7トレンチ実測図 (1/30)	80
第72図	II-8トレンチ実測図 (1/30)	81
第73図	II-8トレンチ出土遺物実測図 (1/8)	82
第74図	IV区平面図 (1/200)・トレンチ実測図 (1/80)	83
第75図	つまみ部分の分析結果	88

第76図	筒身部分の分析結果	88
第77図	底部の分析結果	88
第78図	蔵骨器内の人骨構成	98

写真目次

清水谷隧道の現況 1	8
清水谷隧道の現況 2	8
宝満山遺跡群23次調査出土石器(表)同左(裏)	9
土師皿の底部 1	30
土師皿の底部 2	30
調査区周辺の丘陵地遠景(北東から)	83
写真1 筒身X線透過写真 1	87
写真2 筒身X線透過写真 2	87
写真3 蓋X線透過写真	87
写真4 蓋開封の内部状況	87
写真5 処理前	87
写真6 クリーニング後	87

図版目次

巻頭図版 1	1. 調査区全景(南から) 2. P群全景(南から) 3. 銅製筒形容器・火葬骨出土状況(西から)
巻頭図版 2	II-5 トレンチ出土銅製筒形容器 1. 正面(出土時の状態に復元) 2. 側面 3. 蓋上面 4. 内面・底部
図版 1	1. 調査区遠景(北西から) 2. 調査区遠景(東から)
図版 2	1. 調査区全景(平成13年度・左が北) 2. 調査区全景(平成14年度・左が北)
図版 3	1. 調査開始前(II区1 トレンチ付近より、南から) 2. II区1~6 トレンチ遠景(北西から) 3. 調査区全景(平成13年度、南から)
図版 4	1. 調査区全景(平成14年度、南から) 2. 調査区全景(南東から) 3. 調査区全景(南西から)
図版 5	1. A群・B群・C群(手前より、北から) 2. A群上層(西から) 3. B群上層(西から)

- 図版6 1. A群・B群下層(北から) 2. A群下層(西から) 3. B群下層(西から)
- 図版7 1. A群上層(北から) 2. B群上層(北から)
3. A群P4火葬墓出土状況(西から)
4. B群下層(西から) 5. B群P4白磁碗・青磁片出土状況(西から)
6. B群歳骨器出土状況(西から)
- 図版8 1. C群(右下はD群・西から) 2. C群(北から)
3. D群(右はJ群・北西から)
- 図版9 1. D群・E群と断ち割り5トレンチ土層確認状況(左がE群・北西から)
2. D群・E群(右がE群・南東から) 3. D群区画(南西から)
- 図版10 1. 断ち割り5トレンチ・J群・J群下層(北から)
2. F群(北西から) 3. F群下層(北から)
- 図版11 1. F群・G群遠景(西から) 2. G群板碑・土器出土状況(北西から)
3. H群(北から)
- 図版12 1. H群(南西から) 2. H群下層(南西から) 3. H群P3(西から)
- 図版13 1. I群(西から) 2. I群北半(西から) 3. I群P1火葬骨出土状況(西から)
4. I群P2・P3火葬骨出土状況(西から) 5. I群P2火葬骨出土状況(西から)
6. I群P2A~C完掘・土師皿出土状況(西から)
- 図版14 1. J群正面(南西から) 2. J群~C群・D群(西から) 3. J群(北東から)
- 図版15 1. K群(西から) 2. L群(北西から) 3. L群土師皿・銅銭出土状況(北西から)
- 図版16 1. M群付近遠景(南から) 2. M群(北西から) 3. M群上段から(東から)
- 図版17 1. N群板碑(西から) 2. O群(北西から) 3. O群(南西から)
- 図版18 1. P群全景(南から) 2. P群全景(西から) 3. P群南群付近(南西から)
- 図版19 1. P群下層ピット群(南東から) 2. P群下層完掘(南東から)
3. P群・1群下層(北西から) 4. P群完掘(南から) 5. P群P30(東から)
6. P群P15・P25(北から)
- 図版20 1. 土1(西から) 2. II-11区P1・P2火葬骨出土状況(西から)
3. 土3パイプ出土状況(北から)
4. 土3土層確認・銅製玉付金具出土状況(北から)
- 図版21 1. 断ち割り1トレンチ(北西から) 2. 断ち割り3トレンチ(北西から)
3. 断ち割り4トレンチ(西から) 4. I~II区完掘状況(西から)
5. III区1トレンチ(南から) 6. 調査終了時(東から)
- 図版22 1. II区1~2トレンチ(東から) 2. II区1トレンチ(北から)
3. II区2トレンチ(南から)
- 図版23 1. II区2トレンチ土師皿出土状況(南西から) 2. II区3トレンチ(西から)
3. II区3トレンチ(西から)
- 図版24 1. II区4トレンチ石塔群全景(西から) 2. II区4トレンチ全景(南から)
3. II区4トレンチ古瀬戸歳骨器出土状況(西から)
- 図版25 1. II区4トレンチ古瀬戸周辺(西から)
2. II区4トレンチ7号・8号板碑付近(西から)

3. II区5トレンチ全景(西から) 4. II区5トレンチ上段火葬墓(西から)
- 図版26 1. II区5トレンチ銅製筒形容器出土状況(西から)
2. II区5トレンチ上段火葬墓、火葬骨A出土状況(西から)
3. II区5トレンチ銅製筒形容器埋設状況確認(西から)
- 図版27 1. II区5トレンチ下段板碑群(北西から) 2. II区6トレンチ(南から)
3. II区6トレンチ中央土壇(西から)
- 図版28 1. II区7トレンチ(南から) 2. II区8トレンチ周辺調査前(北西から)
3. II区8トレンチ梵字を刻む花崗岩塊(西から)
- 図版29 1. II区8トレンチ(南西から) 2. IV区トレンチ(西から)
3. IV区大正十四年銘植樹記念碑(西から)
- 図版30 1. 調査区の南側に広がるテラスの北半(西から) 2. 南側テラス出土板碑(下が天)
3. 太宰府天満宮宝物殿付近より調査区方向を望む(西から)
- 図版31 I区断ち割りトレンチ、3層・4層、B群出土遺物
- 図版32 C群及びC群下層、G群出土遺物
- 図版33 I～II区石塔群・土坑出土土器・金属器
- 図版34 I区～II区(9～16)・III区包含層出土土器
- 図版35 I区～II区(9～16)・III区包含層出土遺物
- 図版36 石塔類(1)(花崗岩・砂岩)
- 図版37 石塔類(2)(花崗岩・砂岩)
- 図版38 石塔類(3)(花崗岩・砂岩)
- 図版39 石塔類(4)(花崗岩・砂岩・凝灰岩)
- 図版40 石塔類(5)(凝灰岩)
- 図版41 陶製五輪塔・II区1・2トレンチ出土遺物
- 図版42 II区3・4・6・8トレンチ出土遺物

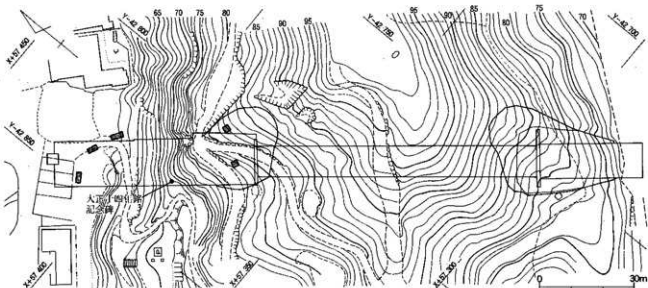
第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯と調査の経過

九州国立博物館（仮称）は、東京・京都・奈良に次ぐ4番目の国立博物館として、平成17年度開館をめどに整備が進められている。設置場所は福岡県太宰府市の太宰府天満宮に隣接した地であり、太宰府天満宮境内を通る市道と博物館を繋ぐ歩道（通称、天満宮アクセス）の建設が計画された。太宰府天満宮と博物館の間には、宝満山から長くのびる比較的急峻な尾根が存在しており、アクセス道はこの尾根にトンネルを開削してつくられることとなった。このルートは西日本鉄道太宰府駅から博物館へ至る最短のルートであり、途中に太宰府天満宮や光明寺といった代表的な観光地を経るもので、太宰府の歴史に大いに親しむことができる経路になるものと期待される。

天満宮アクセス開設に先立ち、路線内の文化財の有無について国立博物館対策室から教育庁総務部文化財保護課に照会があり、平成13年11月に現地踏査を実施した。その結果、尾根は急傾斜地であることから文化財の存在する可能性は少ないとみられるが、天満宮境内とトンネル入口付近の緩斜面に関しては試掘調査が必要であるとの回答を行った。試掘調査は12月5・7日に実施した。その結果、天満宮境内において文化財は確認されなかったものの、トンネル入口の緩斜面では遺構は検出されなかったが多量の土師皿が出土した。これをうけて引き続き本調査を実施することで協議を行ない、平成14年1月8日から作業員をいれて作業を開始した。なお、天満宮とは反対側の博物館側のトンネル入口に関しても試掘調査を実施したが、文化財は確認されなかった。

調査開始からほどなくして、石塔群・墓域が全面にわたって展開する重要な遺跡であることが確認され、発掘調査と並行して文化財保護課・国立博物館対策室ではその保存に関して協議を重ねた。その結果、掘削範囲を当初よりも狭めた形で設計が変更され、やむを得ず破壊される箇所に関しては板碑群を移設することでままとまった。発掘調査は翌年度にわたって実施され、平成14年11月22日に終了した。なお、板碑群の移設は平成16年度の事業として、博物館敷地内に移設することとなっている。



第1図 道路配置及びトレンチ位置図 (1/1,200)

第2節 調査・報告の関係者

浦ノ田遺跡4次調査の発掘調査及び報告書作成における福岡県教育委員会の関係者は以下の通りである。

	平成13年度 (調査)	平成14年度 (調査)	平成15年度 (整理・報告書作成)
福岡県教育委員会			
総括			
教育長	光安常喜	森山良一	森山良一
教育次長	森山良一	三瓶寧夫	三瓶寧夫
総務部長	三瓶寧夫	松本通憲	松本通憲
文化財保護課長	井上裕弘	井上裕弘	井上裕弘
同参事兼課長技術補佐	橋口達也 川述昭人	橋口達也 川述昭人	川述昭人 木下修
同参事兼課長補佐	平野義峰	久芳昭文	久芳昭文
同参事補佐兼調査第一係長	佐々木隆彦	佐々木隆彦	小池史哲
参事補佐		飛野博文	飛野博文
庶務			
参事補佐兼管理係長		古賀敏生	古賀敏生
管理係長	三笠ひとみ		
主任主事	秦俊二	秦俊二	末竹元
調査・報告書作成			
福岡教育事務所生涯学習課		北筑後教育事務所生涯学習課	
主任技師	吉村靖徳	主任技師 岸本圭	
教育庁総務部文化財保護課			
主任技師	森井啓次 岸本圭 (試験・調査担当)	秦憲二 岸本圭 (調査・整理担当)	進村真之 今井涼子 (整理担当)
		進村真之 (調査担当)	辻田淳一郎
技師	宮地聡一郎 野口未幾 辻田淳一郎 (調査担当) 坂元雄紀	辻田淳一郎 (調査担当)	坂元雄紀 (整理担当)

なお発掘調査にあたっては、太宰府市をはじめとする住民の方々や福岡県総務部国立博物館対策室、また以下に御芳名を掲げる諸先生方、太宰府天満宮、太宰府市教育委員会の方々から現地での指導・助言等多大な御支援・御協力を頂いた。また文化財保護課の諸氏には遺構実測等の応援を頂いた。記して感謝の意を表します。

上野嵩良・神原稔・城戸康利・小西信二・中島恒次郎・西谷正・馬場宣彦・味酒安則・宮小路賢宏・宮崎亮一・森弘子・山村信榮(五十音順・敬称略)

第2章 位置と環境

第1節 浦ノ田遺跡周辺の地理的・歴史的環境

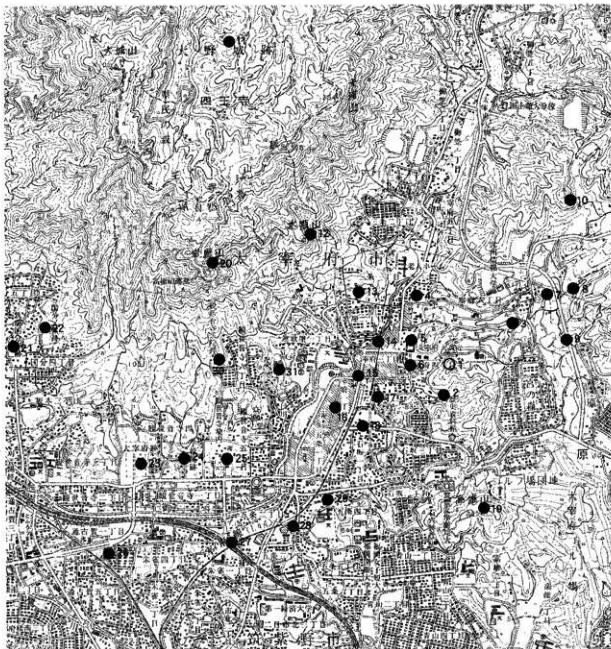
浦ノ田 (URANOTA) 遺跡4次調査区は大宰府市宰府4-934-1に所在し、太宰府天満宮の東南側に広がる丘陵斜面に位置する。太宰府市は福岡市の南東約16kmに位置し、北東部は糟屋郡宇美町、南部は筑紫野市、北西部は大野城市に接する位置にある。東側に宝満山、北に四王寺山がそびえ、平野部は南から北西に開け、その平野部を流れる御笠川は宝満山西麓に水源を持ち、市街地を通り、途中鶯田川、大佐野川と合流して博多湾へ注ぐ福岡平野の主要河川である。現在人口は約65,000人で、史跡や緑に恵まれた福岡都市圏の住宅都市として発展している。

ここ太宰府は、古代に大和朝廷の西の要として「遠の朝廷」とよばれた大宰府政庁の所在地として九州地方の政治・経済・外交の中心地であった。中世以降、大宰府政庁は廃絶し、政治・経済の文化の中心は博多へと移行していくが、安楽寺（現在の太宰府天満宮の前身）は特に近世以降の天神信仰の隆盛と共に信仰を集め、現在もなお多くの参拝客が太宰府天満宮を訪れている。

太宰府では11世紀後半～12世紀初頭頃からの遺構が中世の状況を示しており、政庁の南側に下った一带から学校院、観音寺地区、その南側及び東側から現在の五条周辺、条坊外天満宮周辺地域に遺構が広がっている。今回の調査地点の西側には、太宰府天満宮があり、境内では天満宮の前身である安楽寺に関連する多数の遺構・遺物が出土している。1次調査では基盤状遺構と整地層が確認され、12世紀前半から中頃の土師器や安楽寺創建段階の瓦類が出土している。また3次調査でも12世紀中頃から後半にかけての遺物を含む整地層の一部や櫓などが確認されている。

13世紀には、生産遺跡として特に観音寺前や御笠川南条坊遺跡などでは、仏具や仏像などの鋳型をはじめとして、鋳造関連遺構がまとめて検出されている。鉾ノ浦遺跡でも13世紀後半から14世紀にかけての鉄製鍋や梵鐘を鋳造した工房群が検出されており、大規模な鋳造活動が行われていたことが判明している。大宰府条坊跡内など周辺の遺跡でも当該期の遺構や遺物が出検されているが、鉾ノ浦遺跡の近くの太宰府史跡第33次調査でも一部であるが確認されている。ここでは掘立柱建物や櫓、井戸、溝などが検出され、土師器、瓦器、陶磁器類や鉄製品、木製品などが多数出土している。この溝の最下層の腐植土層から「貞應三年」（1224年）の紀年名の墨書木札が出土し、また多数の木製品の中には絵馬や呪符などもみられる。その後14世紀後半以降では、観音寺周辺部、特に北側に顕著になる。大宰府条坊跡の調査で、観音寺周辺部では13世紀から続く寺院または居館などと推定されている建物などが検出されており、その遺構からは一般では入手し難い銅製品、多量の銅銭、良質の中国産や国産の陶磁器、ガラス製品などが出土している。また、現在の五条から太宰府天満宮周辺に至る地域に、この時期の遺跡の検出例が増加しつつあり、町並みの中心は太宰府天満宮を中心とする地域に移行している。

なお太宰府天満宮周辺では、中世の遺跡として近年、馬場遺跡第2次調査で古代条坊制とは異なる11世紀後半から12世紀前半の南北溝が、4次調査では12世紀中頃から14世紀中頃の墳墓群が調査されている。他にも連歌屋遺跡、大町遺跡、新町遺跡などで中世から近世の町屋遺構の調査が行われている。また中世の寺院として宝満山西麓に光明寺跡、原山無量寺跡、横岳崇福寺跡、山城では



1. 浦ノ田遺跡第4次(今回の調査地点)
2. 浦ノ田遺跡第1次・第2次
3. 浦ノ田遺跡第3次
4. 三条遺跡
5. 太宰府天満宮境内遺跡
6. 太宰府天満宮参道遺跡
7. 宝満山遺跡群第23次
8. 筑紫野市原経塚出土地点
9. 筑紫野市原遺跡
10. 宝満山経塚出土地
11. 大野城跡
12. 水鏡山経塚出土地
13. 原遺跡
14. 連歌屋遺跡
15. 大町遺跡
16. 新町遺跡
17. 馬場遺跡
18. 奥原遺跡
19. 高尾城
20. 岩屋城
21. 筑前国分寺跡
22. 櫻分瓦葺跡
23. 大宰府政庁跡
24. 学校院跡
25. 観世音寺
26. 板寺
27. 柳堂川南条坊遺跡
28. 大宰府史跡第33次
29. 針ノ浦遺跡
30. 推定金光寺跡
31. 横岳遺跡

第2図 周辺遺跡分布図(1/25,000)

守護少武氏の持城である浦ノ城跡や『筑前国続風土記』に記載のある高尾山城跡などが調査されている。

中世の墳墓では、太宰府市内で浦ノ田遺跡の石塔群とほぼ同時期に営まれたと考えられる遺跡として推定金光寺跡が挙げられる。また横岳遺跡では五輪塔多数を埋納した遺構が検出されている。

今回の調査地点周辺でも中世の墳墓が多数検出されている。太宰府の中世の墳墓の特徴としては、墳丘、土城墓、火葬墓、木棺墓、火葬施設などが平野部周辺の丘陵上に造営されているという点が挙げられる。太宰府天満宮境内地遺跡や原遺跡、宝満山遺跡群などの過去の調査では墳墓や焼土坑が多数検出されている。宝満山遺跡8次調査のST001や原遺跡第4次ST002などでは一部階層が異なる人々の墓でないかと考えられるものなどもある。以上のような調査事例から、刻々と中世の太宰府の状況が復元されつつあるといえよう。

【参考文献】

- 九州歴史資料館 1988 『太宰府史跡 昭和62年度発掘調査概報』,九州歴史資料館。
太宰府市教育委員会 1988 『太宰府天満宮』,太宰府天満宮境内発掘調査報告書第1集,太宰府天満宮。
太宰府市教育委員会 1993 『太宰府天満宮参道』,太宰府市の文化財第19集,太宰府市教育委員会。
太宰府市教育委員会 1995 『太宰府天満宮Ⅲ』,太宰府市の文化財第26集,太宰府市教育委員会。
太宰府市教育委員会 1999a 『馬場遺跡』,太宰府市の文化財第41集,太宰府市教育委員会。
太宰府市教育委員会 1999b 『横岳遺跡—横岳崇福寺跡の調査—』,太宰府市の文化財第45集,太宰府市教育委員会。
太宰府市教育委員会 2001a 『太宰府条坊跡XVII—鉢ノ浦遺跡—』,太宰府市の文化財第53集,太宰府市教育委員会。
太宰府市教育委員会 2001b 『原遺跡1』,太宰府市の文化財第54集,太宰府市教育委員会。
太宰府市教育委員会 2001c 『宝満山遺跡群Ⅲ』,太宰府市の文化財第55集,太宰府市教育委員会。
太宰府市教育委員会 2003 『連歌屋遺跡1』,太宰府市の文化財第68集,太宰府市教育委員会。
太宰府市史編集委員会 1992 『太宰府市史 考古資料編』,太宰府市。

第2節 浦ノ田遺跡の既往の調査

浦ノ田遺跡は太宰府市宰府に位置するが、平成12年度までに計3次にわたる調査が実施されており、本調査は4次調査にあたる。以下に1～3次調査及び関連する宝満山遺跡群23次調査の概要を述べる。

1. 第1次調査(福岡県教育委員会1996)

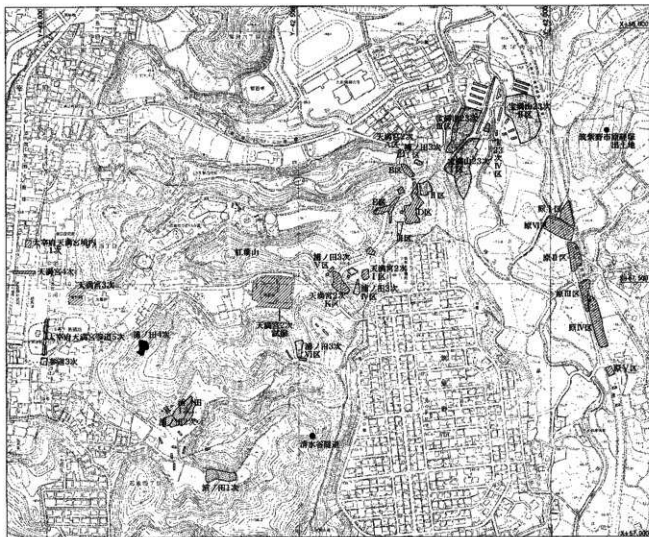
九州国立博物館(仮称)建設予定地内の浦ノ田A遺跡と浦ノ田B遺跡について、平成7年度に福岡県教育委員会によって発掘調査が実施された。調査の結果、浦ノ田A遺跡では中世の土坑・溝状遺構等が、浦ノ田B遺跡では縄文時代早期(押型文土器主体)の集石炉・土坑等、中世の竪穴遺構・掘立柱建物・溝状遺構等が検出された。中世の遺構はいずれも13世紀後半～14世紀初めという比較的短期間に営まれたものと想定されている。

2. 第2次調査(福岡県教育委員会2000)

1次調査区のうち、浦ノ田B遺跡に隣接する区域を対象として、平成11年度に福岡県教育委員会によって調査が実施された。ここでも1次調査と同様、縄文時代早期(押型文土器主体)の集石炉や落とし穴など、また古墳時代後期～中世・近世に至る時期の掘立柱建物跡・土坑・溝等が検出されている。

3. 第3次調査・宝満山遺跡群23次調査(福岡県教育委員会2002)

九州国立博物館(仮称)の建設に伴い、新たに県道筑紫野古賀線から博物館用地までの区間で道路が建設されることとなり、平成11～12年に福岡県教育委員会によって調査が実施された。このうち大字太宰府地内が浦ノ田遺跡3次調査、大字内山地内については宝満山遺跡群第23次調査として本調査が行われた。浦ノ田遺跡3次調査では中世の土坑・ピット群などが、宝満山遺跡群23次調査では縄文時代早期から晩期の遺物、古代の製鉄工房・平安時代末頃の鋳造工房などが出土している。



第3図 浦ノ田遺跡周辺地形図(1/7,500)(福岡県教育委員会2002:P.7の第3図に加筆)

【参考文献】

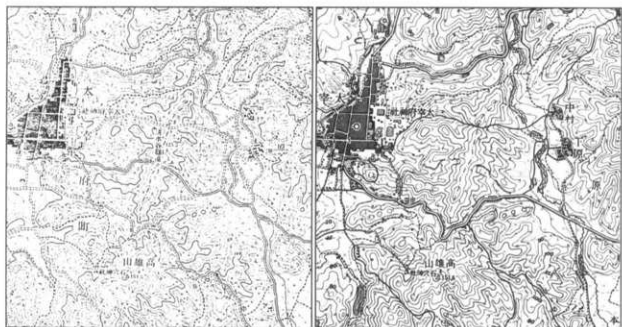
- 福岡県教育委員会 1996 『浦ノ田A・B遺跡』, 福岡県文化財調査報告書第126集, 福岡県教育委員会.
- 福岡県教育委員会 2000 『浦ノ田遺跡II』, 福岡県文化財調査報告書第155集, 福岡県教育委員会.
- 福岡県教育委員会 2002 『宝満山遺跡群・浦ノ田遺跡III』, 福岡県文化財調査報告書第169集, 福岡県教育委員会.

第3節 太宰府市清水谷隧道の調査

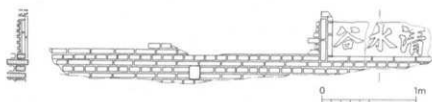
周辺遺跡の一つとして九州国立博物館(仮称)の敷地に隣接して存在する明治27年に掘られたという清水谷隧道を紹介する。全国的にみても初期のトンネルとして貴重であるにも関わらず周知されていないために、今回踏査と略測を行った。位置は太宰府市街から西へ吉木方面に抜けるルート上にあり、宝満山からのびてくる尾根を貫くものである。この尾根を越えるには古くから石坂峠があったが、険しく狭い山道であったためにこのトンネルが築かれることとなった。しかし工法の欠陥により陥没したために通行できなくなり、大正5年には石坂道路が更正されて開通し清水谷隧道は人々の記憶から去ることとなった。この石坂峠の改修は「石坂さえ除かれにけり」と評され、「本町多年の宿望を達した」と言われた。この顕彰碑が石坂峠の西側、現在の九州歴史資料館前に残っている。明治27年というところから110年前のことではあるが、設計者や図面はもちろん全く記録が残っておらず、読みが「しみずだに」か「きよみずだに」かさえもはっきりしないほどである。現況は国立博物館側(西側)入口のみが確認でき、東側は宮ノ森団地造成時に破壊されて削られた面に擁壁が築かれている。西側についても故意によるものか大部分が埋まった状態であり、高さ約50cmにわたってポータルのレンガ積みを確認される。題額は破損部があるものの全容は想定できるが、題額よりも向かって右側は土砂に埋もれている。おそらく向かって左側はコーナーまで露出していると考えられ、題額の中心からコーナーまでは3.4mを測るので、ポータル全体の幅は6.8mと考えられる。使用されるレンガは長さ22.5cm×幅10.5cm×厚さ5.0cmを測るもので、並形という規格にあたる。レンガの積み方は一段おきに小口をみせるようにするイギリス積みと呼ばれるものである。題額は5cmせり出す形となり、レンガの壁面にモルタルを数cm塗り、その上に薄い輪郭線により右書きで「清水谷」と記す。今回の報告は埋もれた隧道の一部の略測に止まるが、福岡県の近代土木史の資料として活かされることを期待したい。

【参考文献】

- 太宰府市史編集委員会 1993 『太宰府市史』民俗資料編, 太宰府市.



第4図 清水谷隧道の位置(左 明治34年、右 昭和31年)



第5図 清水谷隧道実測図(1/40)



第6図 清水谷隧道題額拓影(1/8)



第7図 清水谷隧道の現況

第4節 宝満山遺跡群第23次調査の補遺

2002年に報告した宝満山遺跡群第23次調査（福岡県文化財調査報告書第169集）において、諸般の事情により報告できなかった遺物が何点か存在していたので、ここに報告する。

第8図1は、サヌカイト製の石鏃で、風化がすすんでいる。先端は欠損する。長さ2.9cm、幅2.05cm、厚さ0.55cm、重さ2.3g。二等辺三角形を呈し、基部は平基でやや逆V字状に抉れる。側縁部の剥離が見られるが、やや稚である。Ⅱ区北部P-56から出土した。

2は、サヌカイト製の横型の石匙で、長さ2.6cm、残存する幅3.5cm、上部に幅1.1cmの抉りの入ったつまみが施される。重さ7.2g。横長剥片を素材として製作されたものと考えられる。本来の形状は二等辺三角形であったであろう。Ⅱ区北部自然流路Dトレンチ北から出土した。



第8図 宝満山遺跡群第23次調査出土石器実測図（2/3）



宝満山遺跡群第23次調査出土石器（表）



宝満山遺跡群第23次調査出土石器（裏）

第3章 調査の内容

第1節 調査方法と遺構の概要

1. 調査区の設定

調査対象区は第9～11図に示す範囲である。調査区には幅約3mほどの遊歩道があり、途中で北方向と南東方向に分岐している。南東方向に上る遊歩道（道①・②）は、調査の結果、石塔群の埋没後に盛土によって造成されたものであることが判明している。調査にあたり、この調査区内を通る遊歩道を基準として、大きくⅠ～Ⅲの3つの調査区を設定した。Ⅰ区は、南東方向に上る遊歩道と南北にのびる遊歩道との間の部分で、調査時にはこれをさらに1～6区に区分した。次に、南東方向に上る遊歩道よりも上に位置する斜面全体をⅡ区として設定した。このⅡ区については大きく1～16区に区分した。またⅢ区は南北にのびる遊歩道よりも下位に位置する斜面である。ここでは3つのトレンチを設定し、遺構の有無・土層の状況について確認調査を行った。

またこれとは別に、登り口から調査区へ至る遊歩道の脇に、大正十四年に付近に植樹した旨の銘が刻んである石碑があることが知られていたが、工事範囲に該当することから、石碑を中心にⅣ区として設定し、周辺の地形測量とトレンチ調査を実施した（第74図）。

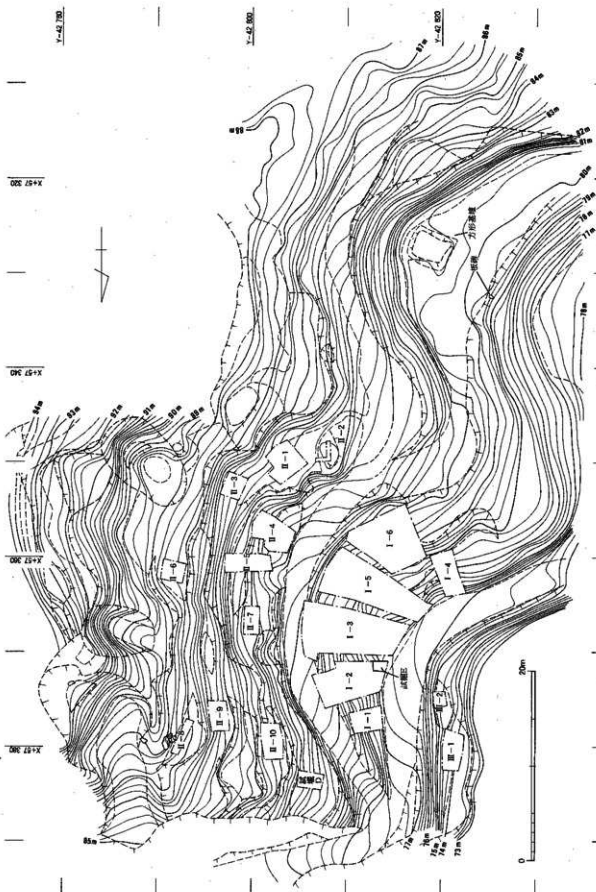
2. 遺構の概要と基本層序

遺構は第10図に示すように、A～P群の計16ヶ所の石塔群が広がっている。さらにⅡ区1～8トレンチでもそれぞれ遺構が見つかっていることから、本調査区付近を中心として墓域が斜面全体に広がっているものと考えられる。調査は、これら石塔群の検出・写真撮影・実測・下部施設の精査という順番で実施し、各石塔群の調査終了と並行して、石塔群が配置された斜面及びテラス面の造成過程を検証すべく、特にⅠ区斜面についてトレンチによる断ち割り調査を行い、土層を確認した。Ⅱ区1～8トレンチについては現状で保存されるため、4・5・8トレンチの一部を除き、遺構検出面で写真撮影・実測を行った後、そのまま埋め戻している。

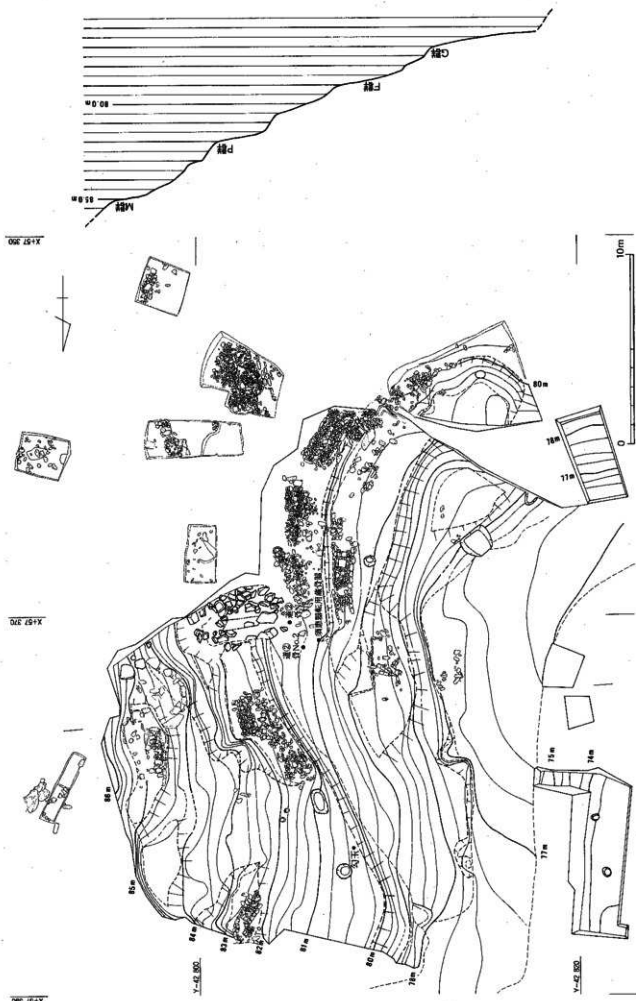
またJ群の南側の尾根筋を挟んでさらに南側には本調査区よりもさらに大規模なテラス面が広がっており、石列を伴い基壇上の高まりを持つ墓や梵字を刻んだ板碑（図版30-2）などが散在していることから、この南側の斜面にも墓域が展開していることが確認できる。

本調査区のうち、Ⅱ区北側斜面（M～P群）については、ほぼ地山直上に石塔群を構築しているが、Ⅰ区の特に南側では石塔群の出土状況から複数時期にわたって石塔が造営されていることが想定されたため、斜面に断ち割りトレンチを4本設定して土層観察を行った（図版21）。また調査区の前面を通る遊歩道についてもトレンチを設定し、この道の使用開始時期、またⅢ区斜面とのつながりを確認するため土層の確認を行った（第12・13図）。

この結果、特に断ち割り1・3トレンチと道③2トレンチの土層から、1・2層が表土層・堆積層、3・4層が遺構面、5・6層が無遺物層で特に6層が地山であることが確認できた。このうち3層は、Ⅰ区でも南側を中心としており、F群やG群までは広がっていない。ただしⅢ区1トレンチ南壁では確認できることから裾広がり堆積しているものと考えられる。



第9图 调查区周边地形图① (1/400)

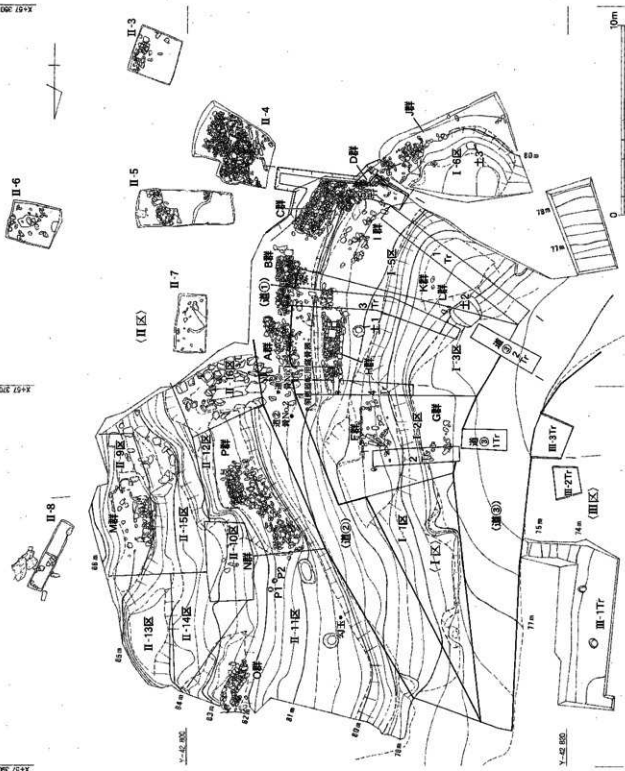


第10图 調查区周辺地形図② (1/200)

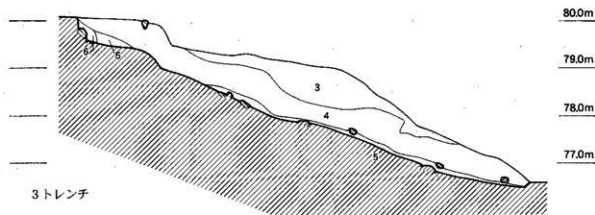
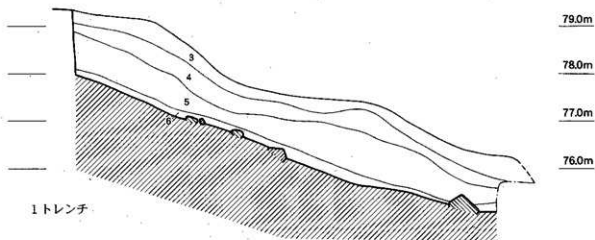
K45 294

K45 294

K45 294

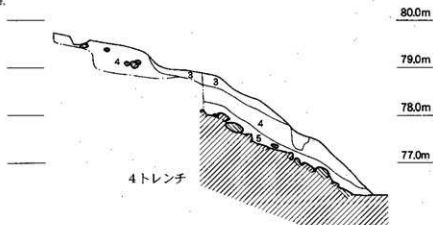
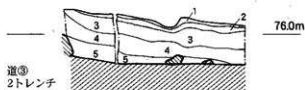


第11图 調査区周辺地形图③ (1/200)

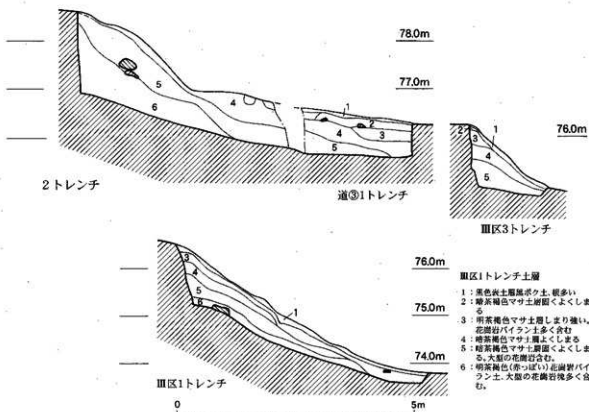


○断ち割りトレンチによる標準土層

- 1: (表土層)
- 2: (遊歩道の埋積層) 暗茶褐色土、硬くよくしまる。
- 3: (第2遊積層) 明茶褐色土、軟らかいがよくしまる。石材・遺物多く出土。F層より北側には広がらず、調査区の南端を中心として認められる。
- 4: (第1遊積層) 暗褐色土、硬くよくしまる。10cm前後の花崗岩塊多く含む。上層から遺物出土。
- 5: 暗褐色土。4層よりさらに硬くよくしまる。パイラン土・花崗岩塊多く含む。(無遺物層)
- 6: (地山) 暗灰色の風化礫層。非常に硬い。20cmを越す大形の花崗岩塊を多く含む。



第12図 断ち割りトレンチ土層図① (1/80)



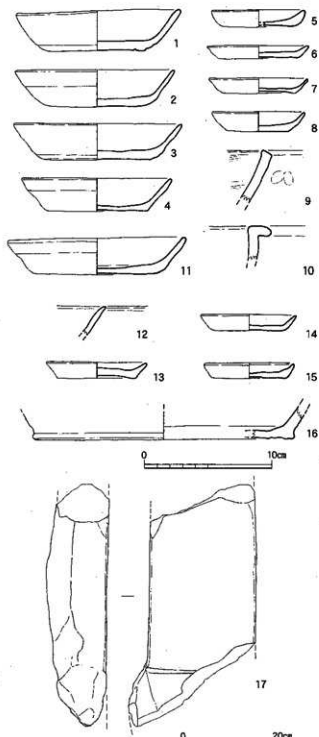
第13図 断ち割りトレンチ土層図② (1/80)

ここで問題となるのが、(1) I区前面を通る遊歩道(道③)が石塔群と時的に近接しているのか、(2) 斜面のテラス面はどの程度の時期区分が可能であるのか、(3) テラス面の造成はどのようにして行われたのか、3層や4層は流入土なのか盛土であるのか、という3点である。

まず(1)の問題については、I区断ち割りトレンチと道③トレンチ、Ⅲ区各トレンチの土層の状況から、Ⅲ区斜面の各層が遊歩道(道③)及びI区テラス面と連続しており、墓域が造営される段階でこの遊歩道が石塔群へと至る墓道として機能していたことが明らかとなった。この場合墓道は、遺構面が3層以下であることから考えて、4層上面・3層上面が該当するものと思われる。これに対して、南東側上方に続く遊歩道(道①②)は、断ち割り5トレンチの土層観察結果から、Ⅱ区斜面・P群の一部などを削り出し、また盛土を行って後世に造成された道と考えられる(第32図参照)。

次に(2)の問題については、土層観察の結果からは大きく4層上面と3層上面という2つの時期が想定される。これはC群・D群・E群・I群・J群付近で顕著に現れているが、石塔群が上下層に重なって出土することからも確認できる。ただし前述のようにP群より北側では3層が認められず、またⅡ区斜面は地山を削りだした上にほぼ直接石塔群を築いていることから、これらの箇所には層位による時期区分は適用できない。したがって、土師皿や石塔の型式等から時期を決定する必要がある。

(3)の問題であるが、P群の南側(Ⅱ-16区)及び断ち割り4トレンチから大型の花崗岩塊が多量に出土しており、この両者を結ぶライン周辺が谷部となって奥まっていたものと考えられる。4層はこの上に堆積しており、基本的にはこの谷の最奥部に流れ込んだ流入土と考えられる。A群～C群の下層遺構・D群・E群は奥行きも広く幅も広いテラス面の上につくられているが、このテラス



第14図 断ち割りトレンチ出土遺物実測図
(1/3・1/8)

ら出土。16は復元底径20.5cmの底部片である。土師質で茶褐色を呈す。17は大形の花崗岩製板碑で、上半と下端部を欠失している。現存長最大68.4cm、本体の幅30cm、最大厚17cmである。

第15図はI区3層・4層から出土したものである。1～7は坏aで、12cm前後のものと13cmを超えるものがみられる。1は復元径16cmであり、12c代まで遡る可能性がある。8～13は小皿a、14～19は小皿bである。20は須恵質の胎土の口縁部片で、外面は茶褐色の鉄釉がかかる。21は龍泉窯

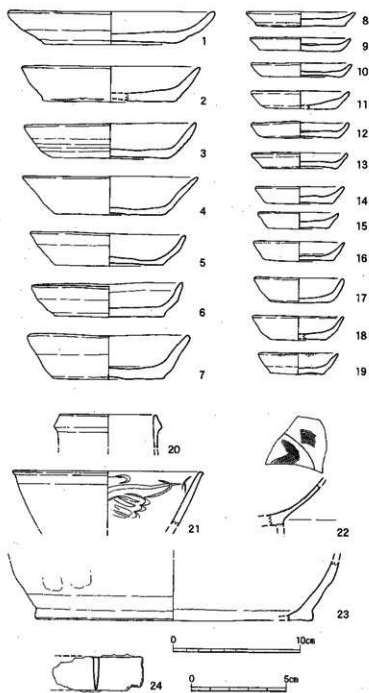
面は4層を削りだして造成されたものと考えられる。

3層については、H群から道③1トレンチ・Ⅲ区1トレンチを結ぶラインの南側にほぼ限定されるが、盛土であるか流入土であるかを判断する積極的な根拠は乏しい。これについては、各石塔群及び出土遺物の検討に基づいて再度検討することにした。

3. 断ち割りトレンチ及び3層・4層の出土遺物(第14・15図・図版31)

ここで最初に遺物の報告について若干ふれておきたい。本調査区については、特にその遺構と関連するもののみを図示(板碑や蔵骨器、ビットに伴う土師器・陶磁器類など)、それ以外の包含層中から出土したものについては後からまとめて図示する。Ⅱ区1～8トレンチについては、各トレンチごとに出土遺物を図示する。また出土量が多い土師皿については、太宰府編年(太宰府市史編集委員会1992)を参照しつつ、坏a・坏b・小皿a・小皿bの順番で記載する。なお土師皿の法量等については表1にまとめているのでそちらをご参照いただければ幸いである。

第14図は断ち割りトレンチ1～4から出土した遺物である。1～10は1トレンチから出土したもの。1～4は坏a、5～7は小皿a、8は小皿bである。9・10は土鍋の口縁部か。いずれも土師質で、10の外面には煤が付着する。11～15は3トレンチから出土。11は坏a、12は青磁の口縁片、13～15は小皿aである。16・17は4トレンチから



第15図 I区3層～4層出土遺物実測図(1/3・1/2)

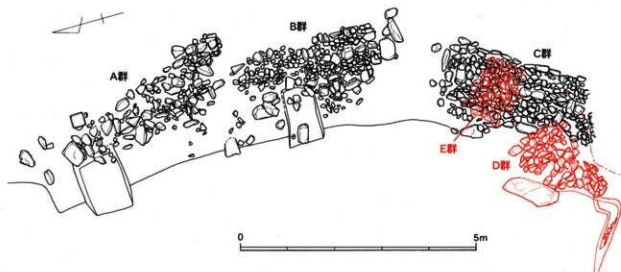
系の青磁片で内面に花文を描く。
 22はやや緑がかった白色を呈す白磁碗片で、内面に文様を施す。23は第14図16と同一器種で、同一個体の可能性もある。内面はヨコナデ、外面はナデの他に一部指頭圧痕が見られる。24は刀子状の鉄製品で、現存長が4.25cm、幅が1.75cmである。

【土器・陶磁器関係文献】

太宰府市教育委員会 2000 『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編一』、太宰府市の文化財第49集、太宰府市教育委員会、／太宰府市史編集委員会 1992 『太宰府市史考古資料編』、太宰府市、／中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』、真陽社、／中島恒次郎 2003 『Ⅱ、遺跡の時間軸上での位置づけ』、『大宰府条坊跡XVI—分析編一』、太宰府市の文化財第52集、太宰府市教育委員会、／山本信夫 1990 『統計上の土器—歴史時代土師器の編年研究によせて—』、『乙益重隆先生古希記念論文集 九州上代文化論集』、乙益重隆先生古希記念論文集刊行会、／横田賢次郎・森田勉 1978 『大宰府出土の輸入陶磁器について』、『九州歴史資料館論集』4、九州歴史資料館。

第2節 I区・II区(-9~16)・III区の調査

本節では、本調査区の各遺構・出土遺物について、石塔群・蔵骨器・土坑とそれに伴う遺物、包含層からの出土遺物という順番で記述を進める。



第16図 図A～E群位置関係図(1/80)

1. 石塔群と出土遺物

(1) A群～E群(第16～23図、図版5～9)

調査区中央の南側のテラス上に位置する石塔群は、それぞれまとまった分布を示しており、北からA群・B群・C群とした。このC群の下層からはD群とE群の2群が出土しており、築造期間は大きく2時期以上に分かれるものとみられる(第16図)。

①A群 約4m×1.2～1.5mの範囲に広がる石塔群である。ここでは北側と南側にそれぞれ立石を中心とする一群がみられる。下層の状況から、北側の一群が先につくられ、これを南東方向に拡張する形で墓の造営が行われているのがみとれる。A群・B群の両者いずれも、下層が4層上面に、上層が3層上面につくられている。A群の最下層では4基の納骨ビットを検出したが、これ以外にも包含層中から多量の火葬骨片が出土している。明瞭な単位は確認できなかったが、ここでの追葬は、火葬骨を散骨した上に土や石を被せるという方法を採用しているものと考えられる。また北端部から五輪塔火輪が天地逆で出土したが、この直下からも火葬骨が集中的に出土しており、これを墓標として転用した可能性も想定される。

A群出土遺物(第19図1・図版36) 第19図1は北端部で出土した花崗岩製の火輪で、高さ14.9cm、最大幅27.7cmである。頂部には円形の接続部がみられる。

②B群 約3.7m×1.7mの範囲に広がる。A群との間には若干の空間がある。ここでもA群と同様、大きく北側・南側にそれぞれ立石を中心とした一群があり、その間の空間を埋めるように石材が敷き詰められている。下層では、計6ヶ所の納骨ビットと蔵骨器1基を確認した。蔵骨器は南端部で据え置かれた状態で出土している。またNo.7とした箇所では蔵骨器片と火葬骨が出土したが、この蔵骨器片は南端の蔵骨器と同一個体であり、上から流出したものと考えられる。南側では、P6付近の立石を中心に構成されている。墓域の拡張は、手前側となる西方向に行われているようである(P3)。また北側の最下層では石列による区画が検出された。B群においても、石材を取り外して

下層の遺構を検出する過程で多量の火葬骨が出土しており、A群と同様に、散骨した後その上に土・石を被せるという方法で追葬が順次行われたものと考えられる。また納骨ピットのうちP4では、火葬骨とともに白磁の小椀1点と青磁片1点、ガラス玉1点が出土している。

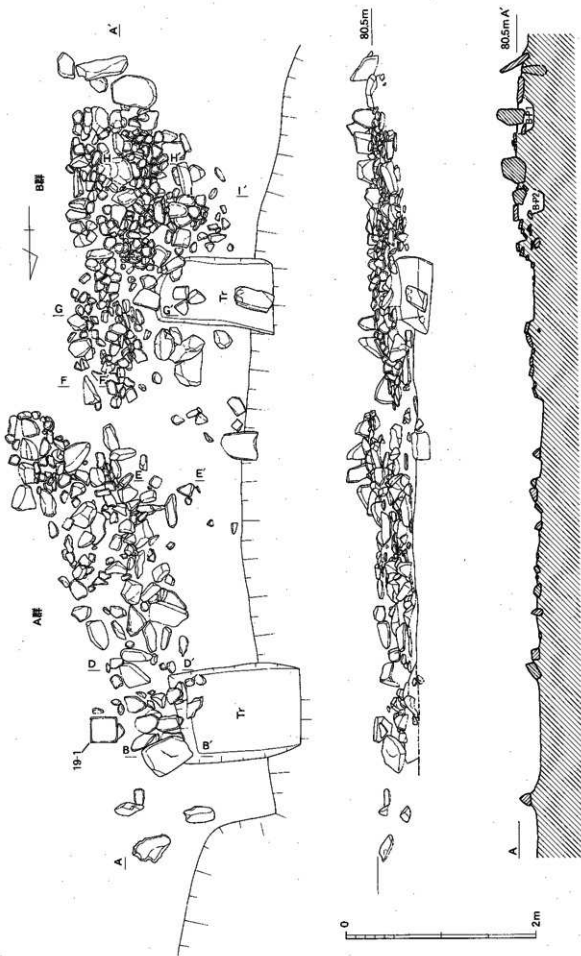
B群出土遺物 (第19図2～6・図版31) 第19図2は青灰白色を呈す瓦片で、磚か。P4のやや南東側で、足元に敷き詰められた石の中から出土した。ナデ調整で、部分的に指頭圧痕がみられる。3は南端から出土した蔵骨器で、釜を転用したものか。外面は刷毛目のちへラミガキで丁寧に仕上げられる。内面は刷毛目で底部は一部指頭圧痕。把手は両方とも欠損している。口縁外面には菊花文を施す。口縁径14.5cm、胴部最大径22.4cm、高さ14.3cm。4～6はP4から火葬骨とともに出土した。4は龍泉窯系青磁碗片で、復元口径16.5cm。内面に花文を施す。5は小形の白磁碗で、底部のみ露胎。口径8.15cm、器高4.15cm。6はガラスの小玉で、少し緑がかった青白色を呈す。上下不明。幅約1cm、最大厚5mm、孔径4.5mmである。

③C群 約3.8(+α)m×1.5～1.6mの範囲に広がり、石列による区画が認められる。南端部は調査区外に続いている。立石が横一列で並んだ状態で出土した。納骨ピットは8基出土した。また火葬骨P1として取りあげたものは、P6とP7に範囲がまたがっており、独立したピットではない。納骨ピットはいずれも立石や石材の直下で検出されており、それらとの対応関係が認められる。また下のD群の上面に流入した状態で板碑1点と相輪頂部片1点が出土している。C群はこれらの流入後につくられたと考えられる。このうち相輪はⅡ区4トレンチで出土した相輪片と接合することが判明した(第63図22・23)、C群自体は3層上面につくられている。

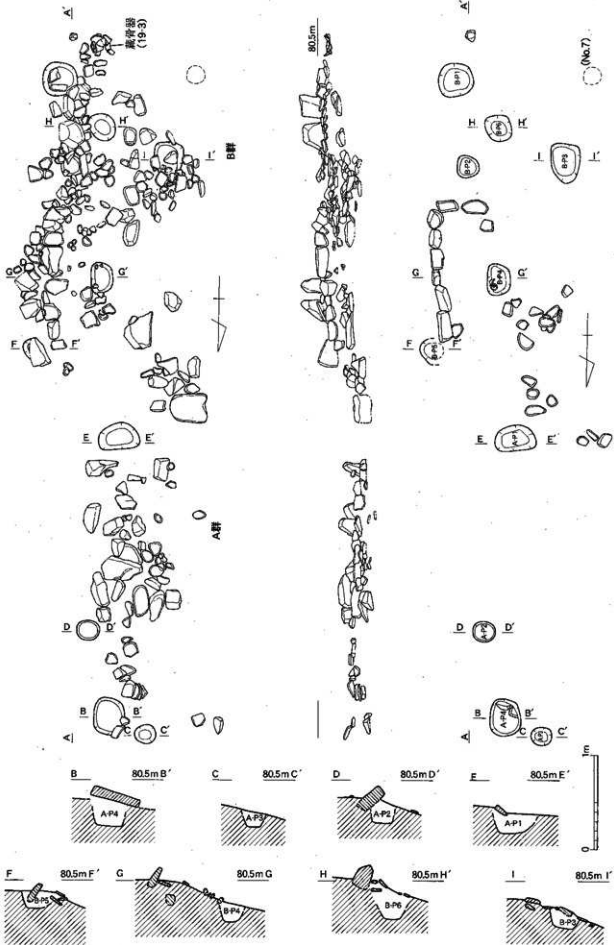
C群及びC群下層出土遺物 (第21図・図版32) いずれもC群及びC群の下層(=D群の上層)の包含層から出土したものである。1は軟質で淡茶褐色を呈す瓦片。C群南端部付近より出土。凹面はナデ、凸面は格子目のタキを施す。2は花崗岩製の板碑で額部を明瞭につくりだし、正面に梵字キリクを刻む。下端部は欠損。現存高35cm、幅16.9cm、最大厚8.4cm。3は白磁碗の口縁部片。外面は風化が進む。内面は灰白色の釉がかかる。4～15は坏aである。口径13cmを越すものが多く含まれる。16～23は小皿a、24はやや径が大きく小坏か。25～28は小皿bである。

④D群 約1.9m×1.3mの範囲に広がる。C群の下層に位置する。南側はJ群と隣接しており、断ち割り調査のためサブトレンチを設定している(第32図、J群の項参照)。D群は、北側に立石を中心とした区画があり、これが南側に拡張されている。北側立石の周囲は石が敷き詰められている。両区画について、石材の取り外し・断ち割り調査を行ったが、下層からは火葬骨片やピットは出土していない。C群の下層から火葬骨が出土していることから、散骨して土を被せるといった埋葬方法が行われた可能性などが考えられる。4層上面につくられており、上の3層上面につくられたC群とは時期差がある。

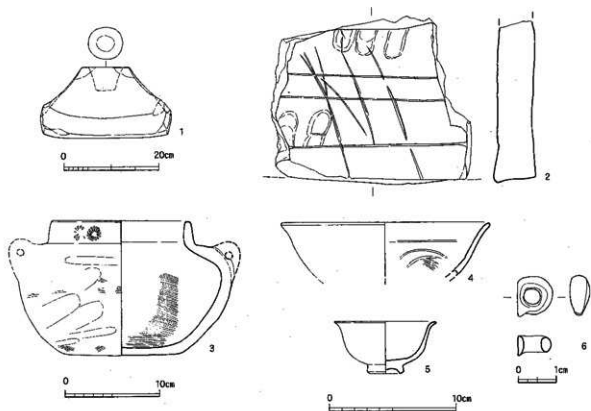
D群出土遺物 (第49図1) D群の下層から、陶器口縁片が1点出土している。外面は暗褐色の釉がかかる。小破片であり径等不明。



第17圖 A群・B群上層実測圖 (1/40)



第18圖 A群・B群下層測區 (1/40)



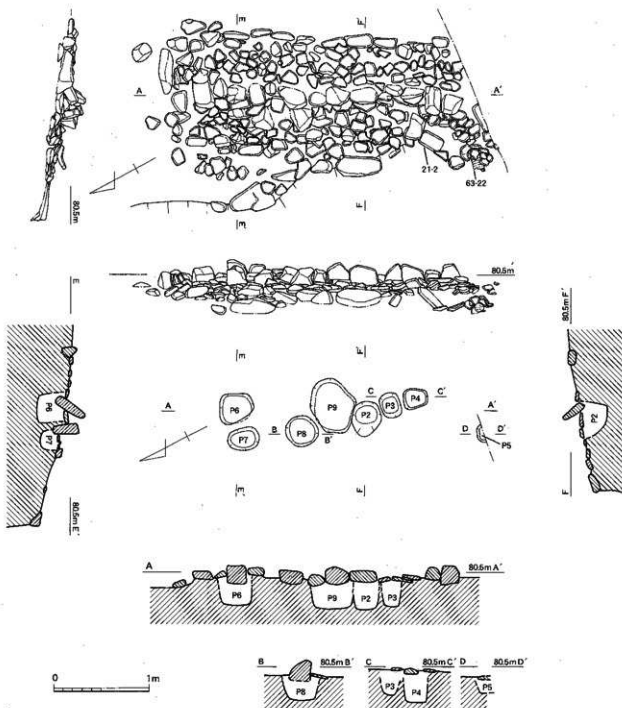
第19図 A群・B群出土遺物実測図(1は1/8、2・4・5は1/3、3は1/4、6は1/1)

⑤E群 約1.3m×1.0mの範囲に広がる、立石を中心とした長方形の区画である。C群の直下に位置する。検出面はD群とほぼ同じレベルである。ここでも石材を取り外して下部の遺構検出を行ったがピットや火葬骨は出土しなかった。このため石材の範囲とほぼ同じ大きさでトレンチを設定し下部を精査した結果、D群と同様に4層上面を掘り込んでつくられていることを確認した。

(2) F群 (第24図・図版10)

約3.8m×1.9mの範囲に広がる区画で、北側の区画辺は崩落して失われている。ここでは一石五輪塔2基と板碑1基が前方に倒れ込む形で出土した。板碑は根元が原位置を保っているが、一石五輪塔はそれぞれP1・P2に据え置かれていたものと考えられる。この場合、これらの石塔と区画前面との間が広く空くことになるが、ここには直下に位置するG群の背後の斜面に流れ込んだ多量の土師皿が供献されていた可能性などを考えることもできよう。またピットが6ヶ所検出されており、このうちP1・P2・P3から火葬骨が出土しているが、特にP1からは多く出土している。また土層観察から、F群は4層上面に構築されていることが確認できた。

F群出土遺物(第25図・図版36) 1・2は砂岩製の一石五輪塔、3は花崗岩製の板碑である。1は高さ112.8cmで水輪部の正面に梵字バクを刻む。2は高さ110.4cmで同じく水輪部正面に梵字タラクを刻む。1・2はほぼ同一規格で、いずれも下約25cm程度は粗い整形痕を残している。3は明瞭に額部を削り出し、正面に梵字キリークを刻む。完形で高さ70.6cm、幅21.2cm、最大厚13.8cm。

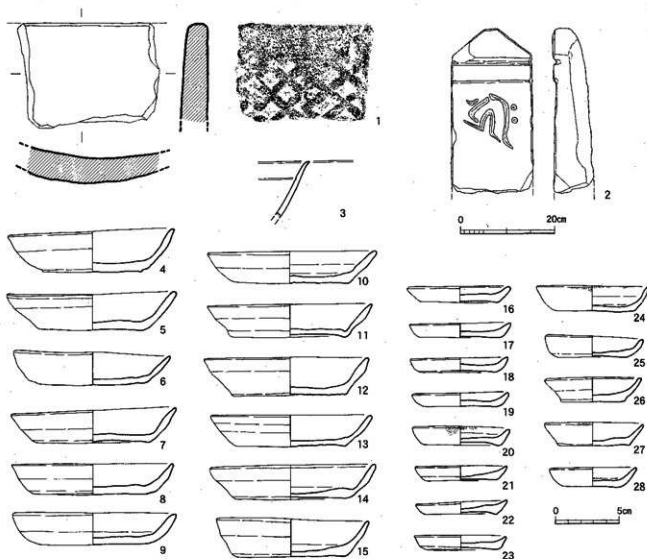


第20図 C群実測図(1/40)

(3) G群(第26図・図版11)

F群の下の平坦面に位置する、自然石の板碑を主体とする一群である。下層から3基の納骨ピットが出土した。砂岩製の板碑1基が原位置を保っているが、上半部が欠失している。他は自然石の板碑が前方に倒れ込んでいる。北端で出土した花崗岩の板碑は下端部が欠損していることから、上方から転落してきたものと考えられる。G群自体は4層上面に掘り込まれている。またここでは背後の斜面で多量の土師皿が出土した。これらの多くはF群に供献されたものが流れ込んできたものと考えられる。

G群出土遺物(第27図・図版32) 1は砂岩製板碑の下半部。上半は欠損している。前面に粗い敲打

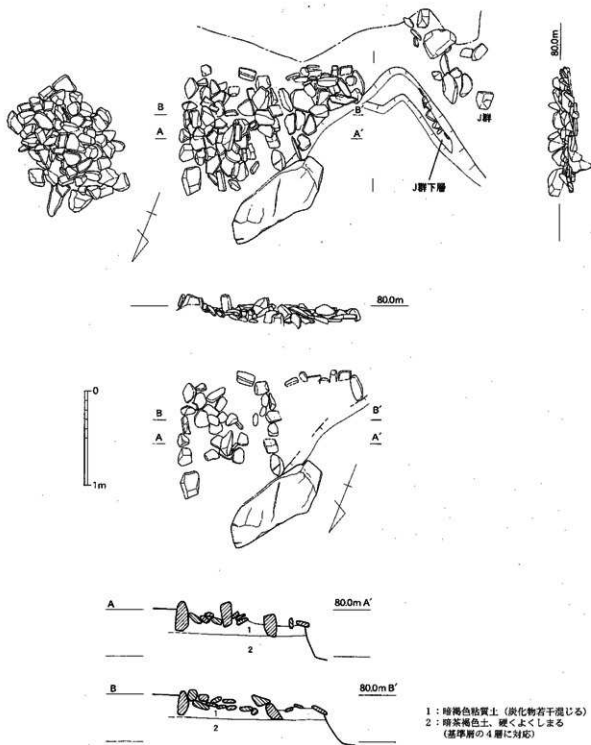


第21図 C群及びC群下層出土土物実測図 (2は1/8、他は全て1/3)

による整形痕がよく残っている。現存高25cm、幅21.3cm、厚さ8.2cm。2～31は坏a。12cm台前半のものが多いが、13cm前後や12cm台後半のものもみられる。32～34は小皿a、35～41は小皿bである。いずれも7cm前後かそれ以下の大きさである。

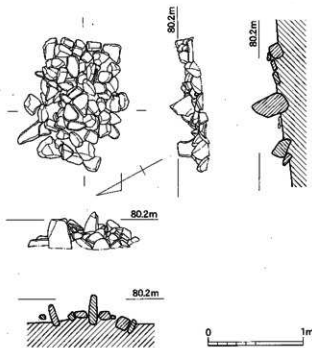
(4) H群 (第28図・図版11・12)

五輪塔地輪2基を中心として南北にのびる区画である。5.9m×1.2mの範囲に広がる(ただし大きく2群に分かれ、石列を伴い南北にのびる一群は4.6m×1.2m、南側の一群は1.4m×1.0mである)。前面・後面ともに石列を配して区画を行っている。大型の地輪の北側には花崗岩の板碑の根元のみが原位置で残存するが、上部は欠失している。納骨ピットは合計4基を検出した。石材除去後の下層の状況を見ると、地輪2基と板碑にそれぞれ対応するように3基の納骨ピットがみられ、特に大型地輪の下部にあたるP3のまわりには、大きさ10cm前後の石が円形に配置されていた。本区画は、このP1～P3付近、すなわち五輪塔2基と板碑を中心として、南北方向にそれぞれ拡張されているものと考えられる。またH群は3層上面に掘り込まれている。



第22図 D群実測図 (1/40)

H群出土遺物 (第30図 1～4・図版33・36) 1は花崗岩製板碑の下半部で、上半は欠失。現存高21cm、幅19.5cm、厚さ10.2cm。2・3は花崗岩製の五輪塔地輪でいずれも完形品。2は大型で最大幅40.3cm、高さ20.5cm。下部は内側に丸くすり鉢状に削り込んでおり、痕跡が明瞭。3は最大幅26.2cm、高さ12cmで彫り込みはみられない。4は石材除去後に下層より出土した小皿bで、復元口径8.2cm、底径3.1、高さ2.0cmである。



第23図 E群実測図 (1/40)

(5) I群 (第29図・図版13)

H群と連続するテラス上の南側で検出した。約5m×2mの範囲に石材が散乱する。C群・D群の下方にあたり、D群との間には50cm前後の段差がある。空風輪の破片や自然石板碑が散乱するが、全体的に倒壊が進んでおり、石塔群自体の遺存状態はよくない。これらの石材の下層では、P1～P4の納骨ピットが出土している。大きくは、【P1・P4】、【P2A～P2C】、【P3】の3群に分かれている。P1・P4は、P4→P1という前後関係が認められる。P2A～P2C及びP3付近では、納骨ピットと共に土師皿が出土した。P2A～P2Cは、切り合い関係からP2B→P2A・Bという前後関係が想定される。土師皿の中からも火葬骨が出土していることから(図版13-6)、ピットが掘り込ま

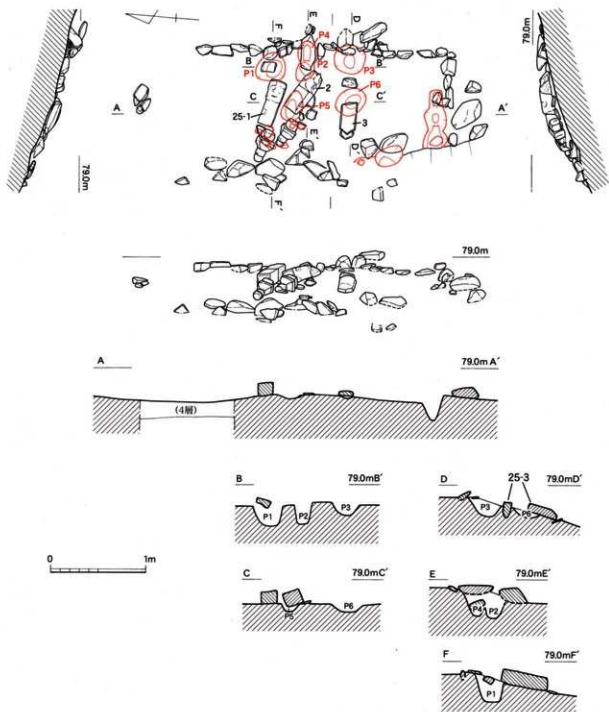
れ、土師皿が置かれた後、その上に火葬骨が納められていると考えられる。

本群の南端付近では花崗岩を丁寧に磨き上げた板碑(立石)が1基出土している。ピットや火葬骨等は見られない。またその80cmほど西側では径約20cmの範囲(標高79.5m前後)で炭がまとまって出土した。これは次に述べるJ群下層の傍にあたり、レベルもJ群下層とほぼ同一である。そしてこの炭がまとまっている範囲の下約20～30cm、標高79.2m付近の包含層中から、ほぼ完形の龍泉窯系青磁碗1点が出土した。これは土層上での対応関係からは、4層上層にほぼ該当する。先述のJ群下層よりは20cm程度低い位置にあたる。付近からは火葬骨は出土しておらず、またピットも検出されていないため、これが埋葬行為に関わるものであるかを判断することはできない。ただし、青磁碗自体が殆ど摩滅しておらず、出土状況も斜めではあるが程度正位置を保っていることから、人為的に埋められた可能性も否定できない。いずれにしても、4層上面からこの青磁碗が出土していることにより、4層の年代に1つの定点が得られることになる。以上から、I群付近については、4層上面で埋葬行為が行われた後、それが埋没して3層が形成される段階で周囲に石塔群が造営されていた可能性が想定できる。

I群出土遺物(第30図5～12・図版33) 5～10は坏aで、6は中島恒次郎氏(2002)の分類という坏a2か。口径は最も大きい5で13.5cm、火葬骨を伴うものは13cm前後のものが多く、13世紀中頃の時期が考えられる。11は小皿aで口径8cm。12は南側のサブトレンチより出土した龍泉窯系青磁碗。外面は鋳進弁文を施す。底部は露胎。口径16.4cm、底径5.7cm、器高6.7cm。横田賢次郎・森田勉両氏の分類(1978)でいうI5b類にあたる。時期は13世紀前半以降で、土師皿の年代ともほぼ一致している。以上から、I群の下層、すなわち4層上面の年代の上限は13世紀中頃と考えられる。

(6) J群 (第31図・図版14)

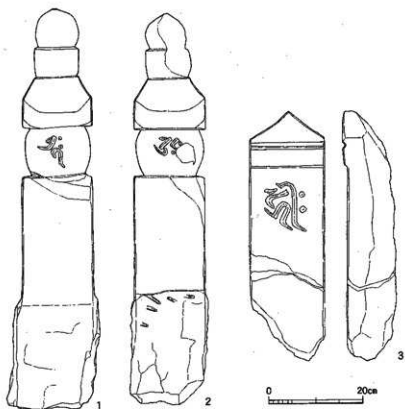
I群南側で北西側に張り出した段上で検出した。本区画付近は現状で保存されることから、実測



第24図 F群実測図(1/40)

終了後そのまま埋め戻している。本群の北東端はC群・D群とほぼ同じレベルで隣接しているが、断ち割り調査のためサブトレンチを設定している。なおこのサブトレンチにおいて、J群の下層にもう1層別の墓が検出され、C群・D群同様、上層・下層の2時期にわたって墓がつくられていることが明らかとなった(第32図)。J群自体は3層上面につくられており、C群と併行する段階のものと考えられる。

このJ群では、約4.5m×1.5m前後の範囲から、立石が前後に6列、計13基以上確認され、かつ



第25図 F群出土遺物実測図(1/8)

それらはほぼ全て軸をそろえて正面を西南西に向ける。立石が前後に並ぶのが大きな特徴である。第31図では、各列の正面観を個別に抽出して図示している。また軸が西からやや南に振れているが、これは地形の制約によるものと考えられる。立石はいずれも平滑に仕上げられている。3ヶ所で火葬骨が集中して検出された。また砂岩製の五輪塔火輪1点が出土している。

(7) K群(第33図・図版15)

I群下のテラス面のやや北よりの位置から、南北に2基並んで自然石を利用した板碑が出土した。いずれも正面をほぼ西に向けてい

る。北板碑の北側から納骨ピットが1基出土している。付近からは斜面上方から流入したと考えられる凝灰岩製の五輪塔片やその他の石材が多く出土している。

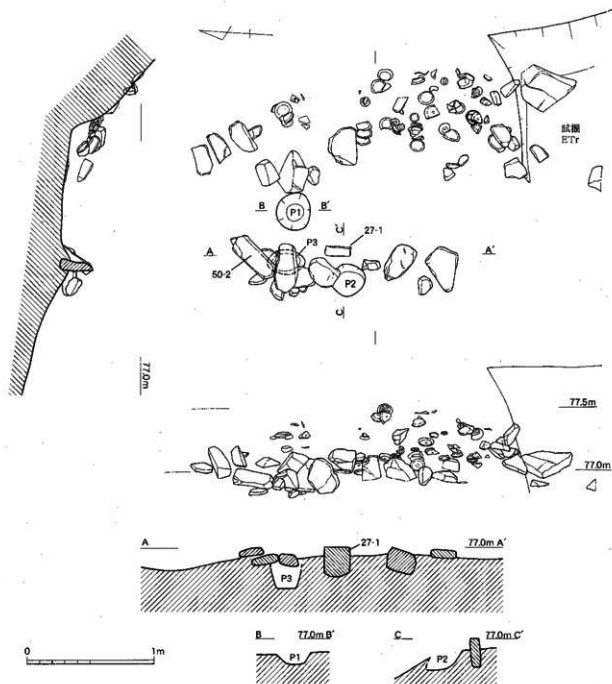
(8) L群(第34図・図版15)

K群北側のやや低い位置から、花崗岩の自然石を利用した板碑が1基出土した。この自然石板碑の前面からは、この板碑に供えられたと考えられる土師皿が出土している。このうちの1点から、銅銭が5枚折り重なった形で出土した。なお、この周辺からは納骨ピットは確認していない。

L群周辺出土遺物(第35図・図版33) 1~10は、いずれも板碑周辺で出土した糸切り底の坏びで、出土状況に図示したものが1~3である。口径は1や7の10.8cmが最大で、概ね10cm前後に集中している。11~15は、土師皿の中から上からこの順番で重なった状態で出土した5枚の銅銭である(14・15は順序不詳)。11・12と14・15は、それぞれ字が書いてある面同士をあわせて重ねてあった。11は一番上で出土したもので、「永通寶」の字が見える。永楽通寶(明、1408年)か。径2.4cm、孔幅5.5mm。12は「□□元寶」で、字体から紹聖元寶(宋、1094年)が考えられる。径2.3cm、孔幅6mm。13は「聖宋通寶」(宋、1101年)か。径2.5cm、孔幅7mm。14は径2.5cm、孔幅5.5mmで、逆側からの字体を観察した結果、永楽通寶の可能性が考えられる。15は径2.35cm、孔幅6mmで詳細不明。

(9) M群(第36図・図版16)

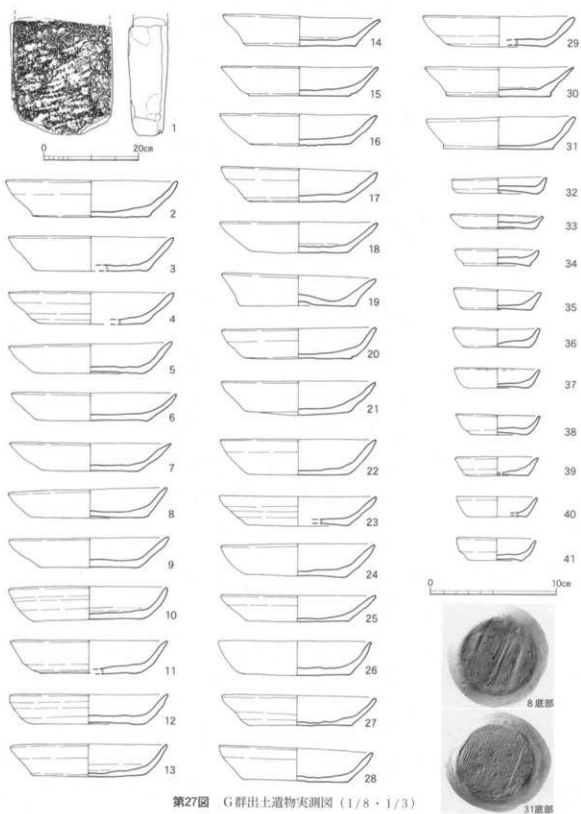
II区斜面の最上段のテラス面で出土した。この真上にはII区8トレンチの大形花崗岩塊が立って



第26図 G群・土器出土状況実測図 (1/30)

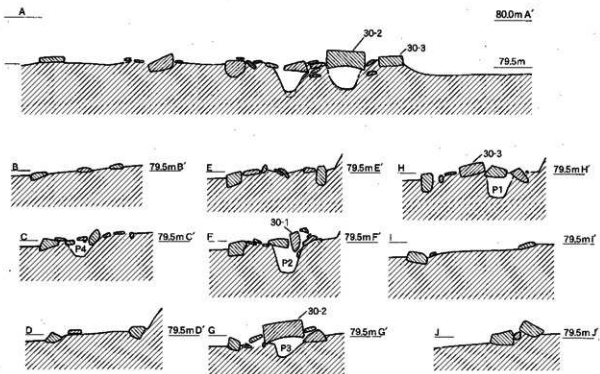
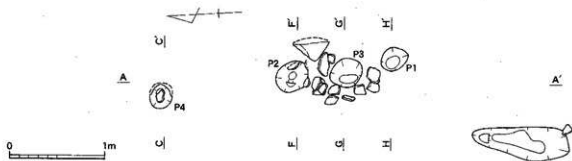
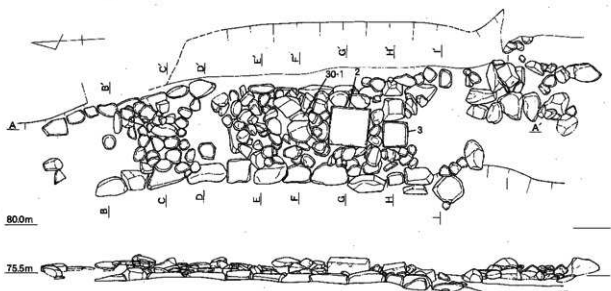
いる。ここでは、3.1m×1.2mの範囲で立石を中心に南北にのびる一群と、その南東側のP3・P6を中心とする一群という大きく2つの墓群が認められる。さらに、これら2つの墓群の南西側には、斜面をテラス面として区画するかのように、大形の石材を用いて石列が築かれている。これは幅3.8mに及ぶものである。

南北にのびる一群では、6基の立石とP2・P4・P5の3基のピットが確認され、このうちP2からは特に多くの火葬骨が出土している。立石は全て前方に倒れ込んでいるが、3基のピットそれぞれに2基ずつの立石が対応している。

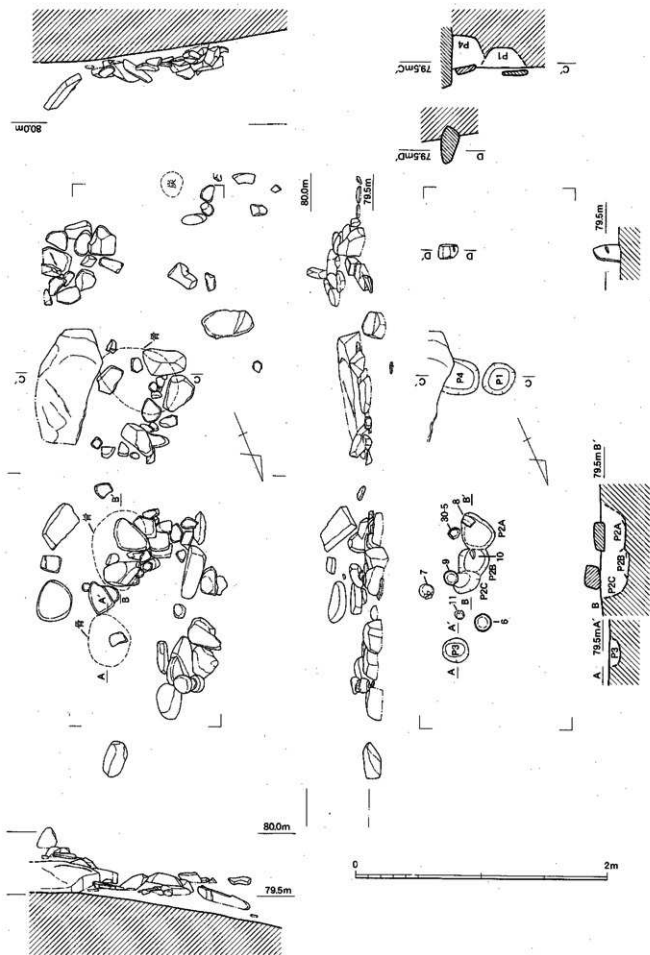


第27図 G群出土遺物実測図 (1/8・1/3)

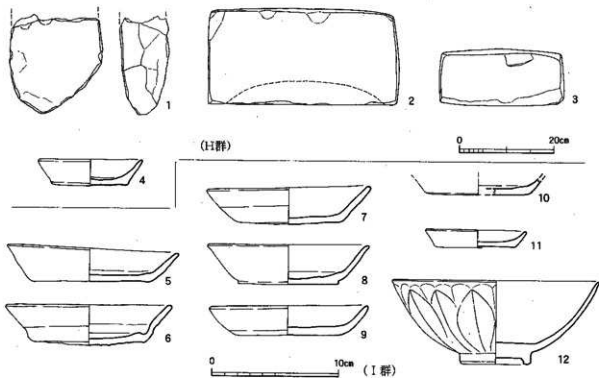
南東側の一群では、石列の並び方からみて、P3とその周囲に石列をめぐらせた墓が築かれた後、P6とその西側の石列が拡張されたものと考えられる。このうちP3とその区画内からは火葬骨がまとめて出土している。また南西側の石列による区画の内側は緩斜面となっているが、ここでもP1から火葬骨が出土している。



第28圖 H群実測圖 (1/40)



第29图 I群夹测图 (1/30)



第30図 H群・I群出土遺物実測図(1~3は1/8・他は全て1/3)

00 N群(第37図・図版17)

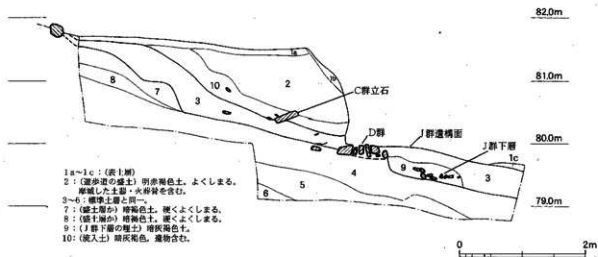
Ⅱ区北側斜面でM群の下のテラスから出土した。ここでは梵字キリクを刻む板碑1基と、自然石板碑が3基、納骨ピット1が、約1.8m×1mの範囲で出土した。個々の板碑はそれぞれ単独で立っている。またこの一群から1~2m北側の位置でも石材や火葬骨がまとめて出土しており、元来は周辺にも板碑等が造立されていた可能性がある。納骨ピットは1基のみであるが、火葬骨自体は板碑周辺からも出土しており、またN群下の斜面の包含層から多量の火葬骨が出土していることから、火葬骨を板碑の周辺に散骨し、土を被せるといった埋葬方法が採られた可能性が考えられる。
N群出土遺物(第38図・図版33・36) 1は花崗岩製の板碑で、正面に梵字キリクを刻む。額部を明瞭に削りだしている。高さ52.2cm、幅16.6cm、最大厚11.6cm。2はP1から出土した土師質の小形鉢片で、蔵骨器か。口縁付近に2本の沈線で挟まれる形でスタンプの花文が施される。外面へラミガキ、内面はナデ。復元口縁径13.0cm、胴部最大径14.7cm。

01 O群(第39図・図版17)

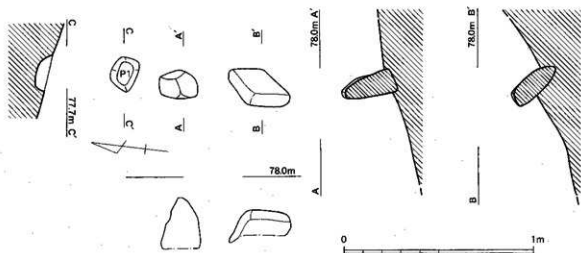
Ⅱ区北側斜面で他の石塔群からやや離れた位置で出土した。2.9m×1.1~1.2mの範囲に広がる。南側は後世の擾乱によって一部破壊されている。石列によって区画が設けられているが、図中央の縦石列によって大きく南北2群に分かれており、それぞれに立石が伴う。下層では納骨ピット2基(P1・P2)、炭化物を多く含むが火葬骨を含まないピット1基(P3)を検出した。P3の周辺では緑泥片岩の川原石がまとめて出土しており、またその周辺からは若干の火葬骨が出土している。



第31圖 J 群英洲圖 (1/40)



第32図 断ち割り5トレンチ土層図(1/60)



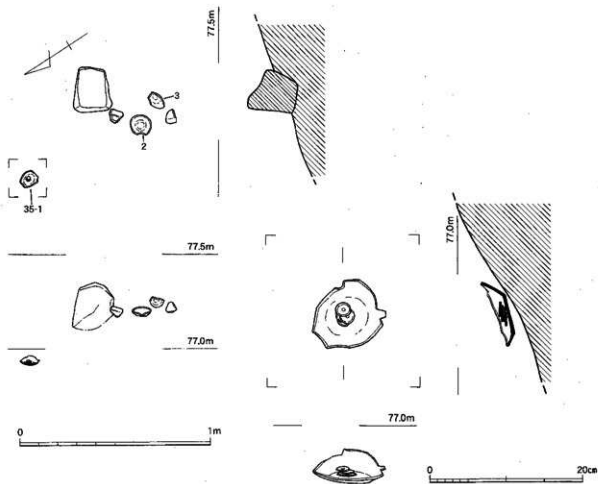
第33図 K群実測図(1/20)

(12) P群(第40図・図版18-19)

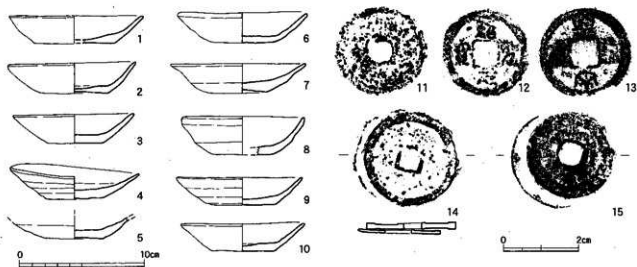
Ⅱ区北側斜面の独立したテラス上に南北に広がる石塔群である。5.7m×1.5~2.2mの範囲に広がる。板碑及び立石を主体とする一群であり、五輪塔はみられない。梵字を刻んだ板碑が南側で3基出土している。また下層からは計33基のビットが検出され、そのうち31基から火葬骨が出土した。

各板碑・立石はこうしたビットとある程度対応関係がみられるが、そこにおいても、①板碑・立石の真下にある場合、②左右にある場合、③前面にある場合、④後面にある場合の大きく4つのパターンがある。最も多いのは①である。この点をふまえ、ここでは各板碑・立石について、ビット番号に対応させる形で記述を行う。また墓域の拡張が行われる場合には石列を伴うものが多いが、その場合石列とビットの重なり具合をみるにより、拡張の順序を確認することができる。こうしたビットと立石・板碑との対応関係や、石列とビットの関係など、墓域の形成過程を考慮しつつ墓群を区分すると、P群は大きく以下の8群に区分することが可能である。

まず、P29と26の間に空間があり、また立石や石列においても明確に分かれるため、この空間を



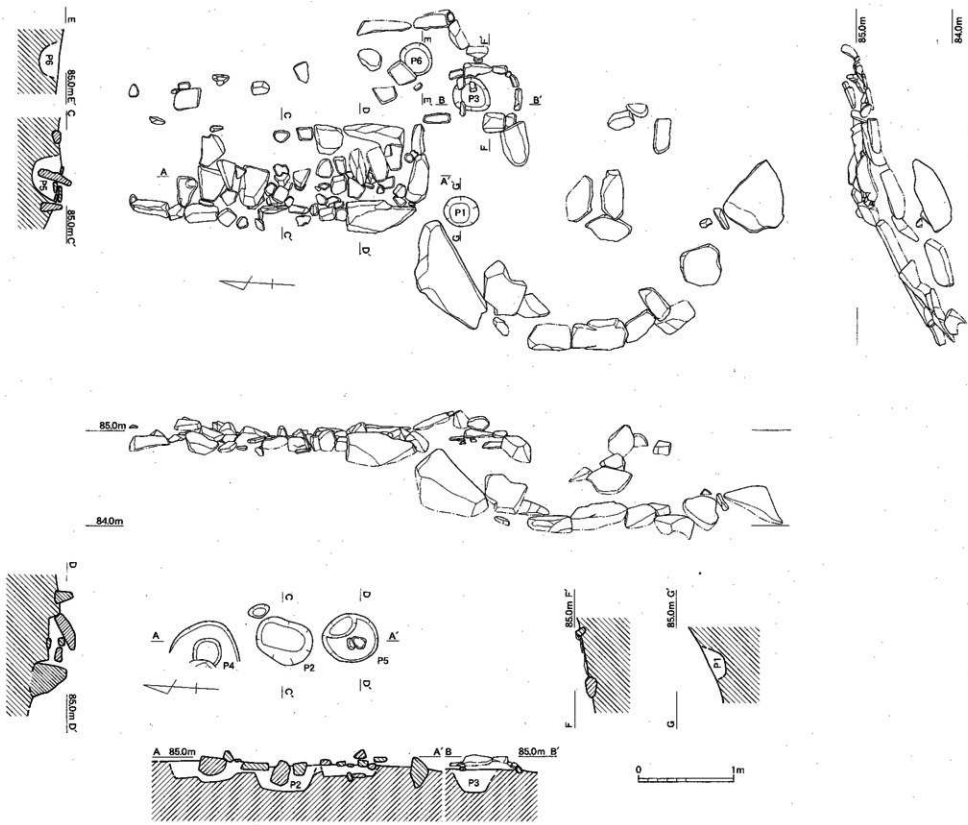
第34図 L群板碑・土師皿出土状況実測図 (1/20・1/5)



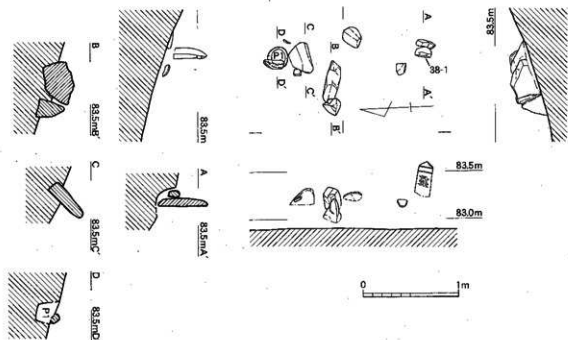
第35図 L群付近出土遺物実測図 (1/3・1/1)

もって北群・南群に区別することができる。北群・南群はそれぞれ〈1群・2群 (+ 〈9〉)〉と〈3~8群〉に細分することが可能である。

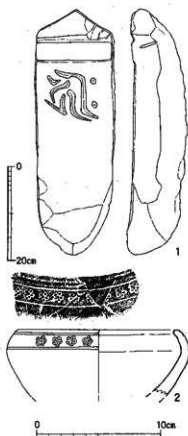
北群は、大きく1群：〈27・30〉、2群：〈10・20・28・29〉及び〈9〉の3群に細分できる。1群は最下層であり、南群の中でも最初につくられている。ここでは1.3m×0.7mの範囲で自然石を並



第36图 M群实测图(1/40)



第37図 N群実測図 (1/40)



第38図 N群出土遺物実測図
(1/8・1/3)

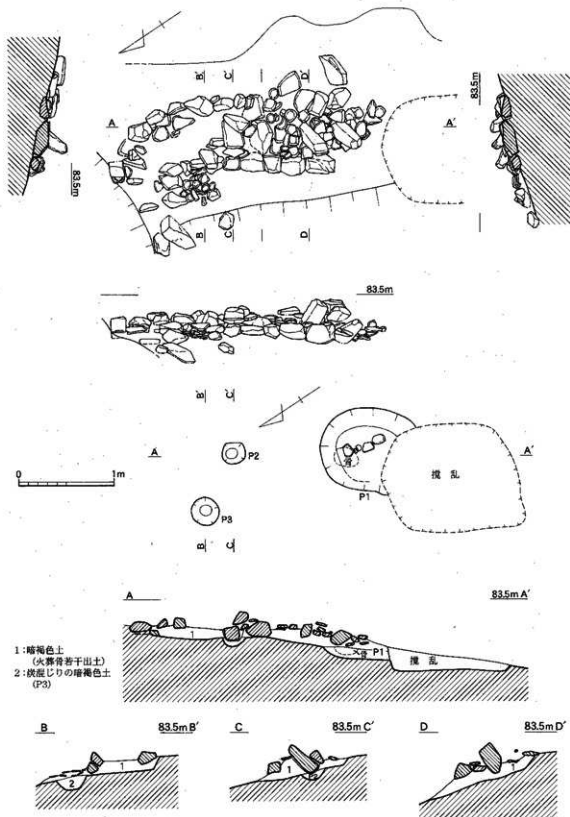
べて墓域を形成する。この1群がつくられたのち、東斜面側に拡張する形で2群の造営が行われたものと考えられる。P9はやや独立した位置にあり、その直上から空風輪が立った状態で出土している。これについては、空風輪を墓標として転用した可能性が考えられる。またA群でも火輪で同様の事例を確認している。

次に、P26より南側を南群とする。造営の順序等から、これを以下のように細分する。

3群：〈7・15・(17)〉、4群：〈4・5・6〉、5群：〈3・2・1・16〉、6群：〈31・8・26・12〉、7群：〈25・13・14・18・(19)〉、8群：〈21・22・23・24〉

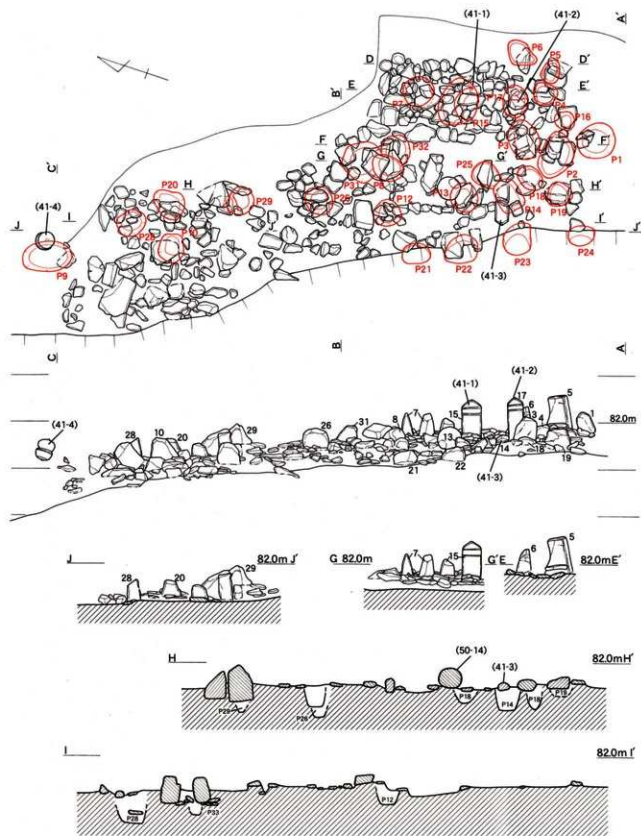
この区分をもとに以下記述を進める。なおこれらの各群は、P群全体の形成過程の復元に基いて抽出した単位であり、何らかの実態を予め想定したものではないことをことわっておきたい。

まず3群は15号板碑 (P15) という大形の板碑を中心に持つ。この15号板碑は本調査区で唯一阿弥陀三尊を刻んだ板碑であるが、石材の配置状況からも、P15はこの3群付近の造営の起点となったものである可能性が高い。またこのP15からP7の前面には石列が配置されており、これらが区画されていることを読みとることができる。この3群の造営と併行するか、あるいは前後する形で南側の4群・5群へと墓域が拡張しているのがみてとれる。

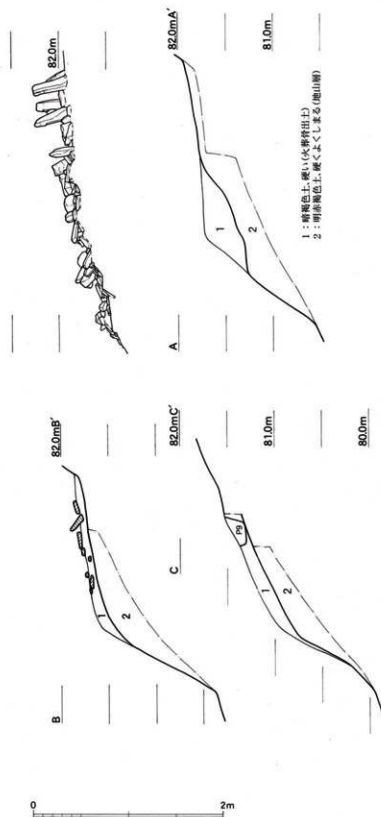


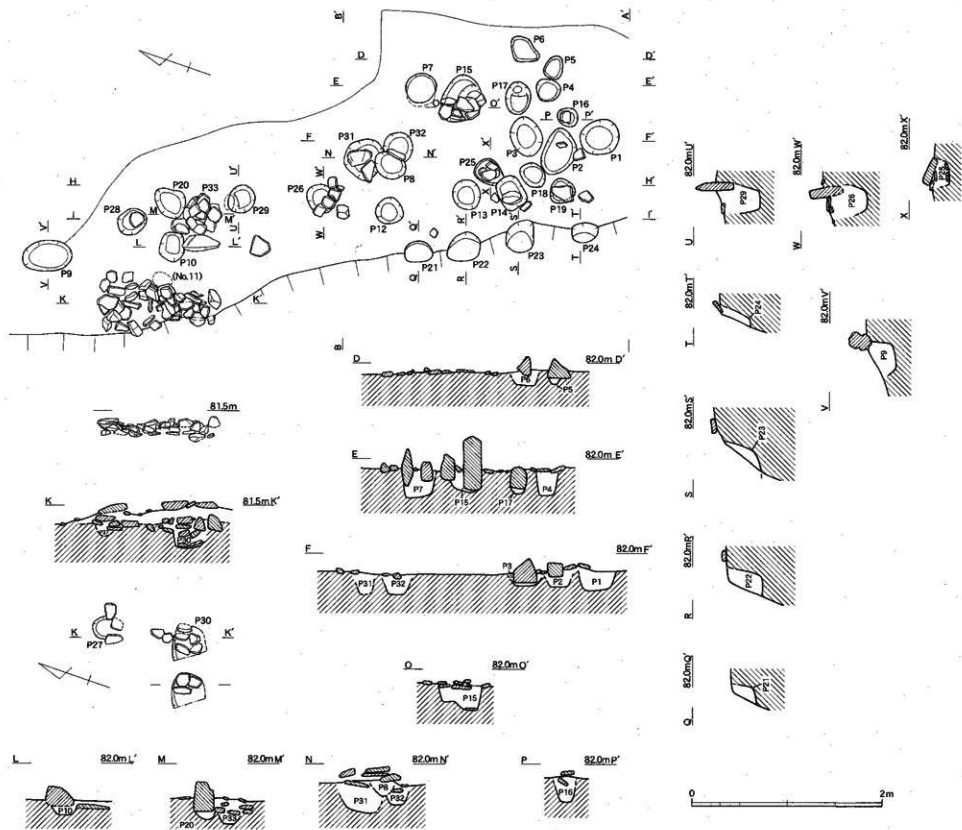
第39図 O群実測図(1/40)

次に6群をみると、ピットの切り合いから、〈P31・32→P8〉という前後関係が確認できる。7群についてみると、13号板碑の前面に石列による区画が認められる。これはP13を埋め戻した後に



第 40 図 P 群尖測図① (1/40)





第40图 P群实测图② (1/40)

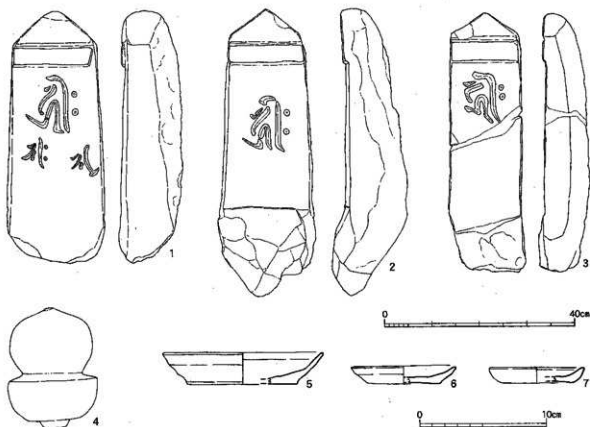
並べているが、この石列の北端がP12のラインと重なることから、P13がP12よりも新しいという可能性が考えられる。いずれにせよ、この石列は7群（P13以降）に伴うものといえよう。ピットの切り合いからは、〈P25→P14〉の前後関係が指摘できる。またP25ではピットの底面に石を敷いているのが確認された。これは1群のP30や3群のP15でも同様に確認できる（図版19）。8群は7群の石列の前面につくられているが、併行関係等は明確でない。またこのP群が造営されたテラスは、おそらくは遊歩道の造営と関連して西側が削りとられており、8群の各ピットも半分以上が削られて壁面に断面が露出した状態となっていた。これは1群のP30などでも確認できる。したがって、P群全体は、西側にさらに広がっていたものと考えられる。

以上各群の形成過程と相互の関係について検討してきたが、それぞれの併行関係等については不明な点が多い。これらの1～8群の中で当初から存在した可能性が高いと考えられるのは、北群では1群、南群では3群と6群である。特に1群ではP30、3群ではP15、6群ではP31というように、比較的大きめのピットをもつ墓が早い段階に築かれ、その後周辺に墓が営まれるという在り方が想定できる。これと関連して、このP30やP15、またP25などではピットの底面に1枚～数枚の石が敷設されている点が注目される。またP群の包含層中からは、多数の土師皿とあわせて大量の火葬骨片が出土している。これについては、石塔群造営後に散骨して土を被せる形で追葬が行われた可能性が考えられるが、それ以外にも、1群で実際にみられたように、土師皿に火葬骨を納めて埋葬したものが含まれている可能性も考えることができる。これについては今後類例の検討が必要となろう。そしてP群では特に顕著であるが、板碑の前面に緑泥片岩を1つ配置することが多い点に注意しておきたい。

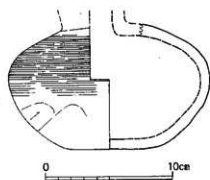
P群出土遺物（第41図・図版36） 1～3はいずれも花崗岩製の板碑。1は15号板碑で、正面上から梵字キリーク（阿弥陀如来）・左にサク（勢至菩薩）・右にサ（観世音菩薩）の阿弥陀三尊を刻んでいる。額部を明瞭に削りだしている。全体に摩滅が進んでいる。完形で高さ53cm、最大幅20.4cm、額部の幅最大17.8cm、最大厚12.8cm。2は17号板碑で、正面に梵字キリークを刻む。額部を明瞭に削り出す。下から19cmほどの部分は、粗削りの面を残している。完形で高さ60.6cm、本体の最大幅20.4cm、額部の最大幅16.4cm、最大厚18cm。3は14号板碑で、正面に梵字キリークを刻む。額部明瞭。下12cmほど粗削り面を残す。完形で高さ54.6cm、幅15.2cm、最大厚9.2cm。1～3のいずれも正面・側面・上部は平滑に仕上げられるが、背面は粗整形痕を残したままである。これは本遺跡出土の花崗岩板碑の全てにほぼ共通する傾向である。4は北端のP9で出土した花崗岩製の空風輪。高さ19cm、空輪部の最大幅13cm、風輪部の最大幅14.2cm。5はP1から出土した坏a片で、復元口径12.6cm、底径8.6cm、器高2.5cm。13c中頃か。6は出土の小皿a片で、復元口径8.2cm、底径5.6cm、器高1.3cm。7はP21出土の小皿a片で、復元口径7.4cm、底径5.6cm、器高1.2cm。

2. 蔵骨器（第42図・図版33）

ここで、蔵骨器のみ単独で出土した一例について報告する。第42図は、A群があるテラスの北端部で出土した蔵骨器である（第10図）。4層上面に小ピットを掘り込み、その中に埋置したものと考えられる。墓縁の有無等については不明である。中には火葬骨が入り、上下につぶれた状態で出土した。蔵骨器を復元したところ、第42図に示すように、須恵器の平瓶であることが判明した。口縁は打ち欠いてあり、破片は周囲からも検出されなかった。上半はカキメを施し、下半は手持ちへうりを施している。上半の外周2/3ほど黒褐色、底部付近は灰白色である。胴部幅15.8cm、底部径



第41図 P群出土遺物実測図 (1~4は1/8・5~7は1/3)



第42図 1区出土須恵器転用
蔵骨器実測図 (1/3)

6.5cm、現存高10cmである。これが古墳時代まで遡るものであるとすれば、何らかの形でこれが中世に至り蔵骨器として転用されたものと考えられる。

3. ビット・土坑と出土遺物

(1) ビット (第43図・図版20)

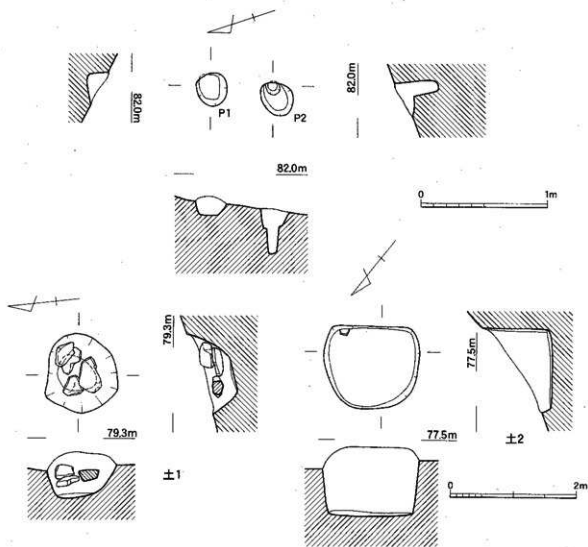
N群の下に位置する斜面から、納骨ビットが2基並んで出土した。どちらも直径20cmほどでほぼ同規模である。P2に関しては細い穴がさらに下に続いているが、これは攪乱等によるものと考えられる。このビット周辺の包含層(斜面の流入土)中からも多量の火葬骨片が出土している。

またこれ以外にも、先に挙げた須恵器転用蔵骨器の近くから、納骨ビットが2基出土している(第10図、第4章第2節参照)。石材を伴わないが、下方に流出した可能性などが考えられる。

(2) 土坑 (第43・44図・図版20)

①土1 H群の正面で検出された土坑である。大きさは62cm×56cm、深さ約20cmである。中からは20cm前後の石が4つ出土したが、火葬骨等は出土しておらず、土坑の性格については不明である。

②土2 L群の南側で検出された土坑である。幅1.5m、奥行き1.3m、深さ最大1.1mであり、斜面



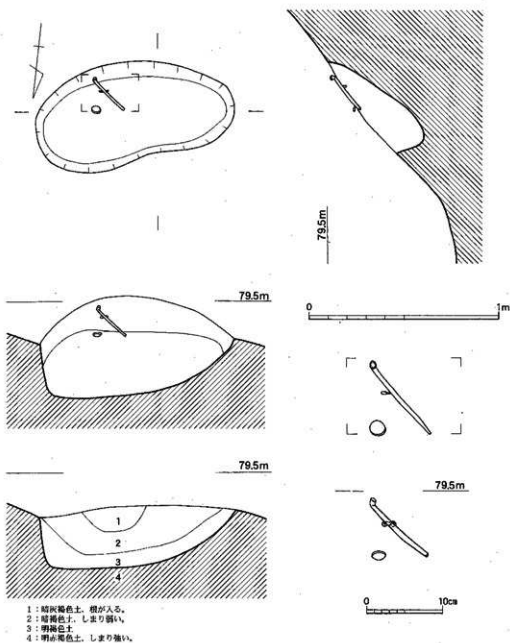
第43図 ビット1・2・土1・土2実測図 (1/30・1/60)

に掘り込まれている。埋土は暗褐色土であり、3層を掘り込む形でつくられている。中からは鉄器1点が出土しているが、火葬骨等は出土しておらず、本土坑の性格については不明である。

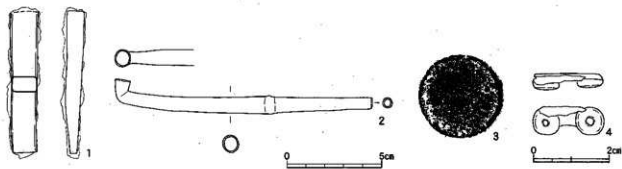
土2出土遺物(第45図1・図版33) 第45図1は楔形の鉄製品で、長さ7.4cm、幅1.3cm、最大厚9mm、最小厚3.5mmである。

③土3 J群のやや下位に位置する土坑である。幅50cm、奥行き30cm、深さ25cmほどの小土坑で、中からはパイプ1・銅銭1・金具1が出土した。これらは1ヶ所にまとまっており、袋状のものに入れられていた可能性が考えられる。銅銭やパイプの形態から本土坑の時期は近代に下ると考えられ、石塔群とは時期が大きく隔たっている。

土3出土遺物(第45図2~4・図版33) 第45図2は銅製のパイプである。長さは13.6cmで、最も太いところで径1cm、細いところで径6mm、先端部の径9mmである。一部節状に膨らんでいる部分がある。3は直径2.2cmの銅銭で文様は不詳。ただし径と包含層出土品(第54図の4)との比較から、



第44図 土3実測図 (1/20・1/5)



第45図 土2・土3出土遺物実測図 (1/2・1/1)

半銭（初鋳明治6年（1873））の可能性が考えられる。4は銅製玉付金具と仮称しておくが、銅製の玉2つを銅板でつないだもので、銅板と玉の間に鉄板を挟む。出土状況から袋の口に位置すると考えられるが用途等の詳細不明。幅1.9cm、玉の直径はともに7mmで厚さは金具を含めて4.5mm。

4. 包含層からの出土遺物

ここでは、包含層から出土した遺物を種類別に報告する。土師皿の詳細については出土位置等含めて表1に示しているのでそちらを御参照願いたい。

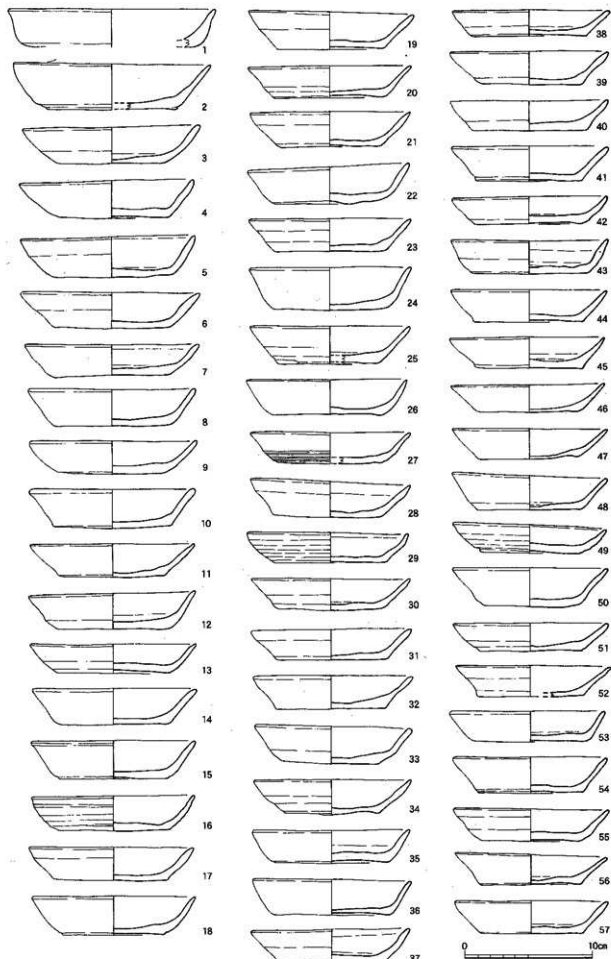
(1) 土師皿（第46～48図・図版34）

土師皿については、冒頭で述べたように、環a・環b・小皿a・小皿bの順に図示している。土師皿は全て糸切り底であり、ヘラ切り底のものはみられない。第46図1はⅢ区1トレンチから出土した土師質土器であるが、小片であり詳細不明。復元径16.4cm。第46図2～第47図17が環aである。大まかな傾向をみるために口径の分布をみると、2の復元15.5cmが最大であるが、14cm前後～13cm台が1点で全体の15%、12cm台後半が19点（26%）、12cm台前半が25点（35%）、11cm台が14点（19%）、10cm台が3点（4%）となって、12cm台前半をピークとすることがわかる。底径や器高との相関も含めた検討が必要であるが、ある程度の傾向は読みとれよう。これらの環aは全て糸切り底で、板状圧痕を伴うものが殆どである。また第46図の32や50など、明らかに環a2と考えられるものも多く含まれているが、明確な抽出ができていないのでここではふれずしておく。第47図の15～27は環bで、口径は最大20の12.2cmから27の9.5cmまで11cm台を中心に分布する。胎土が緻密で薄く仕上げるものが多いのが特徴である。第47図の28～118は小皿aである。8cm台が24点で26%、7cm台後半が26点で29%、7cm台前半が30点で33%、6cm台が11点で12%となっている。第48図1～127は小皿bとして分類した一群である。8cm台が5点で4%、7cm台後半が10点で8%、7cm台前半が39点で31%、6cm台後半が44点で34%、6cm台前半が24点で19%、5cm台が5点で4%である。板状圧痕は6cm台のものでもみられる。128～138は、他の小皿bとはやや様相が異なる一群である。128の口径8.6cmが最大だが、他は6cm台のものが多い。これらは非常に胎土が緻密で薄く仕上げ、底部は糸切り底で板状圧痕を伴わないなど、他の小皿bとは明らかに異なり、環bの中でも薄手の一群とほぼ共通したつくりであることが特徴である。これらは特に、後で説明するⅡ区2トレンチでまともに出土している点に注意される。

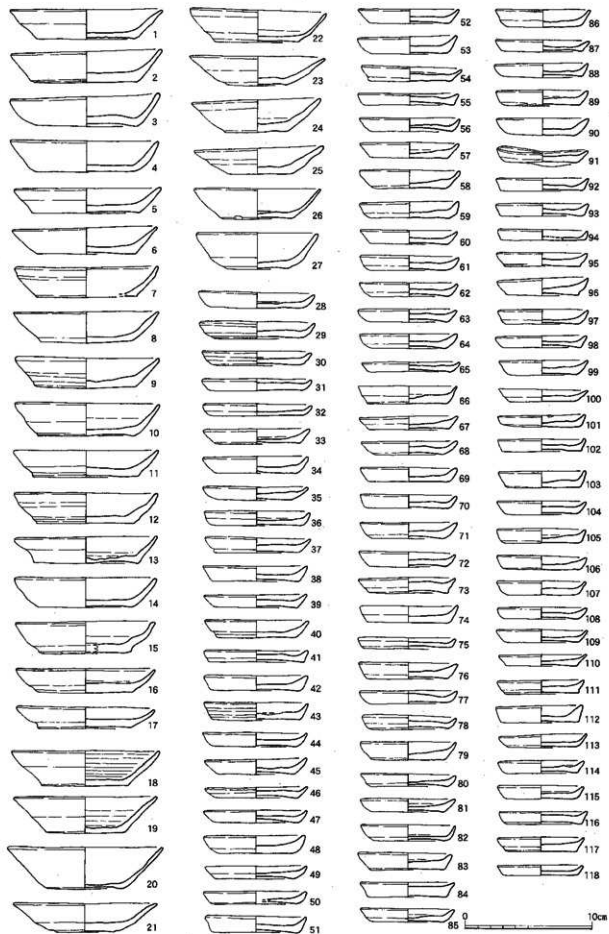
以上、環a～小皿bそれぞれの様相についてみてきたが、環aは12cm台前半、小皿aは7cm台前半、小皿bは7cm台前半～6cm台後半をそれぞれピークとすることが確認された。このことから、本墓域での造墓活動あるいは埋葬行為は、13世紀代にはじまり、13世紀後半～14世紀代を中心として行われ、14世紀後半以降徐々に衰退していくことが窺える。

(2) 陶磁器・瓦類（第49図・図版34）

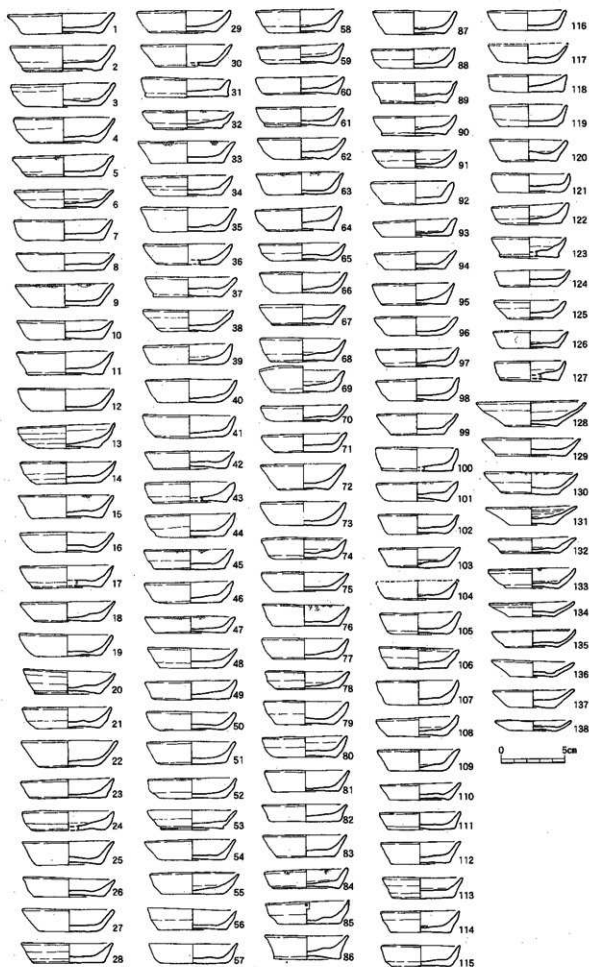
第49図1～15は包含層出土の土器・陶磁器類である。1はD群下層出土品。2は東播系須恵器か。復元口径30.8cm。口縁外面に自然釉が付着する。3は土師質すり鉢の口縁部片。4は土鍋の口縁片。内面は粗い刷毛目がみられる。5は土師質碗の底部片。底径6.6cm。6は須恵質碗の底部片。底径7.6cm。7は土師質の底部片。内面はヨコナデ、外面はナデ・ヘラミガキで丁寧に仕上げている。復元底径10.4cm。外面暗黄褐色。やや薄手だが色調や製作技法が陶製五輪塔と共通しており、空風輪な



第46图 包含層出土上部皿実測図(1) (1/3)



第47图 包含层出土土师皿实测图(2) (1/3)



第48圖 包含層出土土師皿実測圖(3) (1/3)

表1 浦ノ田遺跡4次調査出土土師皿法量表

図号	出土地点	出土層	器種	口径	底径	高さ	糸切リ	形状位置
14	1	Ⅰ区	裾毛柄9	坏a	12.6	7.8	3.4	○ ○
14	2	Ⅰ区	裾毛柄9	坏a	12.6	8.2	2.9	○
14	3	Ⅰ区	裾毛柄9	坏a	13.7	8.6	2.9	○ ○
14	4	Ⅰ区	裾毛柄9	坏a	11.8	7.9	2.6	○ ?
14	5	Ⅰ区	裾毛柄9	小皿a	7.3	5.6	1.3	? ?
14	6	Ⅰ区	裾毛柄9	小皿a	8	6.2	1	? ?
14	7	Ⅰ区	裾毛柄9	小皿a	7.8	5.7	5.2	○ ?
14	8	Ⅰ区	裾毛柄9	小皿b	7.3	5	1.5	? ?
14	11	Ⅰ区	裾毛柄9	坏a	13.5	10	2.9	○ ○
14	13	Ⅰ区	裾毛柄9	小皿a	8	6.2	1.3	○ ○
14	14	Ⅰ区	裾毛柄9	小皿a	7.5	5.4	1.3	? ?
14	15	Ⅰ区	裾毛柄9	小皿a	7.2	5.8	1.2	○ ○
15	1	Ⅰ区	3-3柄・4脚	坏a	16	10.5	2.6	○ ○
15	2	Ⅰ区	3-3柄・4脚	坏a	14	10.5	2.8	○ ○
15	3	Ⅰ区	5-3柄・4脚	坏a	13.6	9	2.8	○ ○
15	4	Ⅰ区	5-3柄・4脚	坏a	13.7	8.5	3	? ?
15	5	Ⅰ区	5-3柄・4脚	坏a	12	8.4	2.6	○
15	6	Ⅰ区	5-3柄・4脚	坏a	11.5	8.6	2.7	○ ○
15	7	Ⅰ区	5-3柄・4脚	坏a	12.4	8.7	3.55	○ ○
15	8	Ⅰ区	3-3柄・4脚	小皿a	8.6	7	1.1	○ ?
15	9	Ⅰ区	5-3柄・4脚	小皿a	7.5	6.3	1.95	○ ○
15	10	Ⅰ区	3-3柄・4脚	小皿a	7.9	6.2	1.1	○ ○
15	11	Ⅰ区	3-3柄・4脚	小皿a	7.8	5.5	1.4	○ ?
15	12	Ⅰ区	5-3柄・4脚	小皿a	7.5	5.9	1.3	○ ○
15	13	Ⅰ区	5-3柄・4脚	小皿a	7.6	5.8	1.2	○
15	14	Ⅰ区	5-3柄・4脚	小皿b	7	5.2	1.4	○
15	15	Ⅰ区	5-3柄・4脚	小皿b	6.3	4.8	1.3	○
15	16	Ⅰ区	5-3柄・4脚	小皿b	7.2	5.4	1.6	○ ?
15	17	Ⅰ区	5-3柄・4脚	小皿b	7	4.6	1.9	○ ○
15	18	Ⅰ区	3-3柄・4脚	小皿b	7.2	4.3	1.9	○ ○
15	19	Ⅰ区	5-3柄・4脚	小皿b	6.2	4.2	1.7	○
21	4	Ⅰ区	C群F	坏a	13.1	7.8	3.5	○ ○
21	5	Ⅰ区	C群F	坏a	12.9	8.3	3.05	○ ○
21	6	Ⅰ区	C群下	坏a	12.2	9.2	2.8	○ ○
21	7	Ⅰ区	C群下	坏a	13	9	2.8	○ ○
21	8	Ⅰ区	C群下	坏b	12.8	9	2.4	○ ○
21	9	Ⅰ区	C群下	坏a	12.8	8.4	2.7	○ ○
21	10	Ⅰ区	D群上	坏a	13.3	8.8	2.5	○ ○
21	11	Ⅰ区	D群上	坏a	12.8	8.8	2.5	○ ○
21	12	Ⅰ区	C群下	坏a	13	9.1	3	○ ○
21	13	Ⅰ区	C群下	坏a	12.7	8.3	2.55	○ ○
21	14	Ⅰ区	C群下	坏a	13.1	8.8	2.7	○ ○
21	15	Ⅰ区	C群下	坏a	13.1	8.7	2.8	○ ○
21	16	Ⅰ区	C群下	小皿a	8.2	6.3	1.3	○ ?
21	17	Ⅰ区	C群下	小皿a	8	6.4	1.1	○ ○
21	18	Ⅰ区	C群下	小皿a	7.6	6.1	1.1	○ ○
21	19	Ⅰ区	C群下	小皿a	7.6	5.8	1.1	○ ○
21	20	Ⅰ区	C群下	小皿a	7.7	6	1.3	○ ○
21	21	Ⅰ区	C群下	小皿a	7.3	5.5	1.15	○ ?
21	22	Ⅰ区	C群下	小皿a	7.2	5.9	0.9	○ ○
21	23	Ⅰ区	C群	小皿a	7.4	5.7	1.1	○ ○
21	24	Ⅰ区	C群下	小皿?	8.75	6.2	1.9	○ ○
21	25	Ⅰ区	C群下	小皿b	7.7	5.6	1.8	○ ○
21	26	Ⅰ区	C群下	小皿b	7.4	5.3	1.9	? ?
21	27	Ⅰ区	C群下	小皿b	7.7	5.7	1.8	○ ○
21	28	Ⅰ区	C群下	小皿b	8.9	4.6	1.5	○ ○
27	2	Ⅰ区	G群№3	坏a	13.6	9.2	2.9	○ ○
27	3	Ⅰ区	G群№19	坏a	13	9	2.85	○ ○
27	4	Ⅰ区	G群№25	坏a	12.9	8.4	2.5	○ ○
27	5	Ⅰ区	G群№4	坏a	12.9	8.6	2.6	○ ○
27	6	Ⅰ区	G群№29	坏a	12.9	8.8	2.2	○ ○

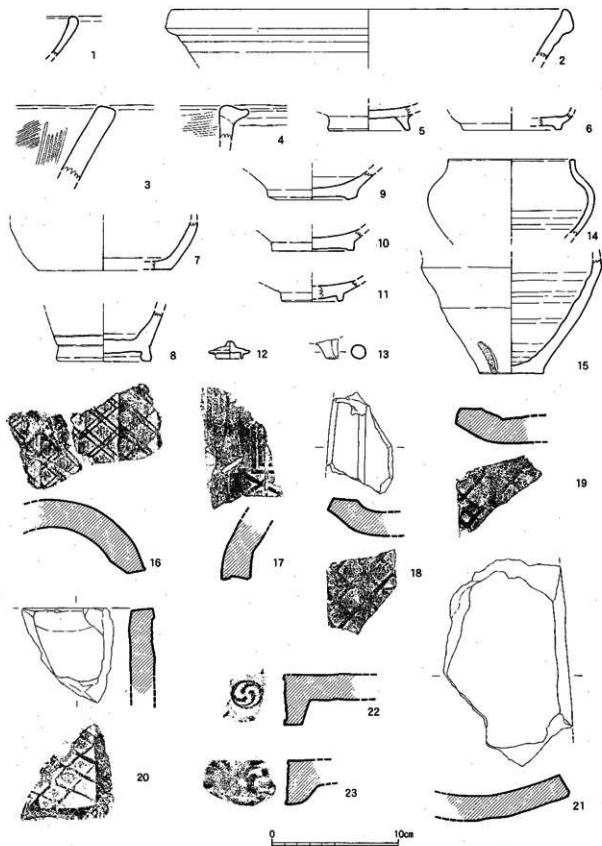
図号	出土地点	出土層	器種	口径	底径	高さ	糸切リ	形状位置
27	7	Ⅰ区	G群№17	坏a	12.7	7.6	2.25	○ ○
27	8	Ⅰ区	G群№9	坏a	12.6	9.1	2.3	○ ○
27	9	Ⅰ区	G群№11	坏a	12.6	7.6	2.5	○ ○
27	10	Ⅰ区	G群№25	坏a	12.5	8.5	2.8	○ ○
27	11	Ⅰ区	G群№36	坏a	12.5	8	2.6	○ ?
27	12	Ⅰ区	G群№6	坏a	12.45	9	2.4	○ ○
27	13	Ⅰ区	G群№41	坏a	12.4	9.9	2.6	○ ○
27	14	Ⅰ区	G群№30	坏a	12.4	8.5	2.5	○ ○
27	15	Ⅰ区	G群№40	坏a	12.4	8	2.3	○ ○
27	16	Ⅰ区	G群№35	坏a	12.4	8	2.5	○ ○
27	17	Ⅰ区	G群№21	坏a	12.4	8	2.8	○ ○
27	18	Ⅰ区	G群№37	坏a	12.4	7.6	2.4	○ ○
27	19	Ⅰ区	G群№10	坏a	12.2	9.2	2.6	○ ○
27	20	Ⅰ区	G群№28	坏a	12.2	8.8	2.5	○ ○
27	21	Ⅰ区	G群№35	坏a	12.2	8.6	2.7	○ ○
27	22	Ⅰ区	G群№24	坏a	12.2	8.2	2.8	○ ○
27	23	Ⅰ区	G群№25	坏a	12.2	8.1	2.3	○ ○
27	24	Ⅰ区	G群№20	坏a	12.2	8	2.65	○ ○
27	25	Ⅰ区	G群№35	坏a	12.2	8	2.45	○ ○
27	26	Ⅰ区	G群№5	坏a	12.1	8.5	2.75	○ ○
27	27	Ⅰ区	G群№3	坏a	12.1	8	2.5	○ ○
27	28	Ⅰ区	G群№22	坏a	12.1	8.2	2.9	○ ?
27	29	Ⅰ区	G群№27	坏a	11.9	7.3	2.3	○ ?
27	30	Ⅰ区	G群№36	坏a	11.8	8.3	2.3	○ ○
27	31	Ⅰ区	G群№17	坏a	11.7	8.6	2.5	○ ○
27	32	Ⅰ区	G群№18	小皿a	7.5	6.1	1.2	○ ○
27	33	Ⅰ区	G群№38	小皿a	7.3	5.4	1.05	○ ○
27	34	Ⅰ区	G群№13	小皿a	6.6	5.2	1.3	○ ?
27	35	Ⅰ区	G群№14	小皿b	6.9	5.6	1.6	○ ○
27	36	Ⅰ区	G群№16	小皿b	6.9	5.4	1.5	○ ○
27	37	Ⅰ区	G群№29	小皿b	6.8	4.9	1.6	○ ?
27	38	Ⅰ区	G群№22	小皿b	6.7	4.3	1.8	○ ○
27	39	Ⅰ区	G群№31	小皿b	6.5	4.9	1.5	○ ○
27	40	Ⅰ区	G群№23	小皿b	6.3	4.6	1.6	○ ○
27	41	Ⅰ区	G群№12	小皿b	6.3	4.1	1.8	○ ?
30	4	Ⅰ区	H群C列内	小皿b	8.2	6.1	2	○ ○
30	5	Ⅰ区	I群№6	坏a	13.5	9.2	3	○ ○
30	6	Ⅰ区	I群№5	坏a	13.1	8.5	3.3	○ ○
30	7	Ⅰ区	I群№1	坏a	13	8	3.1	○ ○
30	8	Ⅰ区	I群№7	坏a	12.8	7.9	3.2	○ ○
30	9	Ⅰ区	I群№4	坏a	12.2	8.2	2.4	○ ○
30	10	Ⅰ区	I群№5	坏a	7	8.2	? ?	○ ○
30	11	Ⅰ区	I群№2	小皿b	8	6.3	1.5	○ ○
35	1	Ⅰ区	L群№1	坏b	10.75	6.5	2.3	○ ?
35	2	Ⅰ区	L群№2	坏b	10.5	5.5	2.5	○ ○
35	3	Ⅰ区	L群№3	坏b	9.6	4.3	2.4	○ ○
35	4	Ⅰ区	L群№4	坏b	10.25	4.5	2.8	○ ○
35	5	Ⅰ区	L群№4	坏b?	? ?	4.5	? ?	○ ○
35	6	Ⅰ区	L群№4	坏b	10.4	5	2.4	○ ?
35	7	Ⅰ区	L群№4	坏b	10.8	4.4	2.3	○ ○
35	8	Ⅰ区	L群№4	坏b	10	4.8	3	○ ○
35	9	Ⅰ区	L群№4	坏b	10	5.5	2.2	○ ○
35	10	Ⅰ区	L群№4	坏b	9.9	5	2.35	○ ○
41	5	Ⅱ区	P群P1	坏a	12.6	8.6	2.5	○ ?
41	6	Ⅱ区	P群P3	小皿a	8.2	5.6	1.3	○ ○
41	7	Ⅱ区	P群P21	小皿a	7.4	5.6	1.2	○ ○
46	1	Ⅲ区	1	坏a?	16.4?	12.4	2.9	○ ?
46	2	Ⅰ区	5上	坏a	15.5	10.4	3.6	○ ○
46	3	Ⅲ区	2	坏a	13.9	8.3	3	○ ?
46	4	F1		坏a	13.7	8.5	2.9	○ ○
46	5	遺跡	南端	坏a	13.7	9	3.3	○ ○

部	番号	出土地点	出土詳細	器种	口径	高さ	口径/高さ	重	水切り	概状注記
47	71	Ⅱ区	12南塚	小皿a	7.6	5.8	1.3	○	○	
47	72	濠①	南塚a	小皿a	7.6	6	1.1	○	○	
47	73	I区	2	小皿a	7.6	6.3	1.2	○	○	
47	74	I区	3	小皿a	7.6	6.4	1.3	○	○	
47	75	I区	5下	小皿a	7.6	6.8	1	○	○	
46	76	I区	○跡南5南9下1	小皿a	7.6	6.2	1.2	○	○	
47	77	Ⅱ区	14	小皿a	7.5	6.1	1	○	?	
47	78	I区	2	小皿a	7.4	6	1.2	○	?	
47	79	I区	南塚a	小皿a	7.4	5.8	1.4	○	?	
47	80	Ⅱ区	12	小皿a	7.4	6	1.05	○	○	
47	81	Ⅱ区	16	小皿a	7.4	5.8	1.1	○	○	
47	82	濠①	南塚	小皿a	7.4	5.8	1.3	○	○	
47	83	I区	1上	小皿a	7.4	5.9	1.3	○	○	
47	84	I区	3上	小皿a	7.4	6.3	1.15	○	○	
47	85	Ⅱ区	11	小皿a	7.4	5.4	1.05	○	?	
47	86	Ⅱ区	16	小皿a	7.4	5.6	1.4	○	?	
47	87	I区	3東塚a	小皿a	7.3	6	0.9	○	○	
47	88	Ⅱ区	11	小皿a	7.3	6.2	1.1	○	○	
47	89	濠①		小皿a	7.2	5.8	1.1	○	○	
47	90	Ⅱ区	16	小皿a	7.2	5.2	1.25	○	○	
47	91	I区	5上	小皿a	7.2	5.5	1.6	○	○	
47	92	I区	5下	小皿a	7.2	6.6	0.95	○	○	
47	93	Ⅱ区	14	小皿a	7.2	6.5	1	○	○	
47	94	I区	2東塚a	小皿a	7.15	6.5	0.9	○	○	
47	95	Ⅱ区	11東塚a	小皿a	7.1	5.9	1.1	○	○	
47	96	I区	2下	小皿a	7.1	5.6	1.4	○	○	
47	97	Ⅱ区	16	小皿a	7.1	5.7	1.1	○	○	
47	98	濠①		小皿a	7.1	6	0.9	○	○	
47	99	I区	G群	小皿a	7	5.1	1.3	○	○	
47	100	Ⅱ区	15	小皿a	7	5	1	○	○	
47	101	I区	2	小皿a	7	6.4	1	○	○	
47	102	I区	2古殿付近	小皿a	7	6.4	1	○	○	
47	103	I区	2東塚a	小皿a	7	5.8	1.2	○	○	
47	104	I区	3上	小皿a	7	5.8	1	○	○	
47	105	Ⅱ区	14	小皿a	7	6	1.1	○	○	
47	106	Ⅱ区	15	小皿a	7	6	1.1	○	○	
47	107	濠①		小皿a	7	5.4	1.3	○	?	
47	108	I区	1	小皿a	6.9	5.8	0.9	○	○	
47	109	I区	2下	小皿a	6.9	5.7	1	○	○	
47	110	I区	2下	小皿a	6.9	5.6	0.9	○	○	
47	111	I区	5	小皿a	6.8	5.6	1.1	○	○	
47	112	濠①	南塚a	小皿a	6.8	6.2	1.3	○	○	
47	113	I区	2東塚a	小皿a	6.8	5.4	1.15	○	○	
47	114	I区	3	小皿a	6.8	5.4	1	○	○	
47	115	Ⅱ区	11	小皿a	6.8	5.6	1	○	○	
47	116	濠①	南塚a t r	小皿a	6.8	5.9	1.05	○	?	
47	117	I区	5上-1土	小皿a	6.8	5.6	1.1	○	○	
47	118	Ⅱ区	11東塚a	小皿a	6.7	5.8	0.8	○	○	
46	1	Ⅱ区	15	小皿b	8.4	6.2	1.6	?	?	
46	2	濠①		小皿b	8.2	6	2	○	?	
46	3	濠②		小皿b	8.2	5.9	1.8	○	?	
46	4	I区	2下	小皿b	8	6.2	2	○	○	
46	5	Ⅱ区	16	小皿b	8	3.2	1.7	○	○	
46	6	I区	2東塚a	小皿b	7.8	5.2	1.4	○	○	
46	7	濠①		小皿b	7.8	6.2	1.6	○	○	
46	8	Ⅱ区	15	小皿b	7.7	5.8	1.5	○	○	
46	9	Ⅱ区	15	小皿b	7.7	5.3	1.8	○	?	
46	10	I区	3下	小皿b	7.6	5.8	1.5	○	○	
46	11	Ⅱ区	12南塚	小皿b 1	7.6	6	1.8	○	?	
46	12	Ⅱ区	11	小皿b	7.3	5.5	1.7	○	○	
46	13	Ⅱ区	12南塚	小皿b	7.5	6.8	2	○	?	

部	番号	出土地点	出土詳細	器種	口径	高さ	口径/高さ	重	水切り	概状注記	
46	14	Ⅱ区	15	小皿b	7.5	5.1	1.7	○	○		
46	15	Ⅱ区	15	小皿b	7.5	5.5	1.8	○	?		
46	16	I区	5	小皿b	7.4	5	1.45	○	○		
46	17	濠②		小皿b	7.4	5.6	1.7	○	○		
46	18	I区	3東塚a	小皿b	7.4	5.5	1.5	○	?		
46	19	E i r		小皿b	7.4	5.1	1.8	○	?		
46	20	Ⅱ区	12	小皿b	7.3	5.2	2	○	?		
46	21	Ⅱ区	16	小皿b	7.2	5.8	1.7	○	○		
46	22	I区	A群	小皿b	7.3	4.8	2	○	?		
46	23	I区	5下	小皿b	7.3	5.9	1.4	○	○		
46	24	I区	3下	小皿b	7.2	5.8	1.5	○	○		
46	25	Ⅱ区	11南塚	小皿b	7.2	5	1.85	○	○		
46	26	Ⅱ区	11南塚	小皿b	7.2	5.5	1.6	○	○		
46	27	Ⅱ区	15	小皿b	7.2	4.5	1.8	○	○		
46	28	濠①		小皿b	7.2	5.6	1.5	○	?		
46	29	D i r		小皿b	7.2	5	1.7	○	?		
46	30	D i r		小皿b	7.2	4.6	1.7	?	?		
46	31	I区	2五輪付近	小皿b	7.2	6.5	1.5	○	○		
46	32	Ⅱ区	11東塚a	小皿b 1	7.2	5.4	1.4	○	○		
46	33	Ⅱ区	15	小皿b	7.2	5.7	1.7	○	○		
46	34	濠①	南塚a t r	小皿b	7.2	5.2	1.5	○	?		
46	35	濠②	南塚	小皿b	7.2	5.8	1.9	○	?		
46	36	Ⅱ区	1下	小皿b	7	4.6	1.6	?	?		
46	37	I区	5	小皿b	7.1	5.7	1.6	○	○		
46	38	Ⅱ区	15	小皿b	7.1	4	1.7	○	○		
46	39	I区	3下	小皿b	7.1	5.5	1.55	○	○		
46	40	Ⅱ区	12	小皿b	7.1	5	1.8	○	?		
46	41	濠①	南塚a t r	小皿b	7.1	5.4	1.9	○	○		
46	42	I区	2東塚a	小皿b	7	5.7	1.3	○	○		
46	43	I区	3	小皿b	7	5.8	1.6	○	○		
46	44	Ⅱ区	12	小皿b	7	5.4	1.5	?	?		
46	45	Ⅱ区	12南塚	小皿b	7	5.3	1.55	○	○		
46	46	Ⅱ区	15	小皿b	7	5	1.8	○	○		
46	47	Ⅱ区	15	小皿b	7	4.6	1.3	○	○		
46	48	Ⅱ区	15	小皿b	7	4.9	1.55	○	?		
46	49	I区	2東塚a	小皿b	7	6	1.5	?	?		
46	50	I区	6	小皿b	7	5	1.4	○	○		
46	51	I区	5下	小皿b	7	5.5	1.7	?	?		
46	52	Ⅱ区	16	小皿b	7	5.1	1.3	○	○		
46	53	濠①	南塚a t r	小皿b	7	3	1.5	○	?		
46	54	濠①	南塚a t r	小皿b	7	3	1.7	○	?		
46	55	I区	4	小皿b	6.9	4.9	1.7	○	?		
46	56	Ⅱ区	11内南塚a	小皿b	6.9	5.3	1.7	?	?		
46	57	Ⅱ区	11内南塚a	小皿b	6.9	5.3	1.5	○	○		
46	58	Ⅱ区	15	小皿b	6.9	4.8	1.6	○	○		
46	59	濠②		小皿b ?	6.9	5.2	1.4	○	○		
46	60	Ⅱ区	1区	5下	小皿b	6.9	3	1.3	?	?	
46	61	Ⅱ区	11-12	小皿b	6.9	5.6	1.5	○	○		
46	62	Ⅱ区	15	小皿b	6.9	4.3	1.8	○	?		
46	63	Ⅱ区	15	小皿b	6.9	5.3	1.7	○	○		
46	64	Ⅱ区	11	小皿b	6.8	5.4	1.9	○	○		
46	65	Ⅱ区	12	小皿b	6.8	3	1.4	○	○		
46	66	Ⅱ区	14	小皿b	6.8	4.6	1.6	○	○		
46	67	I区	A群	小皿b	6.8	4.9	1.6	○	?		
46	68	濠①		小皿b	6.8	5	1.8	○	○		
46	69	I区	2	小皿b	6.8	5	1.8	○	○		
46	70	I区	3上	小皿b	6.8	4.8	1.2	○	○		
46	71	I区	2下	小皿b	6.8	4.6	1.5	○	○		
46	72	I区	3下	小皿b	6.8	4.2	1.9	○	○		
46	73	Ⅱ区	11石塚付近	小皿b	6.8	4.8	1.8	○	○		
46	74	Ⅱ区	11南塚	小皿b	6.8	5.2	1.7	○	○		

图 册号	出土地点	出土群别	器形	口径	底径	高	容积	备注
48 75	Ⅱ区	15	小罐b	6.8	5	1.5	○	?
48 76	Ⅱ区	15	小罐b	6.8	5.3	1.8	○	○
48 77	遗址	南张家 t r	小罐b	6.8	5	1.7	○	○
48 78	Ⅰ区	2	小罐b	6.7	5	1.4	○	○
48 79	Ⅱ区	11~12	小罐b	6.7	4.5	1.9	○	○
48 80	Ⅱ区	11石磨附近	小罐b	6.7	4.9	1.7	○	?
48 81	Ⅱ区	9	小罐b	6.7	5.3	1.7	○	○
48 82	Ⅱ区	16	小罐b	6.7	5.5	1.5	○	○
48 83	Ⅰ区	3	小罐b	6.6	4.4	1.7	○	○
48 84	Ⅱ区	11群南	小罐b	6.6	5.4	1.6	?	?
48 85	Ⅱ区	12	小罐b	6.6	5.5	1.9	○	○
48 86	Ⅱ区	13	小罐b	6.6	5.2	1.8	○	○
48 87	Ⅱ区	15	小罐b	6.6	4.6	1.8	○	○
48 88	Ⅱ区	16	小罐b	6.6	5.1	1.4	○	○
48 89	遗址	南端	小罐b	6.6	5.3	1.6	○	?
48 90	遗址		小罐b	6.6	5.1	1.5	○	?
48 91	Ⅱ区	11	小罐b	6.6	4.85	1.43	○	○
48 92	Ⅱ区	15	小罐b	6.5	4.9	1.8	○	○
48 93	Ⅱ区	15	小罐b	6.5	5.3	1.4	○	?
48 94	遗址	南张家	小罐b	6.5	4.6	1.4	○	?
48 95	遗址		小罐b	6.5	5.1	1.7	?	?
48 96	Ⅰ区	2下	小罐b	6.5	4	1.5	○	○
48 97	Ⅱ区	9	小罐b	6.5	4.8	1.45	?	?
48 98	Ⅱ区	r	小罐b	6.5	4.7	1.7	○	○
48 99	Ⅰ区	3	小罐b	6.4	4.2	1.6	○	○
48 100	Ⅱ区	12	小罐b	6.4	5.6	1.8	○	○
48 101	Ⅱ区	13	小罐b	6.4	4.8	1.6	○	?
48 102	Ⅰ区	2	小罐b	6.4	4.6	1.55	○	○
48 103	Ⅱ区	11石磨附近	小罐b	6.4	4.7	1.55	○	○
48 104	遗址	南端	小罐b	6.4	3	1.5	○	○
48 105	Ⅱ区	15	小罐b	6.3	4.5	1.8	○	○
48 106	Ⅱ区	15	小罐b	6.3	4.7	1.7	○	○
48 107	Ⅱ区	16	小罐b	6.3	4.9	1.9	○	○
48 108	遗址		小罐b	6.3	4.7	1.5	○	○
48 109	E t r		小罐b	6.3	4.4	1.6	○	○
48 110	Ⅰ区	2	小罐b	6.3	4.8	1.35	○	○
48 111	Ⅰ区	2聚族源	小罐b	6.3	5.2	1.4	○	○
48 112	Ⅱ区	15	小罐b	6.2	4.85	1.7	○	?
48 113	Ⅱ区	15	小罐b	6.2	4.7	1.6	○	○
48 114	Ⅱ区	16	小罐b	6.2	4.6	1.7	○	○
48 115	Ⅰ区	2下	小罐b	6.2	4.4	1.7	○	○
48 116	Ⅰ区	6	小罐b	6.2	4.7	1.6	○	○
48 117	Ⅰ区	5上	小罐b	6.2	4	1.6	○	○
48 118	Ⅱ区	11石磨附近	小罐b	6.1	5.3	1.3	○	○
48 119	Ⅱ区	15	小罐b	6.1	4.5	1.7	○	?
48 120	遗址	南端	小罐b	6.1	4.3	1.8	○	○
48 121	Ⅱ区	11北	小罐b	6	4.8	1.5	○	○
48 122	遗址	南端	小罐b	6	5.5	1.7	○	○
48 123	遗址	南张家	小罐b	5.9	4.7	1.7	○	?
48 124	Ⅰ区	5上	小罐b	5.9	4.6	1.2	○	○
48 125	Ⅰ区	3	小罐b	5.8	3.6	1.5	○	○
48 126	Ⅱ区	16	小罐b	5.8	4.5	1.3	○	○
48 127	遗址		小罐b	5.6	4.6	1.5	○	?
48 128	Ⅰ区	6	小罐b	5.6	4	2	○	○
48 129	Ⅰ区	1	小罐b	7.8	5.6	1.4	○	○
48 130	Ⅱ区	11聚族源	小罐b	7.4	4.3	1.7	○	○

图 册号	出土地点	出土群别	器形	口径	底径	高	容积	备注
48 131	Ⅰ区	6	小罐b	7.2	3.8	1.4	○	○
48 132	遗址		小罐b	6.9	4.5	1.2	?	?
48 133	Ⅰ区	2聚族源	小罐b	6.8	4.2	1.55	○	○
48 134	遗址		小罐b	6.7	3.6	1.1	○	?
48 135	Ⅰ区	2聚族源	小罐b	6.6	4.3	1.4	○	○
48 136	遗址	南端	小罐b	6.4	3.6	1.2	?	?
48 137	遗址	南端	小罐b	6.4	3.6	1.4	?	?
48 138	Ⅰ区	聚族源	小罐b	6	3.6	0.9	○	○
59 1	Ⅱ区	1中央坳b1	坏a	11.6	8.7	1.8	○	○
59 2	Ⅱ区	1	小罐b	7.2	6.6	1	○	○
59 3	Ⅱ区	1村边遗址	小罐b 7	6.9	5.8	1.5	○	○
59 4	Ⅱ区	1西下边遗址	坏a	12.7	8.7	2.05	○	○
59 5	Ⅱ区	1村边遗址	坏a	11.6	8	2.6	○	○
59 6	Ⅱ区	2№14	坏b	11.8	5.2	2.9	○	○
59 7	Ⅱ区	2№7	坏b	11.7	6	2.8	○	○
59 8	Ⅱ区	2№21	坏b	11.5	5.8	3	○	○
59 9	Ⅱ区	2№16	坏b	11.5	5.3	2.5	○	○
59 10	Ⅱ区	2№15	坏b	11.3	6.3	2.9	○	○
59 11	Ⅱ区	2№1	坏b	10.9	5.7	2.7	○	○
59 12	Ⅱ区	2№2	坏b	10.5	5.6	2.5	○	○
59 13	Ⅱ区	2№17	小罐b	6.6	5.4	1	○	○
59 14	Ⅱ区	2№15	小罐b	6.4	5.9	1.1	○	○
59 15	Ⅱ区	2	小罐b	6.1	4.9	1.5	○	○
59 16	Ⅱ区	2№12	小罐b	7.5	5.4	1.8	○	○
59 17	Ⅱ区	2№11	小罐b	7.1	3.9	1.3	○	○
59 18	Ⅱ区	2№18	小罐b 7	3.8	1.4	○	○	○
59 19	Ⅱ区	2№8	小罐b	7	4.3	1.4	○	○
59 20	Ⅱ区	2№6	小罐b 7	4.1	1.3	○	○	○
59 21	Ⅱ区	2№5	小罐b	6.9	4.1	1.2	○	○
59 22	Ⅱ区	2№4	小罐b	6.8	4	1.4	○	○
59 23	Ⅱ区	2№3	小罐b	6.7	4.2	1.3	○	○
59 24	Ⅱ区	2№9	小罐b	6.6	3.9	1.1	○	○
59 25	Ⅱ区	2№10	小罐b	6.4	3.8	1.4	○	○
59 26	Ⅱ区	2	小罐b	6.2	3.8	1.2	○	○
59 27	Ⅱ区	2	小罐b	6.2	4	1.1	○	○
63 1	Ⅱ区	4聚族源	坏a	14.9	10.4	2.8	○	○
63 3	Ⅱ区	4	坏a	13.4	7.7	3.15	○	○
63 4	Ⅱ区	4	坏a	13	9.2	2.6	○	○
63 5	Ⅱ区	4	坏a	13	8	2.5	?	?
63 6	Ⅱ区	4	小罐a	7.8	5.8	1.3	?	○
63 7	Ⅱ区	4№1	小罐a	7.7	5.4	1.5	○	○
63 8	Ⅱ区	4	小罐a	7.5	5.8	1.3	○	○
63 9	Ⅱ区	4	小罐a	7	4.4	1.3	?	?
63 10	Ⅱ区	4	小罐b	7.2	5.6	1.5	○	○
63 11	Ⅱ区	4	小罐b	6.5	4.2	1.5	○	○
63 12	Ⅱ区	4	小罐b	6.5	4	1.6	○	?
63 13	Ⅱ区	4	小罐b	5.8	4.2	1.5	○	○
63 14	Ⅱ区	1-骨№2付址	小罐b	7	4.4	1.3	?	?
63 15	Ⅱ区	4	小罐b	7.1	4.6	1.15	○	○
63 16	Ⅱ区	4	小罐b	6.6	4.6	1.2	?	?
70 1	Ⅱ区	6	坏a	12.8	8.6	3.3	○	○
70 2	Ⅱ区	6	坏a	12.8	8.6	2.7	○	○
70 3	Ⅱ区	6	坏a	12.6	9	2.4	○	○
70 4	Ⅱ区	6	坏a	12.45	9.2	2.7	○	○
70 5	Ⅱ区	6	小罐a	7.8	6	1.3	○	○
70 6	Ⅱ区	6	小罐b	6.7	5	1.5	○	○



第49図 包含層出土土器・陶磁器類・瓦実測図 (1/3)

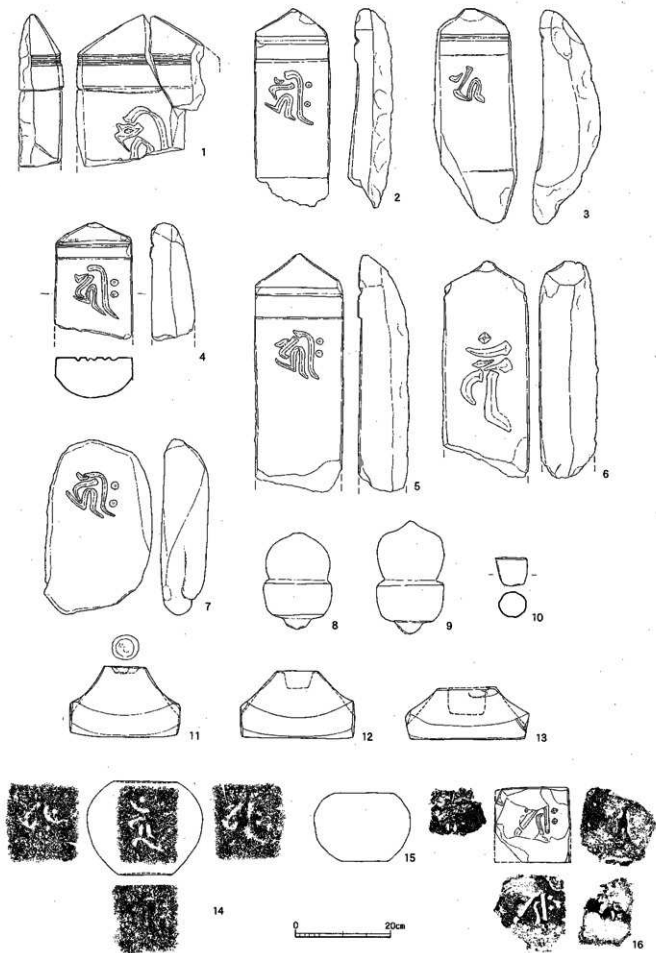
どの可能性も考えられる。8は緑釉の陶器壺の底部か。外面緑白色、内面茶白色の釉がかかる。高台は削り出して底部は露胎。一部目跡が確認できる。底径7.2cm。9は白磁の底部片。内面にも釉がかかる。高台削り出し。底径は7cm。10はⅢ区2トレンチから出土した白磁底部片。底径6.4cm。内

面にも釉がかかる。高台削り出し。11はⅢ区3トレンチ出土の白磁の底部片。高台削り出し。内面にも薄く釉がかかる。底部は露胎。底径4.8cm。12は乳白色の釉がかかる陶器蓋。最大径3.2cm、高さ1.4cm。下半は露胎。13は青磁、香炉の脚部か。14はⅢ区2トレンチから出土した青磁で香炉か。内外面緑白色の釉がかかる。復元口径9.8cm、胴部最大径13.2cm。15は褐陶器壺の底部片で、底径5cm、最大幅14.2cm、現存高9.2cm。J群がある1-6区から出土したもので、蔵骨器の可能性などが考えられる。

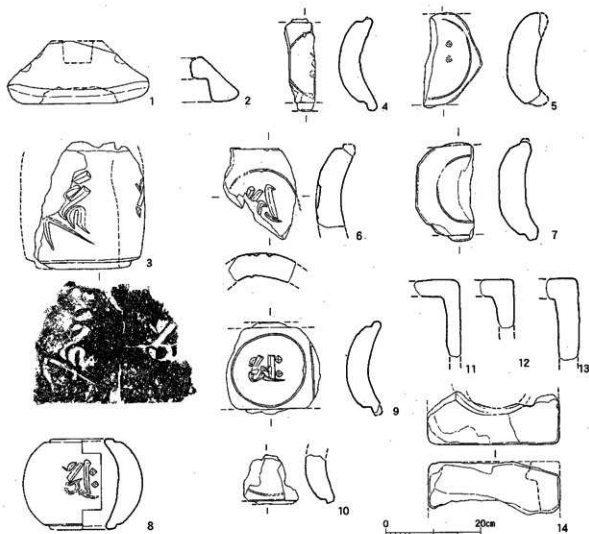
第49図16~23は包含層出土の瓦片である。16は丸瓦で内面布目、外面格子目のタタキ。17も丸瓦で内面布目、外面タタキ。18~21は平瓦。18・19は凹面ナデ、凸面格子目のタタキ。20は凹面布目で外面タタキ。外縁部が残る。21は凹面ナデ、凸面タタキ。22・23は軒平瓦。いずれも小片で、巴文を施している。

(3) 石塔類 (第50・51・52図・図版36~40)

第50図1~16は花崗岩製及び砂岩製の石塔類、第51図1~14は凝灰岩製の石塔類である。第50図1は砂岩製の板碑で、本遺跡出土の板碑の中では最大である。I区出土。正面に梵字キリクを刻み、額部を明瞭に削り出す。頂上線は側面まで2条めぐっている。背面は横方向に削りだして整形した痕跡が明瞭に残る。現存最大幅26.4cm。最大厚9.4cm。2はG群で出土した花崗岩製板碑で、下端部を欠失する。梵字キリクを刻み、額部を明瞭に削り出す。現存最大高41.8cm、幅15.8cm、最大厚8.6cm。3はI区出土の花崗岩製板碑で正面に梵字カ(地藏菩薩)を刻む。額部を削り出すが下端部の段は摩滅のため僅かしか残っていない。全体的に少し三日月状に反った形となっている。ほぼ完形で、最大高44.6cm、最大幅17.2cm、最大厚12cm。4はI区出土の花崗岩製板碑。下半を欠失する。梵字キリクを刻み、額部を明瞭に削り出す。現存最大高24.5cm、最大幅16.4cm、最大厚9cm。5はC群上層付近に流入した花崗岩製板碑。梵字キリクを刻み、額部を明瞭に削り出す。下端欠失。現存最大高49.8cm、幅18.4cm、最大厚10.6cm。6はII区斜面から出土した花崗岩製板碑で正面に梵字バン(大日如来)を刻む。額部はない。下端欠失。現存最大高45.4cm、幅18.2cm、最大厚12.2cm。7はI区出土の砂岩製の自然石板碑で、梵字キリクを刻む。正面左側面は打ち欠いて形・大きさを整形しているようである。完形で高さ36.6cm、最大幅22.5cm、最大厚9.6cm。8~15は五輪塔片である。8・9はI区出土の花崗岩製空風輪。8は高さ20.4cm、空輪部最大幅cm13.3、風輪部最大幅14.2cm。9は高さ23.7cm、空輪部最大幅14.1cm、風輪部最大幅14.0cm。10はI区出土。砂岩製で、空風輪の基部か。現存高5.8cm、最大径6.6cm。11・12はII区斜面出土の花崗岩製風輪。11は最大幅23.1cm、高さ14.8cmで、接続部は円形。12は最大幅23.8cm、高さ14.1cmで接続部は円形。13はJ群近くで出土した砂岩製の火輪で、最大幅26cm、高さ11cm、接続部は円形。14はP群で出土した花崗岩製水輪で、最大幅24.1cm、高さ19.8cm。頂部径13cm、底部径11cm。四方に梵字を刻む。図示正面が東のウン(阿閼如来)、右側面が北のアク(不空成就如来)、左側面が南のクラーク(宝生如来)、下(逆側)が西のキリク(阿弥陀如来)で、金剛界五仏を表している。15は1-6区南壁中より出土の花崗岩製水輪。梵字はない。最大幅21.4cm、高さ14.6cm、頂部径12.5cm、底部径9.8cm。16はK群付近から出土した砂岩製品。小型であるが石塔類の塔身部か。幅16.0cm、高さ15.9cm、奥行き15.3cmでほぼ立方体に近い。頂部と底部を除く4面に梵字が刻んである。ここでは最も残りのよい面を正面とした。この面には梵字アクが刻まれている。逆側はクラークの可能性が考えられるが、他の2面は風化と剥落により梵字が判読できない。

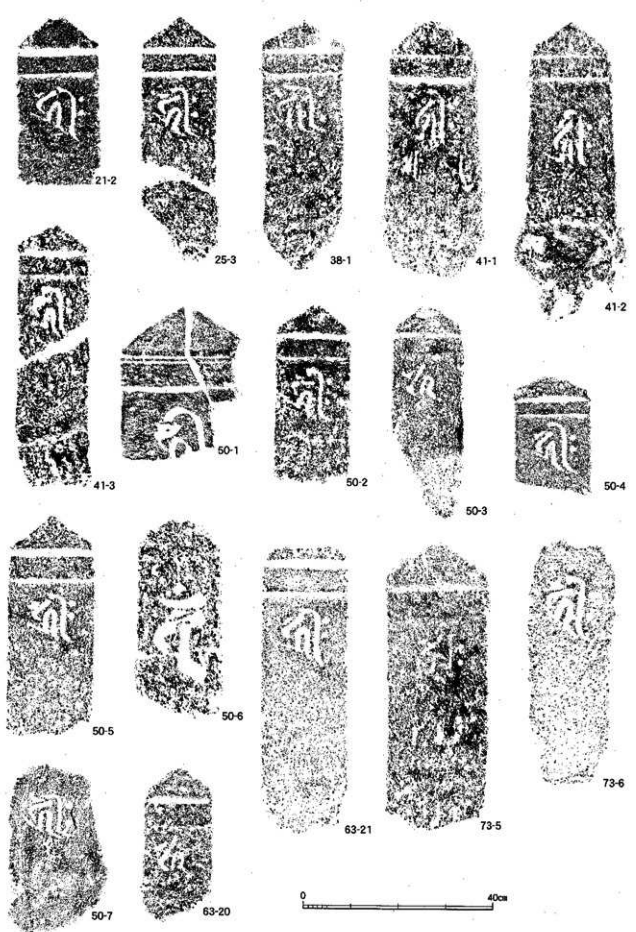


第50圖 包含層出土石塔類実測圖(1) (1/8)



第51図 包含層出土石塔類実測図②(1/8)

第51図1・2は凝灰岩製火輪。1はⅢ区1トレンチ出土で最大幅29.8cm、高さは13cm。空風輪との接続部は方形で、水輪との接続部は円形である。2はⅠ区出土で高さ9.4cm。空風輪との接続部は方形、水輪との接続部は円形で、両接続孔が繋がって中空になっている。3はH群付近で出土した凝灰岩製宝塔塔身の軸部か。正面に梵字ウン、右側にアクを刻む。復元最大径は26.1cm。内面は削り出し。4～10は凝灰岩製水輪。4はⅠ区出土で梵字アク?の一部が残存する。梵字の周囲に沈線で輪を描く。残存高19.7cmで本体部高が17cm。5はⅠ区出土。2つの点と沈線の輪が残る以外は摩滅のため不詳。本体部高19.2cm。6はH群付近出土。梵字ア(大日如来)を刻む。沈線の輪を伴う。内面は削り出し。残存高19.2cm。7はK群付近出土。沈線の輪を伴うが摩滅で梵字不詳。上下についても不明。本体高19cm。8はK群付近他から出土。梵字アクを刻む。左側面に梵字の一部が残ることから、4面全てに梵字が刻まれていた可能性が高い。沈線の輪はない。内面削り出し。高さ19.1cm、本体高17.4cm、最大幅25.2cm、頂部径13.4cm、底部径13.8cm。9はⅡ区斜面出土で8と同様梵字アクを刻みさらに沈線の輪を伴う。本体高17.1cm。10はⅡ区斜面出土で下端付近の一部のみが残存する。沈線の輪を伴う。残存高10.5cm。11～14は凝灰岩製水輪片である。11～13はⅡ区斜面出土でそれぞれ残存高16.2cm、10.4cm、17.2cm。14はⅠ区出土で、幅27.6cmである。水輪との接続部



第52图 板碑拓本集成 (1/8)

は円形。

(4) 陶製五輪塔 (第53図・図版41)

第53図1～13は陶製五輪塔片である。色調はいずれも共通して淡黄褐色で、胎土は精緻である。全体で1～2個体分ほどか。1～5は火輪。1・2は頂部片で空風輪との接続部は円形。いずれも外面はナデのち丁寧なヘラミガキ。内面はナデ、一部指頭圧痕。1はⅠ区出土、2はⅡ区斜面出土。3はⅡ区斜面とⅠ区から出土したものが接合している。外面はナデのちヘラミガキ、内面は刷毛目。製作時に粘土板を折り曲げた痕跡として横方向にしわが伸びており、それより下位では縦刷毛、上では横刷毛となっている。その上からナデ、指頭圧痕が施されている。4・5は火輪の下端部で、外面はナデ、ヘラミガキ、内面は刷毛目、ナデ。4はⅠ区から、5はⅡ区斜面から出土。6～8は水輪片。6は水輪の頂部片と考えた。頂部復元径17cm、現存接続部口径11.8cm。外面ヨコナデ、ヘラミガキ。内面はナデ、横刷毛。7と8はいずれもⅠ区出土で、接合しないが同一個体の可能性が高い。梵字は部分的な残存からア(大日如来)と考えられる。外面ヘラミガキ、内面は横刷毛のちナデ、指頭圧痕。復元最大径30.5cm。8は地輪との接続部で調整は内面外面ともヨコナデ。最大径15cm。9はⅡ区斜面出土で地輪頂部の接続部か。外面はナデ・ミガキ、内面はナデ。10～13は地輪片。10はⅡ区斜面出土で外面ナデ・ヘラミガキ、内面は刷毛目のちナデ。高さ18.6cm。底部は中空で、下端は面的に整形している。11～13はいずれもⅡ区斜面出土(11はⅢ区1トレンチ出土品と接合)。全て外面ナデ、ミガキ、内面刷毛目のちナデ、指頭圧痕。

(5) 銅銭 (第54図・図版35)

第54図は包含層出土銅銭の拓本である。1はⅡ区斜面出土の宣和通宝(宋、1119年)で、径2.4cm、孔幅5.5mm。2・3は寛永通宝。2はK群付近出土で径2.3cm、孔幅6mm。3は土3付近出土で径2.3cm、孔幅6.5mm。4はⅡ区斜面出土の半銭で、「大日本」の「大」、「明(治)十(年)？」の字が部分的に確認できる。径2.2cm。5～7は摩滅のため判読不能。5は表探品で径2.1cm、孔幅6.5mm。6はⅡ区斜面出土で径2.1cm、孔幅7mm。7はⅡ区斜面出土で径約2.5cm。

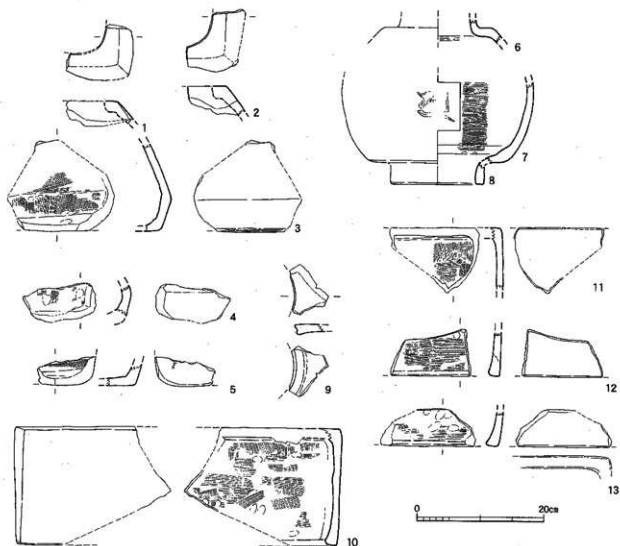
(6) その他 (第55図・図版35)

第55図1は銅製の吊り金具。A群付近の包含層より出土。銅板を折り曲げて整形し、上端部には銅製の輪を通してある。現存長3.4cm。北九州市の白岩西遺跡でも同様の製品が出土している。2はⅠ区出土の銅製品。球形の破片だが詳細不明。現存長2.3cm。3はⅡ区斜面より出土した勾玉である。付近から火葬骨片も出土しており、上方の墓から流出した可能性も考えられる。白色で一部黒く変色している。片側穿孔か。材質は不明。全長3.9cm、最大厚1.2cm。4はⅡ区斜面出土のサヌカイト製石鏡。長さ2cm、最大幅1.45cm、厚さ3mm。5はⅠ区出土の黒曜石製石鏡。先端部欠損。残存長1.65cm、最大幅1.25cm、厚さ3mm。

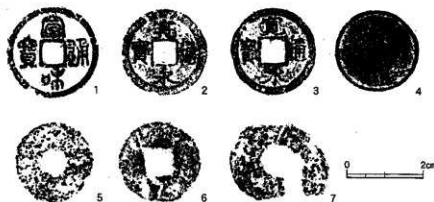
5. Ⅲ区の調査と出土遺物

(1) 各トレンチの概要

Ⅲ区では、3ヶ所にトレンチを設定した。1トレンチは3m×8mで、南壁で土層を確認した(第11・13図)。2トレンチは1.5×1.5m、3トレンチは2×2mである。3トレンチについても、



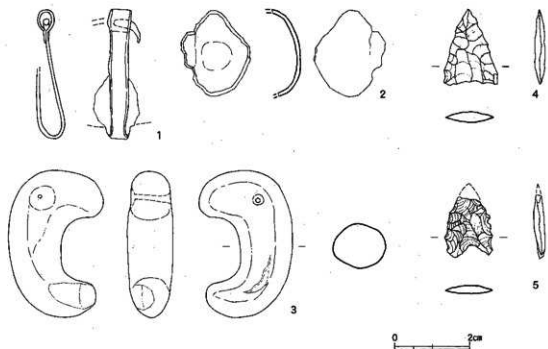
第53図 包含層出土陶製五輪塔実測図 (1/6)



第54図 包含層出土銅銭拓本 (1/1)

道③1トレンチ1・1
 区墓域の断ち割り2ト
 レンチとの土層上で
 のつながりを確認し
 ている (第11・13図、
 本章第1節参照)。1ト
 レンチ付近はやや広
 いテラス面を形成し
 ているが、トレン
 チ内からはビット
 が2基検出された
 のみで、石塔群や火

葬骨は出土していない。また2・3トレンチでは、土師皿などが出土しているが、明確な遺構は認められなかった。



第55図 包含層出土銅製品・勾玉・石鏃実測図(1/1)

(2) 出土遺物

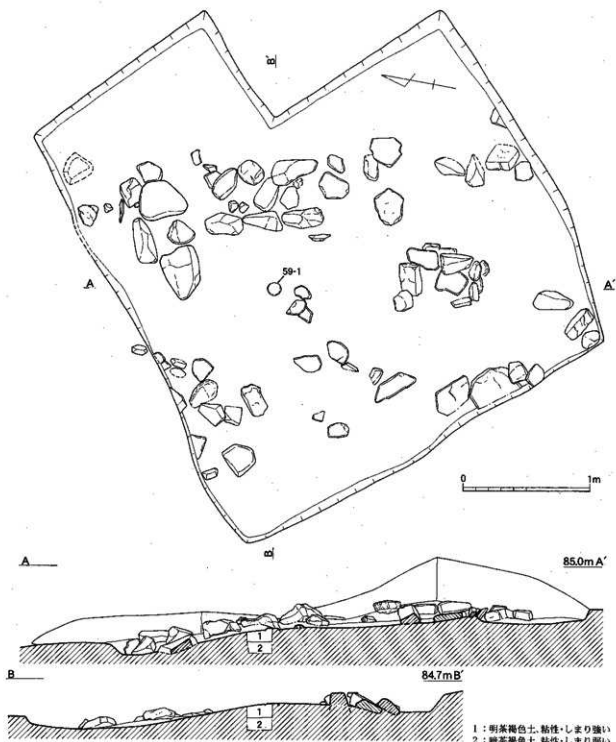
Ⅰトレンチから凝灰岩製の五輪塔火輪が出土しているが(第51図1・図版40)、上から転落してきたものと考えられる。他に土師皿等が出土している(表1参照)。

第3節 Ⅱ区1～8トレンチの調査

Ⅱ区斜面は全体の測量図でもわかるように、扇形にコンターラインがめぐっており、西側を向いた緩斜面を形成しているが、所々に小テラス面が造成されている。トレンチはこうした小テラス面を中心に設定したが、いずれのトレンチでも石組み遺構等が検出された。各トレンチは基本的に表土層と明褐色の真砂土層をあわせて20～40cm下げたところで遺構を検出しており、現在の地形はある程度由来の墓域の地形を残しているものと考えられる。

1. Ⅱ-1トレンチ(第56図、図版22)

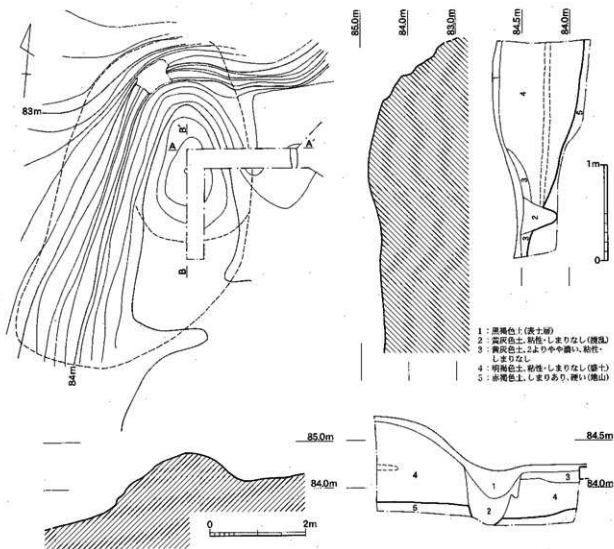
調査区南側のテラス面に設定した。一部石材が露出していたこともあって、10～20cm下げたところで遺構面となった。ピンボールド確認したところ、この面から約30cm前後で地山面となるようである。ここでは、ほぼ南北を長軸とする形で、約3m×2mの長方形の範囲に広がる石列状遺構を検出した。石材は花崗岩を主体とする。ここからは少量ではあるが火葬骨も出土している。これらの石列ないし区面の性格については下部を調査していないため不明である。またこの石列等の分布範囲の中心部から、土師皿が1点伏せた状態で出土した。これについては20cm四方でサブトレンチを設定して20cm程度掘り下げたが何も出土しなかった。この土師皿出土地点を中心として、全体が



第56図 II-1トレンチ区実測図 (1/30)

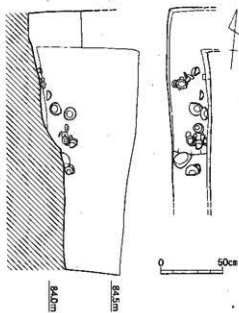
ややマウンド状(高さ20~30cm)に盛り上がっているが、隣接する2トレンチの土層から判断する
 かぎり、このテラス面自体が盛土によって造成された可能性が高いと考えられる。

1トレンチ出土遺物(第59図1~5、図版41) 1はトレンチ中央から出土した坏a。口径11.6cm、
 底径8.7cm、器高1.8cm。2は小皿a。3~5は1トレンチ付近での表採品。3は小皿b。4・5は
 坏a。3点ともに板状圧痕がみられる。



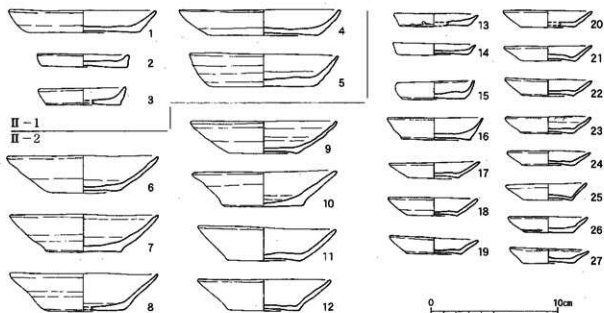
(上) 第57図 II-2トレンチ実測図 (1/80・1/40)

(左) 第58図 II-2トレンチ内土器出土状況実測図 (1/30)



2. II-2トレンチ (第57・58図、図版22・23)

2トレンチを設定した場所はⅡ区斜面のほぼ南端部にあたるが、調査前からマウンド状に盛り上がっていることが確認されていた。このため、L字状のトレンチを設定し、このマウンド状の高まりの性格を明らかにすることを目的として調査を行った。その結果、この部分全体が盛土によるものであることが判明した。この盛土の上層中からは火葬骨が検出されている。また現地表面から50~60cm下げた面(4層最下面)において、土師皿がまとまった形で出土した。さらにこの土器周辺からも、少量ながら火葬骨片が出土している。土層の観察により、この盛土が1トレンチのテラスの



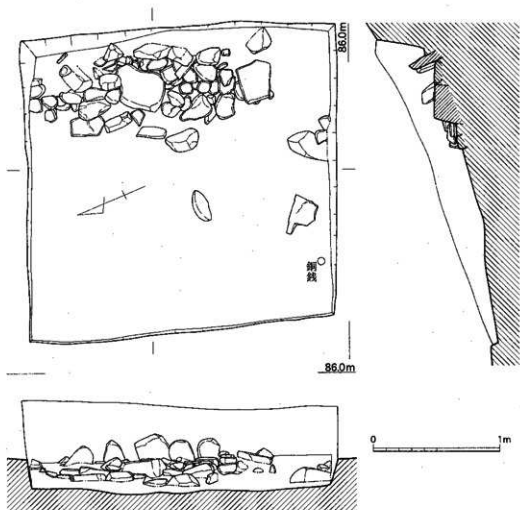
第59図 II-1・2トレンチ出土遺物実測図(1/3)

造成とほぼ連動するとみられることから、基本的には墓域の造成に伴う盛土遺構と考えられる。また標高84.2～3m付近で若干赤みの強い赤褐色土の帯が確認できるが、このことから、この高さで作業を一度中断し、地山に近い土を水平に盛った可能性が想定される。第59図に示すように、出土土器が坏bやそれと共通したつくりの小皿主体で構成されており、本墓域の中でも新しい段階の所産と位置付けられる。

2トレンチ出土遺物(第59図6～27、図版41) 6～12はいずれも坏bである。全て糸切り底で、板状圧痕を伴うものはない。また6や9などで顕著であるが、胎土が精緻で薄く仕上げるものが多いのが特徴である。口径は11.8cm～10.5cmの範囲で分布する。13・14は小皿aで、それぞれ復元口径6.6・6.4cm。15・16は小皿bで、15は板状圧痕を伴う。17～27はいずれも坏bと共通したつくりの小皿で、非常に薄く仕上げる。板状圧痕を伴うものはない。口径は7cm前後から6cm前後に分布する。器高は1cm～1.3cm。底径は4cm前後に集中する。第2節の包含層出土土器(第46～48図)をみても明らかのように、この特徴的な小皿は少数派であり、坏bとあわせて2トレンチでまとまって出土している点に注意される。

3. II-3トレンチ(第60図、図版23)

約2.5m×2.5mでトレンチを設定した。ここでは丘陵斜面に近い側で板碑群を検出した。この板碑群は、30cm×30cm×高さ20cm+αの基壇状の石を中心として、その周囲に石を敷き詰め、この背後に自然石を加工した板碑を立て並べる形で構成されている。板碑は合計5基が原位置を保った状態で立って出土しており、西をほぼ正面とする。いずれも高さ20cm前後で、梵字等は見られない。石材は花崗岩を主体とする。またトレンチの西南隅付近で、銅銭5枚がまとまって出土した。これらは上方から流入したような状態で出土しており、原位置を動いているものと考えられる。なお遺構検出面からは火葬骨は出土していない。



第60図 II-3トレンチ実測図 (1/30)



第61図 II-3トレンチ出土遺物実測図 (1/1)

3トレンチ出土遺物(第61図、図版42) 1~5はトレンチ西南隅でまとめて出土した銅銭である。1は熙寧元宝(宋、1068年)。径2.3cm、孔幅6mm、2・3、4・5はそれぞれ重なって錆着した状態で出土している。いずれも字が書いてある面同士がはりついているため、詳細な識別はできない。2は径2.4cm、孔幅7mm。3は径2.4cm、孔幅6.5mm。4は径2.4cm、孔幅6mm。5は径2.45cm、孔幅5mm。

4. II-4 トレンチ (第62図、図版24・25)

約2.4m×4mの範囲にわたってトレンチを設定したところ、原位置を保った板碑と石列による区画が出土した。また墓域全体にわたって足元を埋めるように緑泥片岩が敷き詰められている。本トレンチからは、原位置の板碑が計15基、五輪塔地輪が1基出土している。このうち、梵字が刻まれた板碑が3基(1・7・8号)確認できた。これら原位置の石塔群はほぼ軸をそろえ、横並びで同じ向きに立てられている。正面は、西からやや南に振れた方向であり、A群以下の各墓域とほぼ共通している。この他に、本トレンチの上方から流れ込んだと考えられる板碑が2点、凝灰岩製の火輪片1点、花崗岩製の相輪片2点などが出土している。

この墓域は、石列で区画された南側の一角を中心とする。この一角は東西約1.5m×南北約1.8mにわたってコ字形に石材が配置されている。区画の南側が完結していないが、区画の範囲はさらに南側に拡大する可能性もある。また区画の北辺は一部途切れる。この区画の中からは、原位置を保った板碑が3基、相輪片が2点、古瀬戸蔵骨器が1点出土した。なおこの2点の相輪片のうち、3号板碑の下から出土した相輪No.2(基部)の破片は、一段下のD群の上から出土した頂部の破片(相輪No.3)と接合する。

古瀬戸蔵骨器は、ピットの中に埋置された状態で出土した。口縁部から頸部にかけての部位が打ち欠いてあり、中に火葬骨を入れた後、土師皿の破片を被せて蓋としてあった。その後、上に緑泥片岩を敷き詰めている。この蔵骨器の位置は、1号板碑のやや斜め前方、2号板碑の側面にあたる。1号板碑は正面に梵字キリクを刻むが、額部や頂上線はつくり出していない。

本墓域は、この石列による区画を中心として、さらに北側と東側に広がっている。北側では4号・5号板碑が確認できる。東側では、6号～12号板碑がほぼ同列に、同じ方向を正面にして立てられている。6号板碑は根元のみで上半は欠損している。また12号板碑から若干離れて13号板碑が、10号～12号板碑の背後に14号・15号板碑が立てられている。これらのうち、7号・8号板碑には梵字キリクが刻まれている。7号板碑は頂上線1本のみ、8号板碑は頂上線1本と額部を備えている。また6号板碑の北側にほぼ隣接して、約25cm四方の五輪等地輪が出土している。隣接する5トレンチの板碑群との関係は明確ではないが、五輪塔地輪周辺は北側・東側にさらに若干広がっているものと考えられる。なお、下部を調査していないため本墓域での拡張の順序等は不明である。

また図に示したように、特に何カ所か集中して火葬骨が出土している。さらに、包含層中からも火葬骨が分散して出土している。このことは、石塔が建てられた後でも、火葬骨を散骨して上に土を被せる、といった形で追葬が繰り返し行われていた可能性を示唆する。またこれ以外にも、板碑や緑泥片岩の下部には納骨ピットや蔵骨器が存在することが考えられる。

この墓域では、多量の緑泥片岩が敷き詰められているが、先に見たP群と同様、板碑の前面に緑泥片岩を配置するという特徴が認められる。またこれらの緑泥片岩のうち、原位置を動いたもの(バンケース1箱分)について水洗したが、文字が書かれたものなどは確認できなかった。

4トレンチ出土遺物(第63図、図版39・41・42) 1は古瀬戸蔵骨器の蓋として使用された坏a片。復元すると口径が14.8cm前後とやや大きくなるが、これは土器自体が1/3程度の破片であることに加え、縦横が歪んでいることに起因するものと考えられる。このためここでは断面のみの掲載とした。2は古瀬戸蔵骨器。口縁を打ち欠いており、破片が一部トレンチ内から見つかっている。接合しないが同一個体と考え復元して図示している。復元最大高25.0cm、復元口径4.4cm。胴部最大径17.5cm、底径9.5cm。外面から口縁内面にかけて灰釉を施しており、全体的に淡緑白色を呈す。口縁

は中位に突帯を伴う。肩部と胴部中位にそれぞれ脚描文の沈線をめぐらす。また肩部沈線下位には画花文により巴文を描いている。内面には粘土帯の接合痕が明瞭に残っている。口縁突帯の特徴等から古瀬戸中期様式に位置付けられる。3～16はトレンチ内出土の土師皿。3～5は坏a、6～9は小皿a、10～13は小皿b、14～16は坏bと共通する薄手の小皿である。17～19は花崗岩製板碑。

17は1号板碑の拓本。幅19.5cm。18は7号板碑の拓本。頂上線部の幅13.6cm。19は8号板碑の上半実測図と拓本。額部幅15.8cm。20～25はトレンチ内出土の石塔類。20は花崗岩製板碑で梵字カを刻む。額部を刻むが摩滅が進んでいる。下端欠損。高さ31.8cm、幅15.2cm、厚9.2cm。21は大形の板碑で梵字キリークを刻み、額部を明瞭に削り出す。完形で高さ65cm、幅18.6cm、最大厚12cm。22～24は花崗岩製の相輪2点分。22の頂部はC群下層で出土したもので、23のⅡ区4トレンチ出土の基部と接合した。両者あわせて高さ45.2cm。上から宝珠・請花(8弁)・九輪・請花(8弁)・伏鉢・軸部となる。また宝珠部分は平坦面を削り出している。宝珠最大径9.6cm、伏鉢径10.4cm。24は下半欠損。請花は8弁。現存長25.6cm、宝珠最大径9.65cm。25は凝灰岩製の火輪で半分以上欠失。頂部の接続孔は方形、底部の接続孔は円形で、両者は貫通している。底部接続孔残存部の計測値から、最大幅約30cm、高さ13cm、頂部辺約12cmと復元できる。26・27はトレンチ内出土の陶製五輪塔空風輪片。ただしⅠ区包含層より出土した陶製五輪塔とは異なり、胎土はやや粗、色調も黒灰色で軟質である。両者は接合しないが胎土・焼成等ほぼ同一。26は空輪部で1/2欠損。内面指頭庄痕、外面ナデ。27は風輪部で1/2欠損。内外面ともにナデ調整。

5. Ⅱ-5 トレンチ (第64・65・67図、図版25～27)

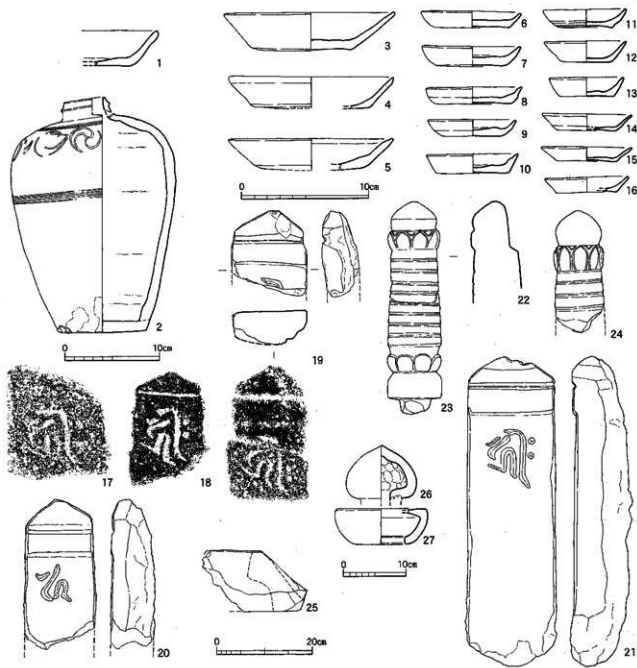
4トレンチ北側の緩やかな斜面となっている場所に、幅約2m、長さ約4.5mのトレンチを設定した。ここからは、斜面のやや下側で板碑2基が原位置を保ち、並んだ状態で出土した他、上段の平坦面から、銅製筒形容器を納めた火葬墓が出土した。他のトレンチと同様、斜面に流入した土砂が堆積しているが、第65図の4層及び第67図の2層は、この墓域の基盤となる層であり、この層の削り出しによってテラス面が造成されているようである。またこの基盤層はⅠ区の4層に対応するものと考えられる。

板碑群(下段) この板碑2基と上段の火葬墓は一続きの斜面を形成するが、板碑群の前面で段が落ちる。この板碑群と隣接する4トレンチの墓域がどのように連続するかについては、間にベルトを挟んでいるため不明な点が多いが、トレンチ4で最も北側に位置する五輪塔地輪とこれら2基の板碑のレベルが大ききずれしていることから、この5トレンチの段が独立してせり出した形になっている可能性が考えられる。

板碑は2基出土している。右側の1号板碑は凝灰岩製で、上面は三角に削りだし、前面上部には2本の頂上線を入れ、額部をつくり出している(第66図)。前面は平滑に仕上げられているが、梵字は刻まれていない。背面には粗く整形した痕跡が顕著に残っている。額部幅16cm。またこの1号板碑の前面から、緑泥片岩の川原石が1点出土した。



第62図 II-4トレンチ・蔵骨器出土状況実測図(1/30)

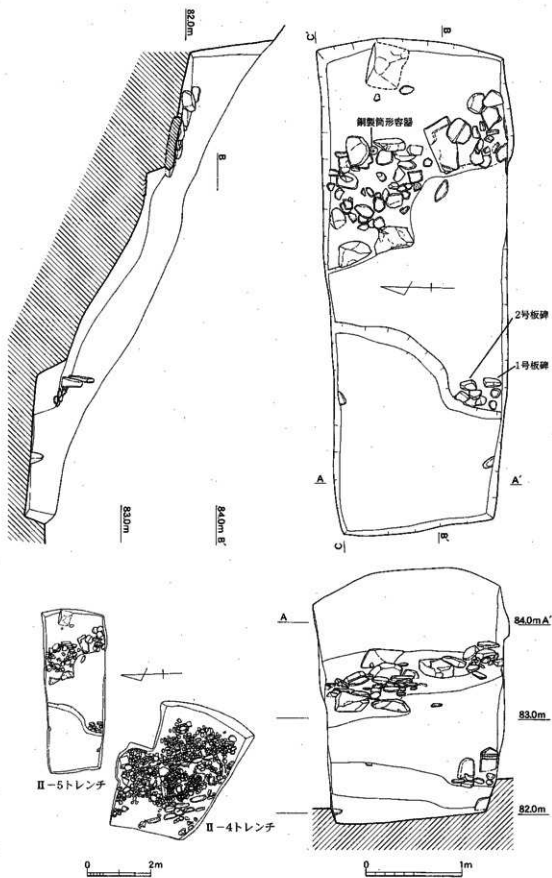


第63図 II-4区トレンチ出土遺物実測図(1・3~16は1/3、2は1/4、26・27は1/6、それ以外は1/8)

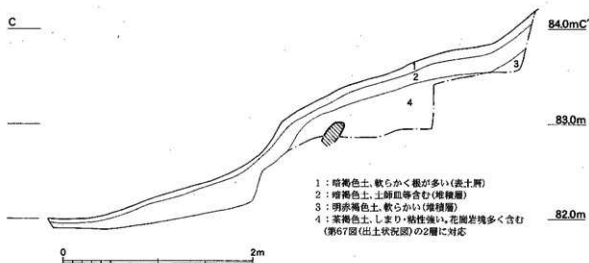
左側の2号板碑は、花崗岩を全面平滑に磨き上げたもので、稜線等は明確でなく、丸く仕上げられている。梵字は刻まれていない。この板碑の前でも川原石の配置が確認できた。

火葬墓(上段) 上段平坦面では、銅製筒形容器と2基の納骨ピットを中心として石材を配置した火葬墓を検出した。またこの火葬墓の南側にも大型の石材が集積しているが、これについては検出状態で図化を行っているため、性格については不明である。

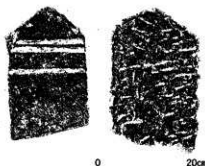
火葬墓は、自然石を利用した板碑2基と、その間に銅製筒形容器、さらにその前面に並べ置かれた石材から構成されている。石材の範囲は約1m四方にわたっており、さらにその前面に大型の石材2個を並べ、独立したテラスとして区画する形になっている。銅製筒形容器の前面には、左右そ



第64図 II-5トレンチ実測図 (1/40・1/120)



第65図 II-5トレンチ土層図 (1/40)



第66図 II-5トレンチ凝灰岩
板碑拓本 (1/8)

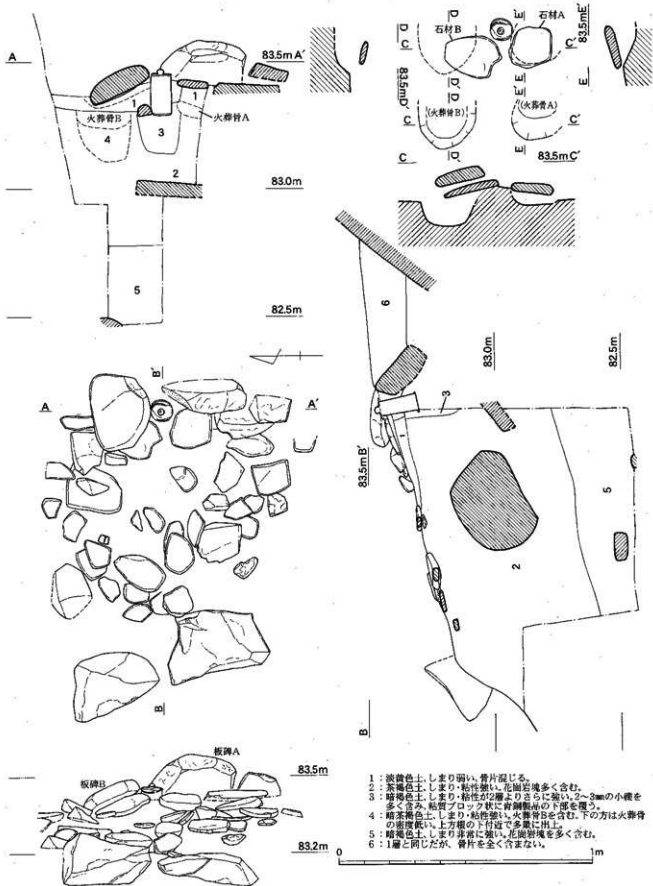
それぞれ1個ずつ扁平な石材が配置され、その下から各々1基ずつ納骨ビットが出土している。ここでは向かって右側(南側)の石材をA、左側(北側)の石材をBとして記述を進める。銅製筒形容器の背面には2基の板碑が立て並べられているが、左側(北)の板碑Bは前に倒れ込んでいる。どちらの板碑にも梵字は刻まれていない。

この銅製筒形容器を取りあげるにあたり、その前面にサブトレンチを設定して、配置された石材を外しながら下部施設の調査を行うという方法を使った。まずはじめに石材Aを外してサブトレンチを設定しようとしたところ、石材Aの直下

から、火葬骨片がまとまって出土した。その範囲は約20cm四方、深さ10cmほどである。こちらの納骨ビットを火葬骨Aとする。また石材Bに関しては、石材Bの上面及び直下の双方から多量の火葬骨片が出土している。以下これを火葬骨Bとする。

火葬骨Aと火葬骨Bの間には何も無い部分があり、それぞれが独立したビットとして埋葬が行われていると考えられることから、両者は区分して考える。火葬骨Bについては、石材Bの上面と下層とで異なるタイミングでの埋葬が行われた可能性も否定できない。ただし、火葬骨Bの出土状況自体が石材Bの間にさむとはいえる程度連続することから、ここでは一括して取り扱っている。以上から、火葬骨Aが板碑Aと石材Aに、火葬骨Bが板碑Bと石材Bにそれぞれ対応するものと考えることができる。

銅製筒形容器は、これら板碑や石材の間から、蓋と上部1/4程度を露出するような状態で出土した。土層観察の結果、この銅製筒形容器の直下にはやや硬めの土(3層)が足場として設置されており、その上に筒形容器が埋置されていることが判明した。また火葬骨Aや火葬骨Bも、この3層上面である83.3m付近から掘り込まれて埋葬されているため、2層上面にこの高さで一度平坦面が形成されているものと考えられる。また筒形容器や板碑A・Bについては、火葬骨A・Bの埋葬後に上面から掘り込んだ形跡が認められないことから、全体の石材の配置・火葬骨A・Bの埋葬・筒形容



第67図 II-5トレンチ火葬墓・筒形容器出土状況実測図(1/15)

器の埋置・板碑A・Bの埋置は、比較的短期間の間に連続して行われたものと考えられる。またこの3層の下層からは、大形の花崗岩塊が出土している。この場所は、谷地形の奥部にあたることから、こうした花崗岩塊も流れ込んだものと考えられる。これをふまえるならば、ここで確実に遺構と考えることができるのは筒形容器の足場である3層や火葬骨A・Bのビット等である。

以上から、この火葬墓の造営過程を復元すると以下ようになる。

- ① 2層上面におけるテラス面の造成
- ② 筒形容器の足場設置(3層)・火葬骨B・火葬骨Aの埋葬
- ③ 筒形容器・板碑A・板碑Bの設置
- ④ 1層による埋め戻し、併行して石材A・B他の石材の配置

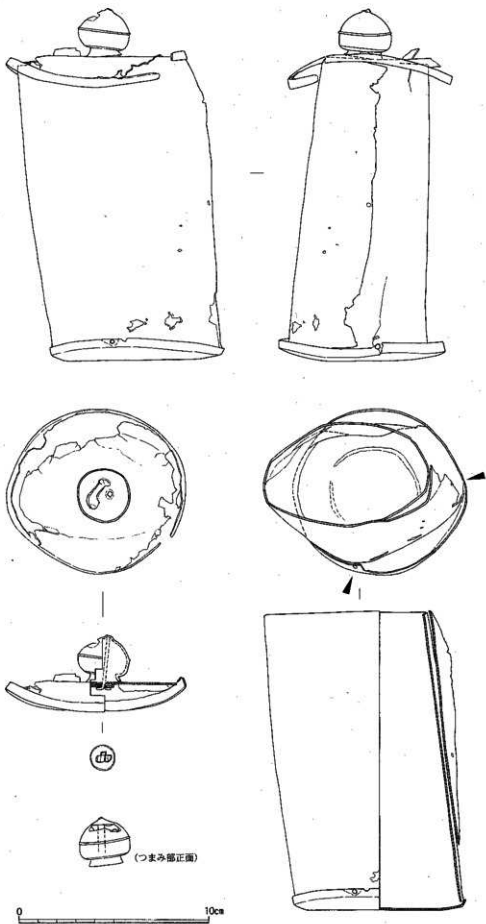
また、銅製筒形容器の中からは火葬骨は出土せず、土砂と細い木の根などが出土したのみである。火葬骨がその前面に掘り込まれたビットから出土していることから考えると、この筒形容器の中には元来火葬骨は納められていなかった可能性がある。この筒形容器の性格については後述する。

5 トレンチ出土遺物(第68図、巻頭図版2) 5トレンチからは土師皿等の出土は確認できていない。また火葬骨A・B以外では火葬骨片の出土もみられなかった。ここでは銅製筒形容器について報告を行う。なお当該容器の構造及び材質の分析結果の詳細については第4章第1節において加藤和成氏がまとめているのであわせて参照願いたい。

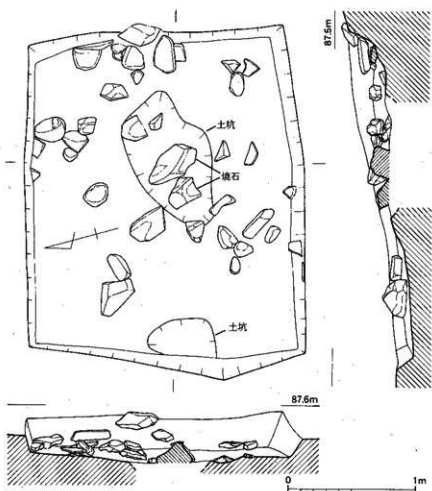
筒形容器は蓋の部分まであわせた現況での頂部高が18.5cm、筒身部のみの高さが15.8cm。土圧により前後に歪んでいるため正確な数値ではないが、底径は8.8~9.2cm。蓋の直径は現状で8.7cm~9.4cmで、実際は底径と同程度かと考えられる。蓋は土圧や根等により損傷が著しい。蓋はつまみ部と蓋板とからなる。つまみ部は、幅3.5mm、厚さ2mm、長さ3cmの軸を蓋板下から差し込み、さらにそれに直径1.25~1.3cm、厚さ1mmの円板を挟んで、軸を二股に折り返すことにより固定している。この軸は宝珠の頂部まで刺さっている。円板には2.5mm×5mmの穴が開いているが、蓋板には軸金具のための2mm×3.5mmの穴しか開いていない。またつまみ部には窓が開いているが、これは元来完全な宝珠形であったものに切り込みを入れて内側に折りこみ、窓状に仕上げたものである。この窓の下に一条の突線がめぐっている。つまみ部本体の高さは2.5cm、宝珠部のみで2.15cm、宝珠部の最大幅が2.7cmである。また蓋板の端部は幅4~5mmで折り曲げによりかえりを設けている。蓋板自体の厚さは1mm程度で、それよりも薄い部分も見受けられる。

筒身部は、1枚の銅板を丸く巻いたものと底板からなる。底部と筒身板は観察結果では2ヶ所のピンで固定しているようであるが、180°の対称位置ではない。筒身自体は前後にかなり歪んでいるが、加藤氏の報告にあるように、元来はピンで固定していたものと考えられる。この筒身板は、復元すれば縦15.2~3cm、横27~28cm、厚さ1mmの銅板と考えられる。底部と筒身を留めるピンの頭部は幅3mm程度。内側の固定の方法は不明である。底部も蓋と同様端部に4~4.5mmのかえりをつける。底部は厚さ1mmで、一部それより薄い箇所もみられる。

本容器の内容物や性格については不明であるが、上から底部内面を覗き込むと、底板中央付近に直径5.2cmほどの円形の痕跡がめぐっているのが確認できる(巻頭図版)。またこの円形痕跡の内側と外側とで錆の進行度合いが異なっているのがわかる。前面の納骨ビットで火葬骨が出土する一方



第68図 II-5トレンチ出土遺物実測図(1/2)



第69図 II-6トレンチ実測図 (1/30)

6. II-6トレンチ (第69図、図版27)

今回の調査区で最も高い位置にあるテラス面にトレンチを設定した。ここでも表土層から20cmほど下げたところで遺構面を検出した。遺構の範囲は全体的にさらに広がる可能性がある。ここでは中央で土坑1基を検出している。表土層から掘り下げていく段階で、この土坑の上面では多量の炭化物が出土した。炭化物を除去すると、暗灰色の埋土を伴う土坑と、その中に火を受けて焼けた痕跡のある石材が2基確認された。土坑の範囲は長軸約1.1m、短軸0.7mの長楕円形である。また周辺に散在する石材の一部でも焼けた痕跡が確認できる。さらに西側(斜面側)でも暗灰色の土坑状の遺構を検出した。またこの西側の土坑周辺では、土師皿等が出土している。なお、この遺構検出面では火葬骨は出土していない。

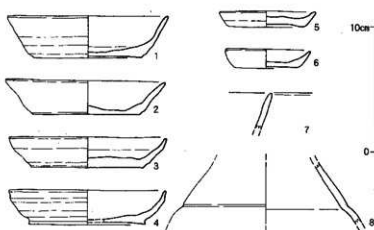
6トレンチ出土遺物(第70図、図版42) 1~4は環a。いずれも糸切り底で板状圧痕を伴う。5は小皿a、6は小皿b。どちらも板状圧痕が認められる。7は須恵質土器の口縁部小片。8は磁器壺の小片。外面赤褐色釉、内面黒釉がかかる。胎土精良。

7. II-7トレンチ (第71図、図版28)

5トレンチのやや北側のテラス面に、約3.1m×1.7mの範囲でトレンチを設定した。ここでは、表

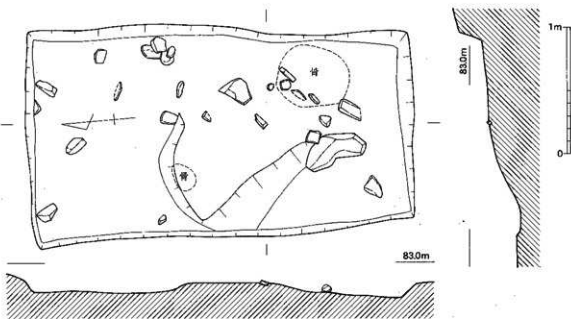
で、本容器の中から火葬骨等が全く出土しなかったことを考えるならば、経巻等何らかの有機質のものが納められていた可能性についても考慮する必要がある。

なお、加藤氏の分析結果によれば本容器はほぼ純銅製とよべるものであり、また外面には銘文や装飾等は確認されていない。



第70図 II-6トレンチ出土遺物実測図(1/3)

土から5~10cm下げたところで火葬骨がまとめて出土したためこの面で止めている。トレンチの中央付近がやや高くなっており、火葬骨はこの範囲内の2ヶ所からまとめて出土した。板碑や五輪塔の出土はなかったが、火葬骨の出土状況から、この中央の盛り上がった部分を中心とした埋葬関連遺構である可能性が考えられる。

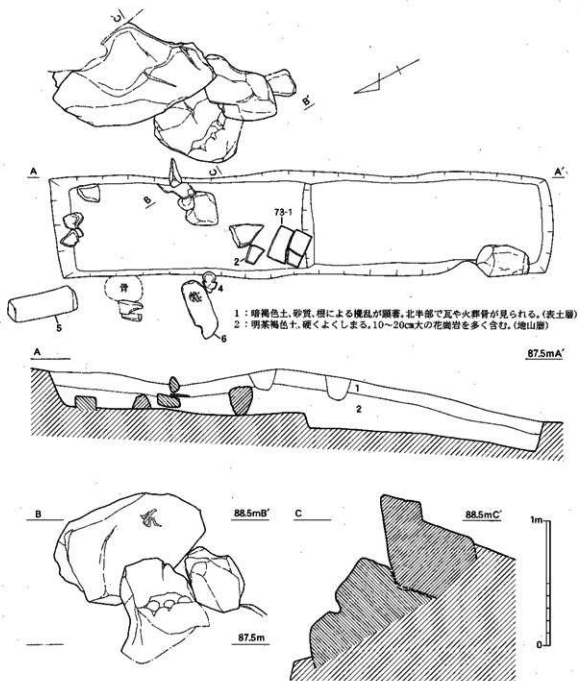


第71図 II-7トレンチ実測図(1/30)

8. II-8トレンチ(第72図、図版28・29)

調査区北東隅の高台になった地点に、梵字を刻んだ大きな花崗岩があることが、調査開始前から確認されていた。またこの周辺では板碑等が散乱する状況が認められた。このためこの花崗岩塊の前面に約4m×0.8mのトレンチを設定した。その結果、ほぼ10cm程度の表土層の直下が地山層であることが明らかになった。この表土層の中からは、火葬骨片や瓦等が出土している。明確な遺構等は確認できなかったが、この付近で板碑や空風輪などが出土していることに加え、火葬骨が検出されていることから、この花崗岩の周辺に板碑等が立て並べられていた可能性なども考えられる。

花崗岩(梵字:カ) 花崗岩塊が3つ組合わさった状態で存在する。現在は背後の木の成長のため本体の花崗岩塊の下に空間が生じている。本体は幅約1.2m、高さ約0.9m、奥行き約0.8mの花崗岩塊で、最も広い平面を正面にし、中央からやや右上の位置に梵字の「カ」(地藏菩薩)を刻んでいる。

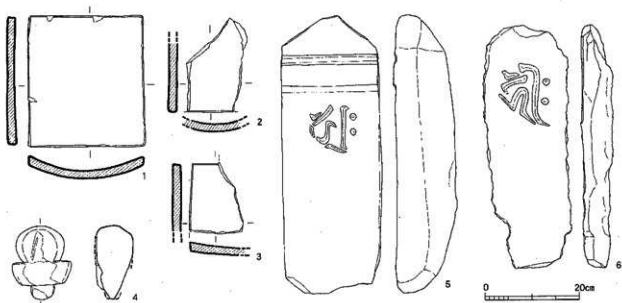


1 : 暗褐色土、砂質、根による擾乱が顕著、北半部で瓦や火群骨が見られる。(表土層)
2 : 明茶褐色土、硬くよくしまる、10~20cm大の花崗岩を多く含む。(地山層)

第72図 II-8 トレンチ実測図 (1/30)

この梵字が刻まれた面はほぼ南北軸と重なっており、梵字がちょうど真西を向く形となっている。またこの花崗岩本体を支える手前側の石材には、石材を切り出す目的で穿たれたかと思われる穴が3つ並んでいるのが確認できる。いずれも直径8~10cm、深さ10cm程度である。

8 トレンチ出土遺物 (第73図、図版39・42) 1~3はトレンチ内より出土したいぶし瓦。1は28.1cm×25.3cm。調整は凹面・凸面ともにナデ。2は若干茶色がかつた灰色を呈す。調整ナデ。3は調整ナデ、側面切り離し。4は凝灰岩製空風輪。全体的に摩滅・剥離が進む。高さ15.8cm、空輪部幅10.4cm、風輪部幅12.7cm、空輪部の現存厚8cm。接続部は円形でなく長方形。5・6はトレンチ前面より出土した花崗岩製板碑。5は正面に梵字アクを刻み額部を明瞭に削りだす。完形で高さ80cm、



第73図 II-8トレンチ出土遺物実測図(1/8)

幅28.4cm、最大厚17.2cm。6は薄く平たい花崗岩に梵字キリクを刻んだ板碑。断面は薄い逆三角形状となる。完形で高さ70cm、最大幅23.8cm、最大厚9cm。

第4節 IV区の調査

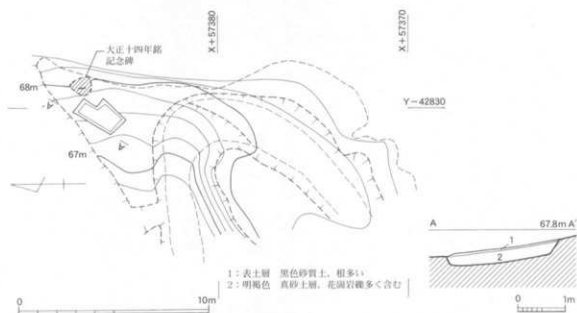
IV区では、大正十四年銘の石碑を中心に地形測量を行った(第74図)。北側は岩盤が露出しており、その前面に石碑が建てられている。付近は緩やかに傾斜する平坦面であるが、西側は削られている。その南側では遊歩道が下から上に続いている。

ここでは2.3m×1.2mの範囲でトレンチを設定したが、遺構・遺物は確認されず、また層位も表上直下は地山であった(図版29)。

石碑は台座の上に本体を組み合わせたもので、接続部はセメントで固めてある。現存法量は、台座を除いた本体の高さが95cm・幅34cm・奥行き22cm、台座の大きさが、高さ約36cm・幅75cm・奥行き55cmである。石碑の正面には、縦4行で以下の48文字が刻まれている。

「大正十四^年丑二月廿六の吉日
丑之歳廿五卅七四十九六十一の
男女合計百七十二人相詣以て相
樹百本を奉納す」

なお、「大正」の「大」字が「天」となっているが、これは後世の追刻によるものと考えられる。



第74図 IV区平面図 (1/200)・トレンチ実測図 (1/80)



調査区周辺の丘陵地遠景 (北東から)
(宝満山方向から太宰府天満宮方面を望む)

第4章 自然科学的分析

第1節 銅製筒形容器の構造・材質分析及保存処理

加藤 和成（九州歴史資料館）

1. はじめに

浦ノ田遺跡4次調査においては、金属器を中心に保存処理を必要とする遺物が出土している。今回、このうち筒形容器について、出土時点から一連の保存処理作業の成果を報告する。

2. 現地における保全と取り上げ作業

調査担当者の連絡を受け、現場へ急行した際の遺物の表面状態は、一部に緑青が見えるものの、大きく腐食していない比較的良好な状態であった。この時点でこれは経筒あるいは蔵骨器であることが想定されたので、筒の内容物の存在が気になったが、蓋の一部が破損し、中に土砂等が入りこんでいる状態であった。このような現状を踏まえて調査担当者と協議し、取り上げまでの期間はなるべく短くするものの良好な表面状態の維持が必要になった。そのため遺物が直接、大気に触れることや損傷を防止するため、アクリル樹脂（商品名：パラロイドB-72 以下B-72と略す）を塗布し、現状の保全を図った。なお樹脂の濃度は5%、溶剤にはキシレンを用いている。また、取り上げまでの期間、随時、状態を観察し変化等がないか点検している。

そしてすべての現場作業が終了した時点で取り上げ作業を行った。遺物の状態が比較的、良好であったことや、予めアクリル樹脂で強化していたため、スコープを使ってそのまま取り上げた。

3. 処理前記録とクリーニング作業

九州歴史資料館に搬入された遺物は、写真撮影等の処理前記録の後、表面に付着する土砂のクリーニングから行った。クリーニング前の観察において、筒内部の観察を隙間から行ったが、土砂や草根が多く入り込んだ状態が見られた。クリーニングにおいては、竹串や竹へらなど遺物に対してソフトな工具を主に用いた。ただし強固な土砂についてはエチルアルコールによって軟化させたり、さらに強固なものについては、エアープラシのアルミナパウダーの噴射を止め、エア（窒素ガス）のみを瞬間的に噴きつけて除去した。作業は、筒の内容物の存在に備えて、蓋周辺を優先的に進め、開封することを先に進めた。そして開封された状態を写真4に示す。内部にはこれまでの観察のとおり土砂や草根のみであり、内容物は埋藏中に消失したのであろう。

4. 構造・材質調査

埋藏文化財の保存処理を行う際、その処理方法や材料を検討するにあたっては、その遺物がどのような構造であり、どのような材質であるかを把握することは必要不可欠なことである。こうした作業は一般的に事前調査といわれ、調査の範囲は肉眼では観察できない範囲にまで及ぶ。

(1) 構造調査 (写真1～3)

全体的な劣化状況の把握とともに、構造のうち、蓋のつまみ部分、筒身の接合方法の確認を主な目的として行った。調査は福岡市埋蔵文化財センター設置のX線透過撮影装置(日本フィリップス:MG226/2.25)によって行った。その結果、つまみ自体は3つの部品から構成されており、それぞれを接合して一体としている。内部中央に板状のものを折り曲げた軸があり、それを蓋との接合に端部を舌状に折り返してつまみを固定している。この接合部分を観察すると舌が3枚あるように見える。楔のようにつまみの更なる固定の機能があるのではと考えられたが、画像では確認できなかった。今後の課題としたい。

また、筒身は一枚の鋼板を曲げており、接合には上・中・下の3ヶ所に小穴が見えることから、何らかのピン状のもので固定されていたと思われる。筒身と底板の固定にはピン状のものが肉眼でも確認できる。その他、銘文や装飾などは見られない。

(2) 材質調査 (第75～77図)

この資料は、出土時から緑青があまり見られないことから、青銅製よりもむしろ銅製と呼べるものであろうとは出土時から想定していた。したがって、銅に対してその他の不純物がどの程度存在するかを主眼において調査を行った。調査は福岡市埋蔵文化財センター設置の微小領域用エネルギー分散型蛍光X線分析装置(エダックス社製 Eagle μ -plove)を用いて行った。蛍光X線分析法は資料の表面にX線を照射することで、その資料が含んでいる元素に固有な二次X線(蛍光X線)を検知器で捕らえることで、その強度と分布をピークとして表すものである。したがって資料の表面データを測定していることになり、考古資料のように表面が平滑でないものは、正確なデータであるとは言いがたい面がある。したがって、現在、指摘されているさまざまな問題点や課題に留意しながら、資料のおおまかな組成の把握する必要がある。分析は、非破壊的手法によって、直接、資料に対して行った。分析位置については、緑青が見られない比較的、平滑でオリジナルに近いのではと想定できる位置を選定し、つまみ、蓋の板部分、筒身、底板の4つの部分について、それぞれ3ヶ所行った。分析の結果を第75～77図に示している。図示はつまみ、筒身、底板のピークであるが他の位置についてもほぼ同様の結果を示している。銅以外の微量元素についても検出したかったがピークが低いためヒ素(As)のピークのみを示した。ヒ素は鉛(Pb)とエネルギー値が近いことから注意が必要であるが、チェックを行って判断している。今回の調査では定量分析は行わず、所見については定性分析によって次のように判断した。

- この資料は、ほぼ純銅でできており不純物はほとんど含まない。
- 他の元素が顕著に見られないことから、表面の加飾は施されていない可能性が高い。
- すべての分析位置でほぼ同様のピークが見られることから、同一の材料を用いて製作されていたのではないかと想定できる。

5. まとめと今後の処理方針

今回の調査から、構造についてはほぼ全容がつかめたが、この構造が類似資料のなかでどのような位置なのかまでは調査が及ばなかった。一例として兵庫県神戸市勝姫経塚出土土師筒が参考になるが、今後、類例の把握に努めたい。材質についてもやや疑問が残る。古代～中世の銅製、銅合金製

遺物には一般的に不純物としてヒ素が含まれており、大宰府史跡においても推定金光寺跡出土宝冠の材質調査においてもヒ素の検出があるが、この資料からはほとんど検出できなかった。主成分が銅のみとはいえるが、その他の成分の検出について今後の課題としたい。

保存処理は本報告時点で、整理作業の工程上、クリーニングと応急的な樹脂塗布まで行っている。今後、ベンゾトリアゾール（BTA）による安定化処理を経て、アクリル樹脂（B-72 キシレン5w%溶液）強化処置を行う予定である。

最後に今回の調査にあたっては、福岡市埋蔵文化財センター比佐陽一郎、片多雅樹両氏に機器使用の便宜を図っていただき、さまざまなご意見をいただいた。記して感謝申し上げます。

【参考文献】

- 村上 隆 2000「蛍光X線分析における諸問題」『保存科学研究集会2000 非破壊手法による考古資料の分析と観察』奈良国立文化財研究所。
- 山下史郎・松岡千寿編 1997「勝雄経塚」『兵庫県文化財調査報告第158冊』兵庫県教育委員会。
- 加藤和哉 2003「大宰府出土金属製遺物の自然科学的調査」『続文化財学論集』文化財学論集刊行会。



写真1 筒身X線透過写真1

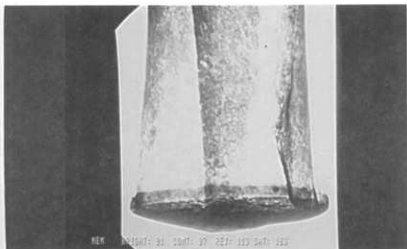


写真2 筒身X線透過写真2

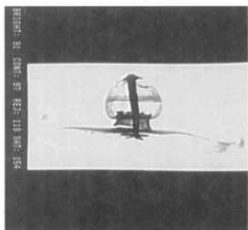


写真3 蓋X線透過写真



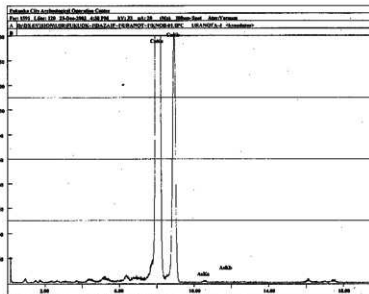
写真4 蓋開封時の内部状況



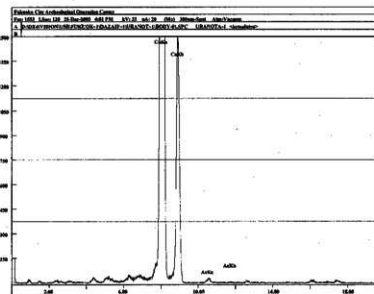
写真5 処理前



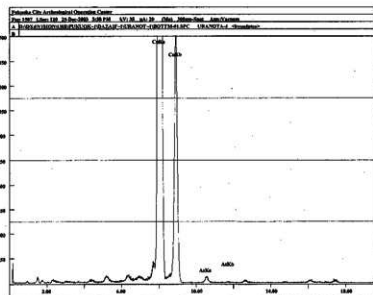
写真6 クリーニング後



第75図 つまみ部分の分析結果



第76図 筒身部分の分析結果



第77図 底部の分析結果

第2節 福岡県太宰府市浦ノ田遺跡4次調査出土の中世火葬人骨

小田 裕樹・中橋 孝博

(九州大学大学院比較社会文化研究院)

1. はじめに

九州国立博物館建設に伴う発掘調査が行われた福岡県太宰府市浦ノ田遺跡において、13世紀から14世紀にわたる時期の火葬墓群が検出され、大量の人骨が出土した。歪み・細片化が著しい火葬骨のため、形態的な分析はほとんど行うことができなかったが、当該期における葬制を考える上では貴重な資料となろう。以下に整理・分析の結果を記載する。

2. 遺跡・資料

遺跡・出土状況：浦ノ田遺跡は福岡県太宰府市に所在する太宰府天満宮（安楽寺）境内東南部に広がる斜面中腹に位置する。福岡県教育委員会による第4次調査の結果、太宰府天満宮（安楽寺）に面した西側斜面全体に中世の墓地が営まれていたことが明らかになった。

大きくⅠ・Ⅱ・Ⅲ区と分けられた調査区を含むこの西側斜面全体が丘陵の旧地形を改変して扇形に造成され、そこに細かい幾つかのテラス面を造りだして墓地としている。Ⅰ区では、比較的広めのテラス面と、五輪塔・板碑・石列による区画などが検出され、Ⅱ区からも石組み等の遺構が出土した。また、遺物は土師器皿を中心に、陶製蔵骨器（古瀬戸）、銅製筒形容器、陶磁器類およびパンケース10箱分の火葬骨が出土した

年代：出土した土師器皿の年代から13～14世紀代（鎌倉～室町時代）にかけての遺跡とされている。

3. 結果

火葬人骨はほとんどが灰白色を呈し、捻れ・歪み・ひび割れ・縮小等の火葬骨特有の外観を見せられている。大きな原型をとどめた破片はほとんど無く、細片化が著しい。同定し得た部位・性・年齢・重量等、観察結果を表2に一覧した。以下、各群の火葬墓ごとに簡単に観察所見をまとめておく。

(A群)

P1 頭蓋骨片の他、四肢骨片の一部を同定できるが、細片化が著しく、多くは部位の同定が困難である。従って性別・年齢の特定は不可能だが、ただ、観察可能な頭蓋の縫合に癒合が見られないことから高齢には達していない可能性が高い。

P2 比較的同定可能な部位が多く、頭から下肢骨まで全身の骨が確認できた。頭蓋の縫合に癒合は見られなかった。

P3 細片化した骨が多く、頭蓋のほか四肢骨の一部が同定できるのみである。

P4 かなりの量が遺存し、ほぼ全身の骨が確認できた。また、歯根が5本見いだされたが、これは火葬の際、高温によりエナメル質が失われたことによるものであろう。頭蓋の縫合に癒合は見られない。性別は不明。

火輪の下 遺存量が多く下顎骨を含む頭蓋骨の他、四肢骨や肋骨・椎骨が同定できた。頭蓋の縫合に癒合は見られない。性別は不明。

(B群)

破骨器 1 頭蓋・四肢骨・肩甲骨・肋骨・椎骨などの一部が同定できた。歯根が2本見られたが、うち1本は大臼歯である。頭蓋の縫合に癒合は見られない。

P 1 頭蓋の他、四肢骨・肩甲骨・肋骨・椎骨・仙骨の一部が見られる。

P 2 頭蓋の他、四肢骨・肋骨・椎骨・骨盤の一部が見られる。

P 3 頭蓋から下肢骨まで全身の骨が見られる。なお下顎骨オトガイ部が2個体見いだされ、少なくとも2体以上の人骨が確認できる。頭蓋の縫合に癒合は見られない。

P 4 遺存量は多いが細片が多く、頭蓋骨および、四肢骨片の一部が同定できたのみである。歯根が9本遺存していた。頭蓋の縫合に癒合は見られない。

P 5 頭蓋片のほか、四肢骨片が見られたが、特に頭片の割合が多いようである。頭蓋の縫合に癒合は見られない。

P 6 頭蓋・上肢骨・肩甲骨・肋骨・椎骨の一部が同定できた。一般に火葬骨は強い縮小傾向を見せるが、当個体の各部はサイズがかなり大きく、男性の可能性が高い。頭蓋の縫合は閉じていない。

(No.7) 微量の細片のみである。四肢骨片であろう。

(C群)

P 1 頭蓋骨の他・四肢骨片では右脛骨片が同定できた。歯根1本が見られる。頭蓋の縫合に癒合は見られない。

P 2 遺存量が多い。頭から下肢骨までほぼ全身の骨が見られ、歯根1本が認められた。頭蓋の縫合に癒合は見られない。

P 3 頭蓋の他、四肢骨・肋骨・椎骨の一部が見られる。なお、当火葬墓では、第2頸椎歯突起の存在も確認された。

P 4 頭蓋の他、肩甲骨・肋骨・椎骨の一部が見られる。頭蓋の縫合に癒合は見られない。

P 5 頭蓋骨片・四肢骨片・肋骨片が見られた。頭蓋の縫合に癒合は見られない。

P 6 ほぼ全身の骨が認められ、量的にもかなり多い。歯が22本認められたが、全てエナメル質は欠落し、歯根のみである。年齢については、骨端線が見られず、また頭蓋の縫合では後頭骨の内板は閉鎖しているが、外板は完全には閉鎖しておらず、成年から熟年にかけての個体であろう。性判定は困難である。

P 7 頭蓋骨・四肢骨・肋骨の一部の他、右寛骨片が見られた。歯根1本が見られる。頭蓋の縫合に癒合は見られない。

P 8 頭から下肢骨までほぼ全身の骨が認められる。歯根2本が見られた。骨端線が無いことから成人であることは確認できるが詳しい年齢は不明。なお頭蓋の縫合に癒合は見られない。性別は不明である。

P 9 かなりの量が遺存し、ほぼ全身にわたる部位が認められた。特に歯根1本、第1頸椎、左寛骨片が同定できたが、第2頸椎歯突起は無い。骨端線が見られず、また頭蓋の縫合に癒合は見られない。性判定は困難である。

(F群)

下部遺構1 遺存量が多く四肢骨・肋骨・椎骨の一部が認められたが、頭蓋骨は下顎骨の一部が同定できた他は数点の破片のみである。年齢・性別は不明。

(G群)

- P 1 遺存量が多く頭蓋骨片・四肢骨片・肋骨片・椎骨片が認められる。歯根1本が見られた。頭蓋の縫合に癒合は見られない。性別は不明。
- P 2 頭蓋骨片・四肢骨片が見られる。特に下肢骨のうち左大腿骨の一部が同定できた。大腿骨の粗線の発達が著しいことから男性と見られる。
- P 3 量が多く頭から下肢骨までほぼ全身の骨が識別できた。特に左上腕骨片・歯根3本が見られる。頭蓋の縫合は一部が閉じ始めており、年齢は成人でもやや高齢であろう。性判定は困難である。

(H群)

- P 1 頭蓋の他、四肢骨・肩甲骨・肋骨・椎骨の一部が見られる。特に第2頸椎歯突起が見いだされた。頭蓋の縫合に癒合は見られない。
- P 2 頭蓋の他、上肢骨・椎骨・足の骨の一部が認められた。頭蓋の縫合が一部閉じ始めている。
- P 3 遺存量が少なく頭蓋骨片・四肢骨片が鑑別できるのみで細かい部位は同定できなかった。
- P 4 頭蓋の他、上肢骨・肋骨・椎骨が見られる。

(I群)

- P 1 遺存量が多く頭から下肢骨までほぼ全身の骨が認められる。頭蓋の縫合に癒合は見られない。年齢・性別は不明。
- P 2-A (一部Bが混じる) 遺存量が多い。頭蓋の他、四肢骨・肩甲骨・肋骨・椎骨の一部が見られた。特に第1頸椎や歯根1本が同定できたが、重複する部位は確認できなかった。頭蓋の縫合に癒合は見られない。
- P 2-B 遺存量が多い。頭蓋骨・四肢骨・椎骨・寛骨の一部が認められる。歯根が2本見られた。頭蓋の縫合に癒合は見られない。性別は不明。
- P 2-C 頭蓋骨片・四肢骨片・肋骨片・椎骨片が見られた。頭蓋の縫合に癒合は見られない。大腿骨頭のサイズからみて男性の可能性が考えられる。
- P 3 頭蓋の他・四肢骨・椎骨の一部が認められる。頭蓋の縫合に癒合は見られない。
- P 4 頭蓋骨片および四肢骨片が確認できるのみである。

(K群)

- P 1 頭蓋骨片・四肢骨片・椎骨片が見られる。

(道②)

蔵骨器1 遺存量が少なく頭蓋・四肢骨の一部が確認できるのみである。

- P 1 骨片の大部分は大腿骨片である。

P 2 頭蓋骨および四肢骨の一部が認められる。頭蓋の縫合に癒合は見られない。

(M群)

P 1 細片が多く頭蓋・四肢骨の一部を確認できるのみである。

P 2 頭蓋の他、左大腿骨頸部を含む四肢骨・肋骨・椎骨の一部が見られた。

P 3 頭蓋骨片・四肢骨片が認められる。頭蓋の縫合に癒合は見られない。

(N群)

P 1 遺存量が少なく頭蓋と四肢骨の一部が鑑別できるのみである。

(O群)

P 1 細片化が著しく頭蓋骨・四肢骨の一部を確認できるが、原型をとどめた部位は少ない。

P 2 かなりの量が遺存する。頭蓋の他、四肢骨・肩甲骨・椎骨の一部、歯根のみ1本が認められる。なお頭蓋骨右錐体が2個存在するため、少なくとも2個体以上の埋葬が確認できる。

(斜面火葬骨)

P 1 遺存量が多く、頭蓋の他四肢骨・肋骨・椎骨の一部が鑑別できる。歯根が14本見られる。頭蓋の縫合に癒合は見られない。性別は不明である。

P 2 頭蓋の他、四肢骨・肋骨・椎骨の一部が認められる。特に上腕骨遠位端付近が同定でき、そのサイズから見て男性の可能性が高い。骨端線が無いことから成人と見られる。

(P群)

P 1 頭蓋の他、四肢骨・肩甲骨・椎骨の一部が見られる。頭蓋の縫合に癒合は見られない。

P 2 遺存量が多く、他の火葬墓と比較して大きな破片が多い。頭から四肢骨までほぼ全身の骨が認められる。特に、右大腿骨・右脛骨・歯根1本が同定できた。骨端線が無いことから成人と見られる。頭蓋の縫合に癒合は見られない。四肢骨のサイズから見て男性の可能性が高い。

P 3 頭蓋骨片・四肢骨片・椎骨片が確認できる。歯根1本が見られた。頭蓋の縫合に癒合は見られない。

P 4 頭から下肢骨までほぼ全身の骨が認められる。特に乳様突起・右大腿骨頭が同定でき、そのサイズから見て、女性の可能性が高い。なお頭蓋の縫合に癒合は見られない。

P 5 細片化が著しく頭蓋骨・四肢骨の一部を確認できるが、原型をとどめた部位は少ない。

P 6 頭蓋骨片・四肢骨片・肩甲骨片が見られる。頭蓋の縫合に癒合は見られない。

P 7 遺存量が多く四肢骨片・肩甲骨片・肋骨片・椎骨片が認められる。また、下顎骨もよく残っているが、上顎骨の一部を除きその他の頭蓋骨片は見出せない。左右の上腕骨頭が確認可能で、骨端線が無いことから成人に達した個体と見なされる。性別は不明。

P 8 細片が少量遺存するのみである。

P 9 かなりの量が遺存する。頭蓋の他、四肢骨・鎖骨・肋骨・椎骨・寛骨の一部が見られる。特に、左大腿骨頭が認められるが、そのサイズから見て男性であろう。骨端線が無いことから成人に達した個体と見なされる。頭蓋の縫合に癒合は見られない。

- P10 かなりの量が遺存する。頭から四肢骨までほぼ全身の骨が認められる。歯根が5本以上見られる。骨厚から見て成人であろう。頭蓋の縫合に癒合は見られない。性判定は困難である。
- P11 頭蓋の他、四肢骨・肩甲骨・寛骨の一部が認められる。頭蓋の縫合に癒合は見られない。
- P12 細片が多い。頭蓋骨および四肢骨片が見られる。頭蓋の縫合に癒合は見られない。
- P13 頭蓋の他、四肢骨・椎骨の一部が認められる。第2頸椎歯突起が見いだされた。頭蓋の縫合に癒合は見られない。
- P14 かなりの量が遺存する。頭から四肢骨までほぼ全身の骨が認められる。歯根11本が見られる。骨のサイズから見て男性であろう。骨端線が無いことから成人に達した個体である。頭蓋の縫合に癒合は見られない。
- P15 遺存量は今回の火葬墓の中では最も多い。ほぼ全身の骨が認められる。乳様突起・四肢骨のサイズから見て男性であろう。長骨の骨端が癒合していることから、成人に達した個体である。また、遺存部で見ると頭蓋の縫合に癒合は確認できない。
- P16 頭蓋の他、四肢骨・肋骨の一部が見られる。歯根のみ1本見られた。頭蓋の縫合に癒合は見られない。
- P17 頭蓋の他、四肢骨・椎骨の一部が見られる。
- P18・19 頭蓋骨片・四肢骨片・鎖骨片・肋骨片・椎骨片・歯根1本が確認できたが、重複する部位は認められなかった。
- P19 細片化が著しく頭蓋骨・四肢骨の一部を確認できるが、原型をとどめた部位は少ない。頭蓋の縫合に癒合は見られない。
- P20 頭蓋の他・四肢骨片・肩甲骨・肋骨の一部が認められた。骨端線がなく、歯槽閉鎖部が目立つので熟年以上に達した個体である可能性が高い。
- P21 遺存量が多い。頭蓋の他、四肢骨・肋骨・椎骨・寛骨の一部が認められた。特に左上腕骨片、歯根のみ2本が同定できる。
- P22 頭蓋骨片・四肢骨片・椎骨片・寛骨片が認められる。特に、左右の大腿骨頭に骨端線があることから、年齢は10代末～20代初めである。また、骨頭のサイズから見て男性の可能性が高い。
- P23 頭蓋の他、四肢骨・肋骨・椎骨の一部が確認できる。歯根のみ2本見られた。
- P24 遺存量が多い。頭蓋の他、四肢骨・肩甲骨・肋骨・椎骨・寛骨の一部が確認できる。骨端線は無い。性判定は困難である。
- P25 頭蓋骨片・下肢骨片・椎骨片・寛骨片が認められた。歯根が2本見られる。頭蓋の縫合に癒合は見られない。
- P26 頭蓋の他、四肢骨・椎骨の一部が確認できる。また、第2頸椎歯突起が見いだされた。頭蓋の縫合に癒合は見られない。
- P27 細片化が著しく頭蓋骨・四肢骨の一部を確認できるが、原型をとどめた部位は少ない。
- P28 頭蓋の他、四肢骨・肩甲骨・椎骨の一部が認められる。歯根が10本以上遺存する。
- P29 四肢骨片・肋骨片・椎骨片が見られる。頭蓋骨は下顎骨の一部が同定できた他は認められない。また、頸椎に骨増殖が見られる。椎体前縁の縁嘴の発達程度はNathan (Nathan 1962) の3度に相当することから、年齢は熟年以上である可能性が高い。性別は不明である。
- P30 遺存量が少ない。頭蓋骨片・四肢骨片・椎骨片が確認できる。

P31 かなりの量が遺存する。頭から下肢骨までほぼ全身の骨が認められる。歯根のみ1本残存する。大腿骨の粗線が発達していることから男性の可能性がある。頭蓋の縫合に癒合は見られない。

(II-4区)

後述する。

(II-5区)

骨A群 細片が多いが、頭蓋骨片・四肢骨片・肩甲骨片・肋骨片・寛骨片が確認できる。右大腿骨骨頭片に骨端線があり、また寛骨片の腸骨翼が癒合は始まっているもののまだ完了していないことから、年齢は10代後半～20代前半と見なされる。性判定は困難である。

骨B群 細片化が著しく頭蓋骨・四肢骨の一部を確認できるが、原型をとどめた部位は少ない。頭蓋の縫合に癒合は見られない。

○II-4区出土古瀬戸蔵骨器内火葬骨について

(出土状態および保存状態)

火葬人骨は蔵骨器内に納められていた。細片化した状態であったため、人骨の細かい同定や位置関係の観察はほとんど不可能であった。ただ、蔵骨器内での人骨の堆積状態は、火葬後の拾骨における順序および選択性の有無を示す可能性があるため、蔵骨器内の火葬骨を上から順に8層に分けて採取し、検討を行った。

まず、第1面(上から5cm)は下顎骨片・肋骨片・椎骨片が認められた。ただし、火葬により人骨が細片化しているためこれ以外にも同定不能の部位は存在している。

第2面(5～10cm)では、頭蓋骨・四肢骨・肩甲骨・肋骨・椎骨の一部、歯根が確認できた。

第3面(10～15cm)では、頭蓋骨・四肢骨片が見られた。頭蓋縫合が見られるが、癒合は見られない。

以下、1～2cmずつの厚さで取り上げを行った。

第4面(第3面から2～3cm)では、下顎骨・肋骨・椎骨が確認できた。椎骨椎体部の骨端線は見られない。

第5面(4～5cm)では、頭蓋骨・四肢骨・椎骨の一部が見られた。

第6面(5～7cm)では、頭蓋骨・椎骨・下肢骨の破片が確認できた。

第7面(7～8cm)では、頭蓋骨片・上肢骨片・肋骨片・椎骨片および歯根2本が認められた。

第8面(蔵骨器底部付近)では、頭蓋骨・上肢骨の一部・歯根1本が見られた。

(拾骨について)

同定不能の骨片が多く明確な傾向は見出せなかったが、以上のように、蔵骨器内に堆積した骨片は、部分的にせよ頭から下肢骨までほぼ全身各部を含むことから、その拾骨にあたって特定の部位に偏るような目立った選択性は認められない。各層で確認された骨の部位構成は、図78に示すように、上層から下層にかけて四肢骨が減少する傾向を示した。ただ、やはり同定不能な骨が多く拾骨の順序の復元は困難である。また、蔵骨器内に炭化材・炭・灰は見られなかったことから、拾骨の

際に焼骨のみを選択して蔵骨器内に入れていたことがうかがえる。

(個体数、年齢、性別について)

個体数については、骨の細片化が著しく確言は困難であるが、骨の部位に重複が確認できないので、一個体である可能性が考えられる。また被葬者の年齢は、椎骨椎体に骨端線が見られないこと、頭蓋の縫合に癒合は見られないことから成人に達した個体であると思われる。性別判定は困難であった。

4. 総括

九州国立博物館建設に伴って、福岡県太宰府市に位置する太宰府天満宮(安楽寺)境内の東南斜面で中世の石塔群・火葬墓群が発掘調査された。その結果火葬骨を納めたビット80基余が検出され、種々の考古遺物と共に相当量の焼骨が出土した。精査した結果を以下にまとめておく。

- ・出土人骨は全て火葬骨である。
- ・焼骨の多くは灰白色を呈し、焼け方は比較的均等である。
- ・遺存量には差があるものの概ね3～4 cm以下の破片で、原型をとどめた部位は少ない。
- ・上記の状況のため、形態的特徴は観察不能であった。
- ・複数個体の存在を示す墓が2基(B群P3、O群P2)確認された。
- ・確認し得た被葬者の年齢幅は、若年～成年期初め(10代後半～20代前半)から熟年以降までで、より年少の子供の骨は確認できない。
- ・性別判定の結果、男性、女性共に確認されたが、男女比などについては不明である。
- ・歯根が確認されたが、エナメル質を残すものは一片も見いだせなかった。
- ・第2頸椎歯突起の存在は4基の火葬墓で確認されたが、比較的全身骨が揃っている個体でも欠落している事例もあり、意図的にこの部分を取骨している痕跡は見られない。
- ・遺存率に関して、全体的にはほぼ全身各部を含んでおり、拾骨に際して特定の部分に偏る傾向は認められないといえる。しかし、頭蓋の少ない例や多い例、特定の四肢骨のみ多い例など、個体により遺存部位には多少の差異が見られる。

当遺跡における火葬骨の観察から得られる火葬の実態については、まず、火葬後の拾骨にあたり第2頸椎を特に意識していない点が挙げられる。現在でも真宗門徒は火葬後第2頸椎をノドボケとよんで拾い上げ、小さい骨壺に入れてもちかえると言うが(国分1985)、山口県吉母浜遺跡の中世墓(14～16世紀)においては、第2頸椎を例外なく選択的に取り上げられていたことが明らかになっている(中橋・永井1985)。しかし、当遺跡では比較的全身骨が揃っている個体でも欠落している事例や、遺存量の少ない個体の中に混じっている事例などが認められ、特に選択的に拾骨が行われている形跡は認められない。

また、当遺跡の火葬骨は全ての歯のエナメル質が完全に剥離していることから、その焼成温度は少なくとも500℃以上であったことが推察される。また、焼骨の殆どが灰白色を呈し、深いひび割れ、輪状の亀裂、捻れ・縮小などの変形が著しいことから、700～800℃以上の高温で焼かれた完全焼骨であること、しかも白骨化したものではなく、皮膚や筋肉などの軟部組織を充分に残している

時期に火葬されたものと推定できる(池田1981)。

また、通常は高温で焼かれた場合も関節部等は比較的原型を留めやすいとされるが、当遺跡の出土骨はかなり細片化しており原型を留める部位は少ない。拾骨または納骨に当たり、原型を留める大きな破片を除いたか、或いはかなり細かく砕かれた可能性も考えられよう。また、人体は火葬されると、多少の個人差はあるがおおよそ成人男性2kg、女性1.5kgの重量になると言われる(Mays,1998)。しかし、当遺跡出土骨の遺存量は最多でも1kg以下であることから、土中における埋蔵環境にも起因するであろうが、拾骨の際に全身の骨をくまなく取り上げたのではなく、かなりの取り残しがあった可能性が高い。その際、墓地全体の傾向として特定の部位の選択的な拾骨が行われた形跡は見られないが、頭蓋骨や四肢骨の一部を優先的に納めた可能性の強い火葬墓が見られる。

中世期の墓制における火葬習俗の社会的位置づけやその実態については、いまだ不明な点が多い。当遺跡で一部明らかになった知見がどの程度、地域的、時代的特性を表したものなのか、そうした点も含めて今後とも資料の蓄積を図りながら検討を続けていきたいと考える。

謝 辞

当資料を研究する機会を与えていただき、種々有益なご教示をいただいた辻田淳一郎氏をはじめとする福岡県教育委員会の諸先生方に深謝いたします。

文 献

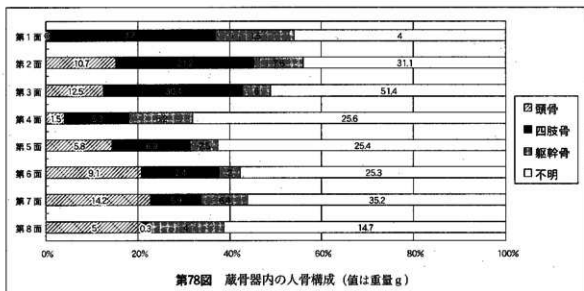
- 池田次郎(1981)出土火葬骨について、『太安萬侶墓』、奈良県立橿原考古学研究所。
- 国分直一(1985)吉母浜の中世墓制—特にその葬俗を巡って—、『吉母浜遺跡』、下関市教育委員会。
- 中橋孝博・永井昌文(1985)山口県吉母浜遺跡出土人骨、『吉母浜遺跡』、下関市教育委員会。
- Mays,S.(1998)CREMATED BONES. in *The Archaeology of Human Bones*,pp.207-224. Routledge, London.
- Nathan,H.(1962)Osteophytes of the vertebral column: An anatomical study of their development according to age, race, and sex with considerations as to their etiology and significance, in *J.Bone and Joint Surgery*, Vol.44-A.

表2 浦ノ田遺跡4次調査出土火葬骨一覧表

墓名	出土地点	ピット名	性別	年齢	重(重)	頭骨	鎖骨	下顎	肋骨	四肢骨	上腕骨	上脚骨	椎骨	尺骨	手骨	肩胛骨	鎖骨	肋骨	第7頸椎	第7頸椎	仙骨	下腰骨	大腰骨	腰蓋骨	腰骨	踵骨	踵骨	尾骨	付記事項
A群		P 1	?	成人	96.2	×	×	×	×	○	○	○							×										
A群	下層	P 2	?	成人	160.0	×	×	×	×	○	○	○							×			○	○	○				○	
A群	下層	P 3	?		33.0			×											×			○							
A群	下層	P 4	?	成人	596.7	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
A群	北端	火輪の下	?	成人	357.8	×	×	×	×	○	○	○							×			○	○	○	○	○	○		
B群		蔵骨器1	?	成人	161.8	×	×	○	○	○	○	○							×			○	○	○	○	○	○		
B群	下層	P 1	?		105.2	○		×	○	○	○								×			○							
B群	下層	P 2	?		174.2	○		×	○	○	○								×			○	○	○	○	○	○		
B群	下層	P 3	?	成人	293.0	×	×	○	○	○	○	○							×			○	○	○	○	○	○		
B群	下層	P 4	?	成人	584.3	×	×	○	○	○	○								×			○	○	○	○	○	○		
B群	下層	P 5	?		53.3	×	×	×	○	○	○								×			○		○	○	○	○		
B群	下層	P 6	♂	成人	89.8	×	×	○	○	○	○								×			○						○	
B群	下層	P 7	?		4.5	×		×	○										×			○							
C群		P 1	?	成人	44.9	×	×	○											×			○		○	○	○	○		
C群		P 2	?	成人	396.3	×	×	○	○	○	○	○							×			○	○	○	○	○	○		
C群		P 3	?	成人	48.4	○		×	○										×			○	○	○	○	○	○		
C群		P 4	?	成人	114.9	×	×	×	○										×			○	○	○	○	○	○		
C群		P 5	?	成人	56.8	×	×	×	○										×			○	○	○	○	○	○		
C群		P 6	?	成年	888.5	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×			○	○	○	○	○	○	○	
C群		P 7	?	成人	111.9	×	○	○	○										×			○							
C群		P 8	?	成人	173.2	×	×	○	○										×	×	○	○	○	○	○	○	○		
C群		P 9	?	成人	651.8	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×			○	○	○	○	○	○	○	
F群	I-2	下部遺構1	?		365.7	○	×	○	○	○	○	○							×			○	○	○	○	○	○		
G群	I-2	P 1	?		276.3	×	×	○	○	○	○	○	○						×			○	○	○	○	○	○		
G群	I-2	P 2	♂		81.6	○		×	○										×			○	○	○	○	○	○		
G群	I-2	P 3	?	成年	458.1	△	○	○	○	○	○	○							×			○	○	○	○	○	○		
H群	I-3	P 1	?		82.6	○	×	×	○	○	○	○							×			○	○	○	○	○	○		
H群	I-3	P 2	?	成人	182.2	○	○	○	○	○	○	○							×			○							
H群	I-3	P 3	?		11.0	○		×	○										×										
H群	I-3	P 4	?		44.2	○	×	×	○										×			○							
I群	I-5	P 1	?		593.1	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×			○	○	○	○	○	○	○	
I群	I-5	P 2-A	?		317.1	○	○	○	○	○	○	○							×			○	○	○	○	○	○	○	
I群	I-5	P 2-B	?		280.9	×	×	○	○										×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
I群	I-5	P 2-C	♂		106.0	×	×	×	○										×			○	○	○	○	○	○		
I群	I-5	P 3	?		158.8	×	×	×	○	○	○								×			○	○	○	○	○	○		
I群	I-5	P 4	?		87.0	○		×	○	○	○								×			○							
K群	I-5	P 1	?		32.4	○		×	○	○	○								×			○							
		遺②	蔵骨器1	?	16.8	○		×	○										×										
		遺②	P 1	?	42.0	×		×	○										×			○	○	○	○	○	○		
		遺②	P 2	?	82.0	×	×	×	○										×			○	○						
M群	II-9	P 1	?		57.6	○		×	○										×										
M群		P 2	?		73.8	○		×	○										×					○					
M群		P 3	?		209.2	×	×	×	○	○	○	○							×			○	○	○	○	○	○		
N群	II-10	P 1	?		22.1	○		×	○										×			○							
O群	II-11	P 1	?		27.2	○		×	○										×										
O群	II-11	P 2	?		556.6	○	○	○	○	○	○	○							×			○				○	○		
		II-11 特殊葬P1	?		362.5	×	×	○	○	○	○	○							×			○						○	
		II-11 特殊葬P2	♂	成人	73.5	○		×	○	○	○	○							×			○						○	

姓名	出土地点	ピット名	性別	年齢	重量(g)	頭骨	融合頭頂	下顎	歯根	四肢骨	上腕骨	上腕骨	橈骨	尺骨	手骨	肩胛骨	肋骨	第2頸椎	第2頸椎	寰椎	仙骨	下腰骨	大腰骨	腰骨	膝骨	距骨	腓骨	足骨	特記事項
P群 II-12		P 1	?		71.2	○	×	○	×						○			○	×			○						○	
P群 II-12		P 2	♂	成人	308.7	○	×	○	○	○				○	○			○	×			○	○	○	○	○	○	○	
P群 II-12		P 3	?		137.0	○	×	○	○									○	×			○	○	○					
P群 II-12		P 4	♀	成人	290.1	○	×	×	○	○			○		○			○	×	○		○	○	○				○	
P群 II-12		P 5	?		39.3	○		×	○										×										
P群 II-12		P 6	?		103.8	○	×	×	○	○	○		(○)		○							○	○				(○)		
P群 II-12		P 7	?	成人	240.4	○		○	○	○	○		○	○	○			○	×			○	○	○		○	○	○	
P群 II-12		P 8	?		9.3	×		×	○										×										
P群 II-12		P 9	♂	成人	564.1	○		×	○	○	○	○	○	○	○			○	○	×	○	○	○					○	
P群 II-12		P10	?	成人	602.0	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○			○	×	○	○	○	○		○				
P群 II-12		P11	?		158.2	○	×	○	×	○	○									×	○	○	○	○	○	○	○		
P群 II-12		P12	?		43.7	○	×	○	×	○										×									
P群 II-12		P13	?		166.9	○	×	○	×	○				○								○	○						
P群 II-12		P14	♂		615.0	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○			○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
P群 II-12		P15	♂		902.4	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○			○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
P群 II-12		P16	?		93.2	○	×	○	○	○									×			○	○		○				
P群 II-12		P17	?		77.5	○	×	○	×	○	○								×			○	○	○				○	
P群 II-12		P18/19	?		233.9	○		○	○	○	○	○							×	○		○	○	○	○	○	○	○	
P群 II-12		P19	?		31.3	○	×	×	○											×									
P群 II-12		P20	?		165.7	○		○	○	○	○	○	○	○	○				×			○	○	○				○	
P群 II-12		P21	?		312.1	○		○	○	○	○									×	○		○	○	○	○	○	○	
P群 II-12		P22	♂	5歳-成人	189.9	○	×	×	○	○	○	○							×	○		○	○	○	○	○	○	○	
P群 II-12		P23	?		153.3	○			○	○	○	○	○	○	○				×			○	○	○	○	○	○	○	
P群 II-12		P24	?		255.0	○		×	○	○	○			○	○				×	○		○	○	○	○	○	○	○	
P群 II-12		P25	?		134.3	○	×	○	○											×	○		○	○					
P群 II-12		P26	?		106.8	○	×	×	○	○										×			○	○					
P群 II-12		P27	?		40.4	○		○	×	○										×									
P群 II-12		P28	?		214.8	○		○	○	○	○	○	○	○	○					×	○		○	○			○	○	
P群 II-12		P29	?	熟年	98.9	×		○	○	○	○			○					×										
P群 II-12		P30	?		49.1	○		×	○											×								○	
P群 II-12		P31	♂	成人	415.9	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○				×	○		○	○	○	○	○	○	○	
II-4区		古銅刀痕跡			388.3	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○				×	○		○	○	○	○	○	○	○	
II-5区		A群	?		116.5	○	×	×	○	○										×	○		○	○	○	○	○	○	
		B群	?	成人	69.2	○	×	×	○											×									

○:存在、×:無し、◎:2個体以上、():不明確



第5章 浦ノ田遺跡4次調査の成果と課題

ここで以上の調査結果をもとに、今回の調査の成果と課題についてまとめておきたい。福岡県内では同時代で同様の状況を示す火葬墓として、北九州市白岩西遺跡、飯塚市明星寺遺跡、鞍手郡鞍手町長谷寺遺跡、福岡市香椎B遺跡や甘木市三奈木大佛山遺跡などが、太宰府市内では特に推定金光寺跡や馬場遺跡、横岳遺跡などが参考となろう。こうした調査事例を踏まえつつ、以下では調査成果と今後の課題について検討する。

1. 各石塔群の変遷と性格

まず浦ノ田遺跡の石塔群全体の時期については、包含層から出土した土師皿の年代幅から、墓地の造営自体は13世紀代にはじまり、13世紀後半～14世紀代をピークとして造墓活動が行われ、14世紀後半以降次第に造営数が減じていったものと考えられる。また坏瓦が主体となった段階で墓の造営はほぼ終了するものとみられる。本墓域は全て火葬墓により構成されており、共同墓地としての性格が強い。

本調査区ではA群～P群の16箇所の石塔群・火葬墓群と少数のビット、そしてII区4・5トレンチを中心に石塔群・火葬墓群が検出された。各石塔群においては順次追葬が行われたと考えられることから、各石塔群の年代幅はそれぞれ比較的長期にわたる可能性がある。こうした追葬・墓域の拡張という点からみると、本石塔群には大きく2つのパターンの造墓が認められる。すなわち、

- ① 板碑・立石を建て、根元付近に石を敷き詰めて一部に区画を有し、順次周辺に追葬を行うもの
e.g. A群～E群、J群、M群、O群、P群、II-4トレンチなど
- ② 次第に墓の規模が縮小、使用する石材数が減少し、単独で自然石板碑を立てるもの
e.g. K群、L群、N群など

…の2者であり、出土遺物からみて基本的に①が古く②が新しい様相を示すと考えられる。F群やG群はこれらの中間的な様相と考えられる。また①では、(a)以前造立された板碑・立石の周囲にビットを掘り、新たに石塔を建てることで墓域を拡張しつつ追葬を行う場合と、(b)火葬骨を散骨して土を被せるという形で追葬を行う場合とがある。またこの(b)については、I群でみられたように、一部は土師皿に火葬骨を納めるといった埋葬方法が採られた可能性もある。

なお、①の具体例としてA群～E群を一括したが、D・E群では下層にビットを掘り込んでおらず、むしろ造営当初の段階から、石塔造立後に周辺に散骨する形で埋葬していた可能性がある。あるいは出土時に明瞭な石塔群が確認されなかったI群の火葬墓群が、その真上の段上に位置するD群・E群に対応するといった可能性も考えられるがあくまで仮説の域を出ない。またA群においても、石塔造立後に周辺にビットを掘り込んで追葬している。これらA群・D群・E群のあり方に対し、B群やC群では先に下層に納骨ビットを掘り火葬骨を納めたのち、それに対応させる形でほぼ直上に墓標として立石等を設置している。M群・O群・P群などもむしろこの後者にあたる。こうした状況は本墓域造営開始段階の過渡的な様相を示すものと考えられるが、基本的には後者のよう

な埋葬方法による墓標としての石塔造立というあり方が段階的に定着していったものとみられる。

各墓群の具体的な時期についてみると、まずI群付近の4層が土師皿の年代や龍泉窯系青磁碗I5b類の出土から13世紀前半～中頃まで遡るという可能性を考慮するならば、4層上面に営まれたD群・E群などが13世紀中頃～後半代を中心とする時期に、その上層の3層上面に造営されたA・B群上層やC群、H群などが14世紀代を中心として造営されたと考えることができよう。P群などにおいてもこのなかで早いものについては13世紀代に造営が開始されているものと考えられる。またII-4トレンチの石塔群は古瀬戸蔵骨器の製作年代が古瀬戸中期にあたると思われることから、遅くとも14世紀前葉には造営が開始された可能性が考えられる。そして単独で自然石板碑を配するもの、具体的には坏bを供献するL群などは、出土した銅銭が永楽通宝とすれば15世紀代に下るものと考えられ、これが本石塔群の最終段階と考えられる。

2. 墓域の空間構成と墓道の復元

本墓域は、丘陵西向き斜面の扇形に開けた地形に小テラス面を造成することによって作りだされている。ここで墓道について検討したい。I区前面の遊歩道(道③)は、土層観察結果から、丘陵登り口から本墓域に至る道としての機能を石塔群造営当時からある程度担っていた可能性が想定される。ここから各石塔群に近付く、もしくは葬送儀礼に「参列」する場合は、それぞれの石塔群の位置によって、正面に立てる場合立でない場合、葬列の進行方向などさまざまな制約が生じるものと考えられる。例えばF群の場合は、一石五輪塔2基と板碑が並んでいるが、前面が急斜面になっているためこの正面に立つことはできず、下のG群付近から上方を仰ぎ見るか、左手の斜面から、もしくは右手のH群からなど、横方向からしか近付くことができない。A～E群やH群などについては正面に立つことは可能であるが、そこへ至る道筋もF群左手の斜面からF群を通過して登るか、K群、L群などを通過するといった方法を考えなければならない。K群からI群(I区グリッド5)にかけての斜面はかなり急なのでそのまま登ることは困難と考えられ、J群付近まで迂回して、脇でJ群を正面から見ながらI群のテラス面に至るという進入路を想定せざるを得ない。各石塔群は、こうした墓道の要所要所に設置されているものと考えられる。またG群の前に立ち上を仰ぎ見ると、F群の一石五輪塔・板碑、P群の石塔群、M群などが一連のものとして三段(以上)にわたって急斜面に築かれているその景観を見ることができ、墓域の正面と考えることができよう。

II区斜面については、おそらくP群はF群もしくはH群付近から上に登ったものと考えられる。それ以外は、O群、N群、M群それぞれについてはこの順番で登ることができる。O群に登る際はやや高低差のある段を上る必要があるが、これについては登り口が複数存在した可能性もあろう(斜面最下段・P群など)。II区の1トレンチ～7トレンチまでの進入路・墓道はいまひとつ明らかでない。元来は道①②が存在せず、C群が存在する3層付近が緩やかな斜面となって4・5トレンチとつながっていたと考えられるためである。1・2トレンチへの進入路については、その前面がJ群付近とどのようにつながっているのかが不明であるため、課題として残される。ただし、J群の南側の尾根を挟んで南側の斜面にもさらに広い墓域が展開していることを考えるならば、このJ群南側で上方に続く尾根筋が墓道の候補の1つとしてあげられよう。

また出土した火葬骨には炭化物や灰が含まれないことから、拾骨された状態で持ち込まれ埋葬されたと考えられる(第4章第2節参照)。したがって火葬場・火葬土坑などがどこか墓域とは別の場所にあると考えられる。推定金光寺跡では墓域背後の斜面上に火葬土坑が営まれており、火葬墓と

の対応関係が想定される。浦ノ田遺跡の石塔群ではこの可能性の一端を示すものとしてⅡ区6トレンチの土坑が挙げられるが、これについても下部を精査していないため不明な点が多い。この火葬施設の問題については、後述する太宰府天満宮境内遺跡より出土した焼土坑群（太宰府市教育委員会1990）などとの関係などについても検討する必要がある。今後の課題としておきたい。

3. 出土遺物の特徴

(1) 石塔類

浦ノ田遺跡の石塔群では、五輪塔類が少なく板碑が多い。これは推定金光寺跡や横岳遺跡などと比較すると明らかであり、板碑及び立石を主体とした墓域といった様相を呈している。ただしこれについては、五輪塔各部の破片が上から転落してきた状態で出土したものが多くことから、周辺において五輪塔を配した墓域が存在する可能性なども含めて、慎重に検討する必要がある。板碑は20基余の出土が確認できる。組合式五輪塔の各部では、火輪が最も多く花崗岩・砂岩・凝灰岩製品があわせて8点出土している。地輪自体の出土は少なく、4基前後にとどまる。これら各部の大きさにはばらつきがあり、確実な組合せを特定するのは困難である。板碑・五輪塔はともに石材は花崗岩・砂岩・凝灰岩の3種類がみられるが、最も多いのは花崗岩で、次に凝灰岩、最も少ないのが砂岩である。この砂岩製品には大形づくりの丁寧なものが多い。板碑は梵字を刻むものが多いが、その多くがキリクである。またⅡ-4トレンチやP群などでは、おそらく他地域から搬入したと考えられる緑泥片岩の川原石を多用している。横岳遺跡などと比べると数量等は小規模であるが、本墓域を特徴付ける点の1つであるといえよう。また特に墨書したものなどはみつかっていない。

(2) 蔵骨器・陶磁器類と火葬骨

本遺跡での出土品は土師皿が大多数を占める。特に陶磁器類は、同時代の太宰府市内の諸遺跡や宝満山遺跡群などと比べるとやや少ない。また本石塔群では確実に蔵骨器を使用しているのはⅡ-4トレンチ、B群、そしてA群北端付近で須恵器を転用した蔵骨器、さらにN群P1付近などに限定され、包含層から出土した褐釉陶器壺を蔵骨器とみた場合でも5例前後にとどまる。これ以外は全て、ビッドを掘り込んで納めたか、あるいは散骨したかのいずれかの方法で埋葬が行われたと考えられる。副葬品等についても、B群のP4で白磁碗・青磁碗片・ガラス玉が確認されたのがほぼ唯一の確認例である。また被葬者層と火葬骨の扱いについては、小田・中橋両氏の分析結果として、基本的には成人が多いこと、全般的に拾骨して埋葬されたのは1体分全てではなくその一部と考えられること、また古瀬戸蔵骨器の例においても、第2頸椎等、特定の部位に対する特別な取り扱いなどは顕著でないことなどが指摘されている（第4章第2節）。

(3) 銅製筒形容器について

Ⅱ-5トレンチから出土した筒形容器は、成分分析の結果ほぼ純銅製であり、外面に裝飾等をもたないことが明らかとなった（第4章第1節）。これについては出土状況の検討から経巻等が納められていた可能性も考えられる。時期については土器の出土がないことから不明で、火葬墓の造営時期と同じ13～14世紀代とせざるを得ない。仮にこれが経筒等であったとした場合でも、経塚的な性格のものというよりは、火葬墓に経筒を納めた事例として捉えるのが妥当であろう。墓や土坑に経筒が伴う事例は、時期はやや古い京都府などで12～13世紀代の事例が報告されており（杉原1987）、

また個別の墓に対する埋経の事例が文献史料においても確認されていることから(勝田2003: pp.174-175)、ここでは火葬墓に経筒が伴うというあり方をあくまで可能性の1つとしてではあるが想定しておきたい。

4. 中世安楽寺と浦ノ田遺跡の石塔群の立地

文化三年(1806)に描かれたとされる太宰府旧蹟全図(太宰府市史編集委員会2001)には、太宰府天満宮の東南側に位置する丘陵部に「古ハカヲヲシ」という記載がみえる。この付近に古墓が分布することは比較的古くからある程度認識されていた可能性がある。本墓域に至る遊歩道の脇にも近代以降の石塔類が散見され、長く墓域等として使用されていたことが窺える。

またⅠ区・Ⅱ区から尾根筋を挟んで南側に広がるテラス面との関係性についても問題である。方形区画・低墳丘遺構が数基散在しており、また板碑等もみられることから墓域であることはほぼ確実と考えられる。テラス面の造成自体もⅠ区・Ⅱ区よりさらに大規模であり、時期的な併行関係・前後関係あるいは階層的関係等の解明が今後の検討課題といえる。

浦ノ田遺跡の石塔群は造営当時から安楽寺を正面に臨む西側斜面につくられていたと考えられるが、この付近は安楽寺の東側に広がる丘陵部及び谷部にあたり、小西信二氏のご教示によれば、本調査区と谷筋を挟んで向かい側にある紅葉山(現だざいふえん構内)の斜面上でも火葬骨が検出されている。すなわち、安楽寺の東側に広がる丘陵部・谷部に広く墓域が展開していた可能性があり、本石塔群もその一部である可能性が考えられる。本石塔群は、先に述べたように共同墓地としての性格がつよいと考えられるが、南側に広がるテラス面の墓域をも含めた上で、被葬者層の具体像、あるいは安楽寺との関係等についてもさらに検討を進める必要がある。

またこの紅葉山との間の谷筋を越えると宝満山に至るが、この周辺で調査されている太宰府天満宮境内遺跡(太宰府市教育委員会1990)や宝満山遺跡群第7次調査区(太宰府市教育委員会1989)、また浦ノ田遺跡第3次調査区などで焼土坑・火葬土坑が出土しており、特に太宰府天満宮境内遺跡は位置的にも近接していることから、浦ノ田遺跡の石塔群との性格の違いとともに、時期的な併行関係等を含め、火葬場と墓所といった相互の関係性についても今後検討する必要がある。

5. 結語

以上、浦ノ田遺跡4次調査の成果と課題について述べてきた。今回の調査では13世紀後半～14世紀代を主体とする石塔群・火葬墓群の具体的な様相が明らかとなったが、太宰府市周辺における同時代の遺跡群との関係や、他地域における様相との比較検討などについては殆どふれることができず、課題として残されることになった。またここで扱ってきた各種石塔類や銅製筒形容器などについても今後各地域での類別と比較していく必要がある。このように残された課題の多くは後考に委ねられるが、今回本書で提示した資料が多くの場において有効に活用されることを願いつつ、筆を擱くことにしたい。

最後となりましたが、今回の調査・報告にあたり御指導・御協力いただきました関係各位に厚く御礼を申し上げます。

【参考文献】

- 甘木市教育委員会 1992 『三奈木大佛山遺跡』, 甘木市文化財報告第25集, 甘木市教育委員会。
飯塚市教育委員会 1991 『明星寺遺跡』, 飯塚市文化財調査報告書第15集, 飯塚市教育委員会。
石井進・萩原三雄編 1993 『中世墳墓と社会』考古学の中世史研究3, 帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集, 名著出版。
勝田至 2003 『死者たちの中世』, 吉川弘文館。
①北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1985 『白岩西遺跡』, 北九州市埋蔵文化財調査報告書第43集, ①北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室。
九州歴史資料館 1988 『大宰府史跡 昭和62年度発掘調査概報』, 九州歴史資料館。
狭川真一 1995 『中世の火葬—九州地域—』『シンポジウム 中世の火葬』資料集, 東国歴史考古学研究所。
水藤真 1991 『中世の葬制・墓制—石塔を造立すること—』, 吉川弘文館。
杉原和雄 1987 『経塚遺構と古墓』『京都府埋蔵文化財論集』1, 京都府埋蔵文化財調査研究センター。
太宰府市教育委員会 1989 『宝満山遺跡』, 太宰府市の文化財第12集, 太宰府市教育委員会。
太宰府市教育委員会 1990 『太宰府天満宮Ⅱ』, 太宰府市の文化財第15集, 太宰府市教育委員会。
太宰府市教育委員会 1999a 『馬場遺跡』, 太宰府市の文化財第41集, 太宰府市教育委員会。
太宰府市教育委員会 1999b 『横岳遺跡(遺構編)』, 太宰府市の文化財第45集, 太宰府市教育委員会。
太宰府市史編集委員会 1992 『太宰府市史 考古資料編』, 太宰府市。
太宰府市史編集委員会 2001 『太宰府市史 環境資料編』, 太宰府市。
東国歴史考古学研究所 1995 『シンポジウム 中世の火葬』資料集, 東国歴史考古学研究所。
福岡市教育委員会 2000 『香椎B遺跡』, 福岡市埋蔵文化財調査報告書第621集, 福岡市教育委員会。
佛教藝術學會 1989 『仏教芸術』182, 特集 中世の墳墓, 毎日新聞社。

图 版



1. 調査区遠景
(中央の丘陵斜面・北西から)



2. 調査区遠景
(手前丘陵の太宰府天満宮側に開けた斜面が調査区、左上が太宰府天満宮、東から)



1. 調査区全景
(平成13年度・左が北)



2. 調査区全景
(平成14年度・左が北)

1. 調査区開始前
(Ⅱ区1トレンチ付近より、南から)



2. Ⅱ区1～6トレンチ遠景
(北西から)



3. 調査区全景
(平成13年度、南から)





1. 調査区全景
(平成14年度、南から)



2. 調査区全景
(南東から)



3. 調査区全景
(南西から)

1. A群・B群・C群
(手前より、北から)



2. A群上層
(西から)



3. B群上層
(西から)





1. A群・B群下層
(北から)



2. A群下層
(西から)



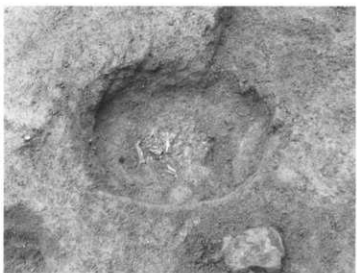
3. B群下層
(西から)



1. A群上層（北から）



2. B群上層（北から）



3. A群P4火葬骨出土状況（西から）



4. B群下層（西から）



5. B群P4白磁碗・青磁片出土状況（西から）



6. B群蔵骨器出土状況（西から）



1. C群
(右下はD群・西から)



2. C群
(北から)



3. D群
(右はJ群・北西から)

1. D群・E群と断ち割り5トレンチ
土層確認状況
(左がE群・北西から)



2. D群・E群
(右がE群・南東から)



3. D群区画
(南西から)





1. 断ち割り5トレンチ・
J群・J群下層
(北から)



2. F群
(北西から)

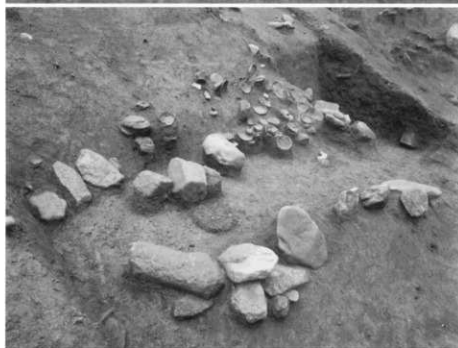


3. F群下層
(北から)

1. F群・G群遠景
(西から)



2. G群板碑・土器出土状況
(北西から)



3. H群
(北から)





1. H群
(南西から)



2. H群下層
(南西から)



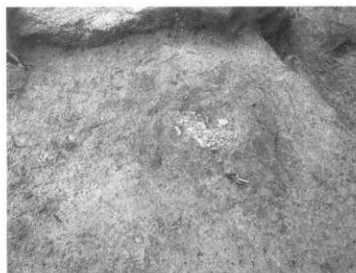
3. H群P3
(西から)



1. I群 (西から)



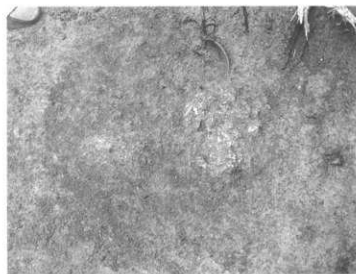
2. I群北半 (西から)



3. I群P1火葬骨出土状況 (西から)



4. I群P2・P3火葬骨出土状況 (西から)



5. I群P2火葬骨出土状況 (西から)



6. I群P2A~C完掘
土師皿出土状況 (西から)



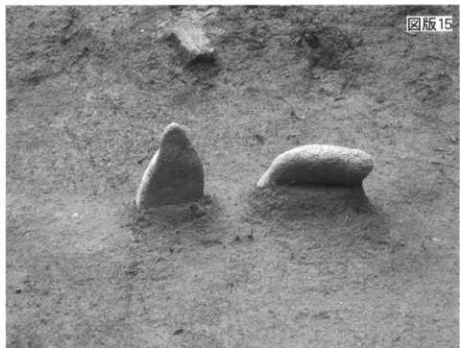
1. J群正面
(南西から)



2. J群～C群・D群
(西から)



3. J群
(北東から)



1. K群
(西から)



2. L群
(北西から)



3. L群土師皿・銅銭出土状況
(北西から)



1. M群付近遠景
(南から)



2. M群
(北西から)



3. M群上段から
(東から)



1. N群板碑
(西から)



2. O群
(北西から)



3. O群
(南西から)



1. P群全景
(南から)



2. P群全景
(西から)



3. P群南群付近
(南西から)



1. P群下層ビット群 (南東から)



2. P群下層完掘 (南東から)



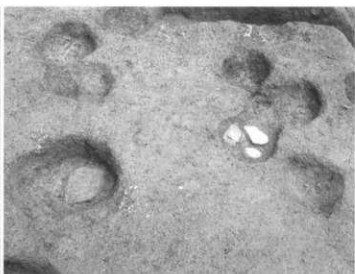
3. P群1群下層 (北西から)



4. P群完掘 (南から)



5. P群P30 (東から)



6. P群P15・P25 (北から)



1. 土1
(西から)



2. II-11区P1・P2火葬骨出土状況
(西から)



3. 土3パイプ出土状況
(北から)



4. 土3土層確認・銅製玉付金具出土状況
(北から)



1



2

1. 断ち割り1トレンチ (北西から)
2. 断ち割り3トレンチ (北西から)



3



4

3. 断ち割り4トレンチ (西から)
4. 1~Ⅱ区完掘状況 (西から)



5. Ⅲ区1トレンチ (南から)



6. 調査終了時、M群上段付近より太宰府天満宮 (安楽寺) の方向を望む (東から)



1. II区1~2トレンチ
(東から)



2. II区1トレンチ
(北から)



3. II区2トレンチ
(南から)

1. II区2トレンチ
土師皿出土状況
(南西から)



2. II区3トレンチ
(西から)



3. II区3トレンチ
(西から)





1. II区4トレンチ石塔群全景
(西から)



2. II区4トレンチ全景
(南から)



3. II区4トレンチ
古瀬戸藏骨器出土状況
(西から)



1. II区4トレンチ古瀬戸周辺 (西から)



2. II区4トレンチ
7号・8号板碑付近 (西から)



3. II区5トレンチ全景
(西から)



4. II区5トレンチ上段火葬墓
(西から)



1. II区5トレンチ
銅製筒形容器出土状況
(西から)



2. II区5トレンチ
上段火葬墓、火葬骨A出土状況
(西から)



3. II区5トレンチ
銅製筒形容器埋設状況確認
(西から)

1. II区5トレンチ
下段板碑群
(北西から)



2. II区6トレンチ
(南から)



3. II区6トレンチ中央土壇
(西から)





1. II区7トレンチ
(南から)



2. II区8トレンチ周辺調査前
(北西から)



3. II区8トレンチ
梵字を刻む花崗岩塊
(西から)

1. II区8トレンチ
(南西から)



2. IV区トレンチ
(西から)



3. IV区大正十四年銘植樹記念碑
(西から)





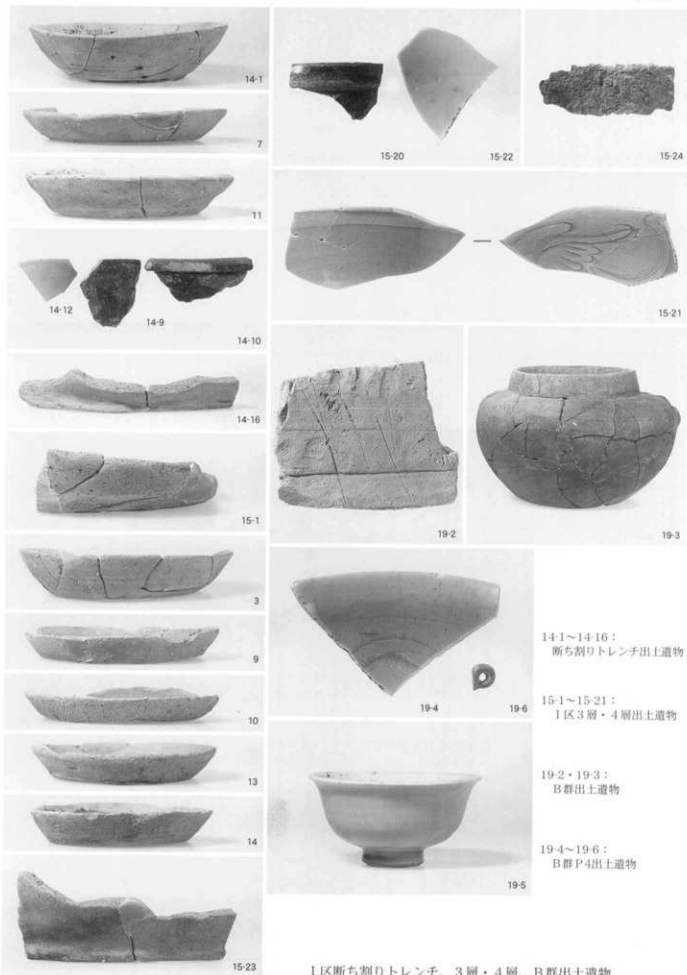
1. 調査区の南側に
広がるテラスの北半
(西から)



2. 南側テラス出土板碑
(下が天)



3. 太宰府天満宮宝物殿付近より
調査区方向を望む
(西から)



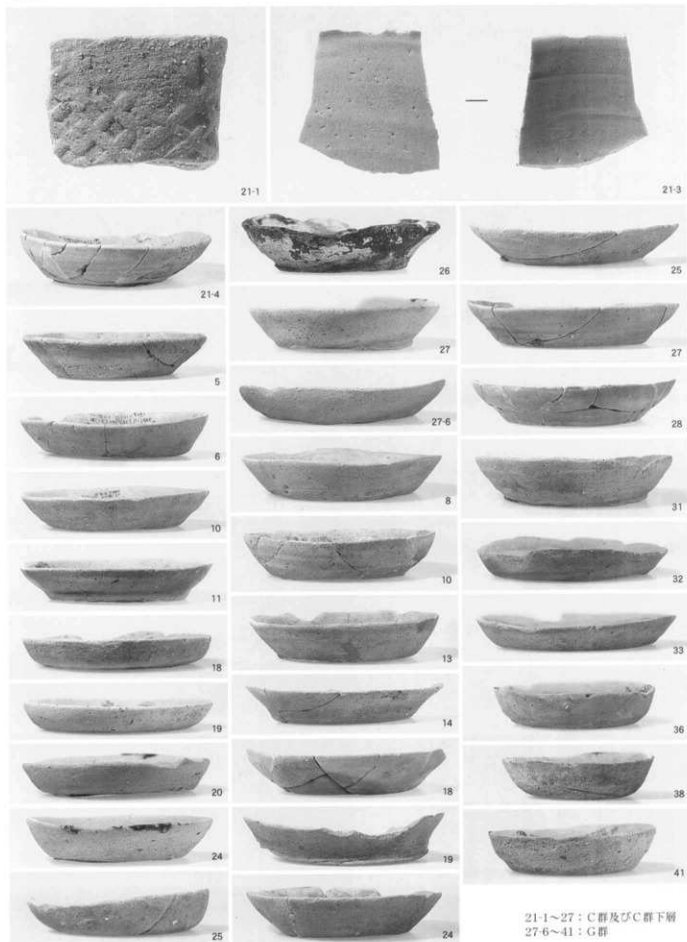
14-1~14-16:
断ち割りトレンチ出土遺物

15-1~15-21:
I区3層・4層出土遺物

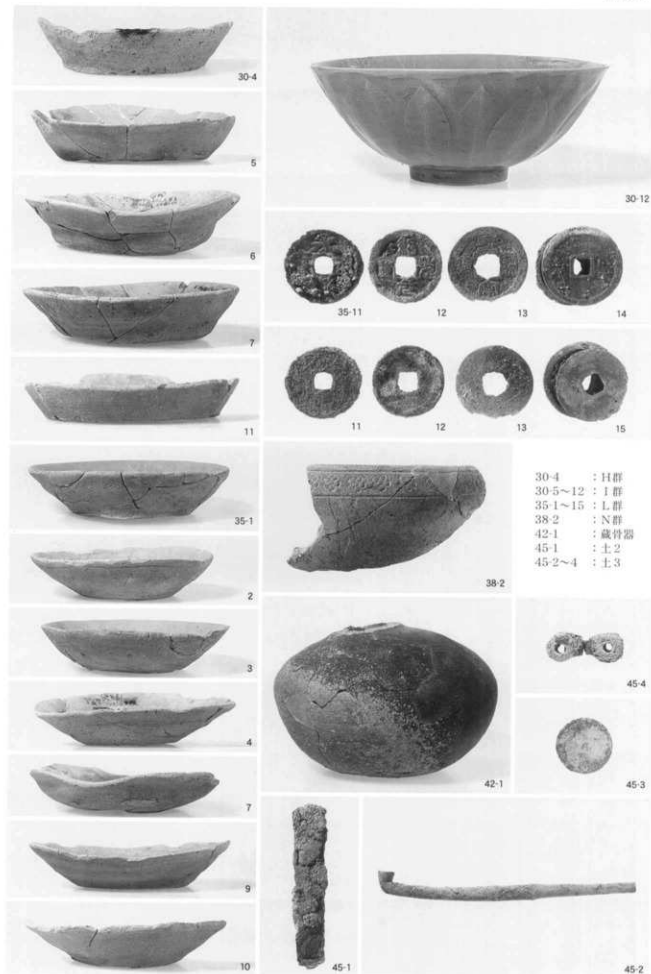
19-2・19-3:
B群出土遺物

19-4~19-6:
B群P4出土遺物

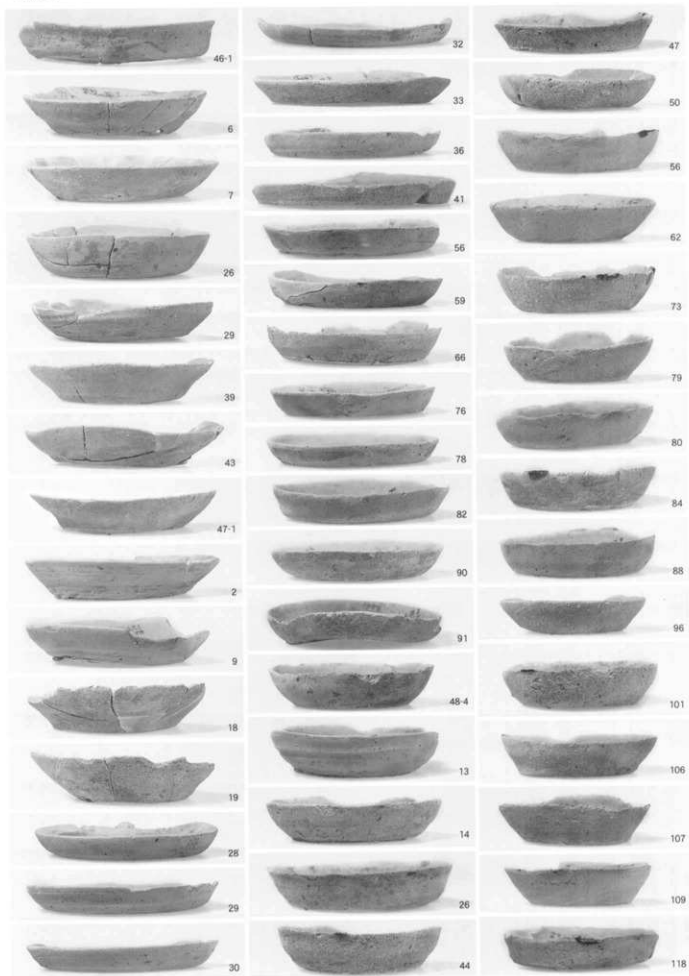
I区断ち割りトレンチ、3層・4層、B群出土遺物



C群及びC群下層、G群出土遺物



I~II区石塔群・土坑出土土器・金属器



I ~ II区 (9~16) · III区包含層出土土器



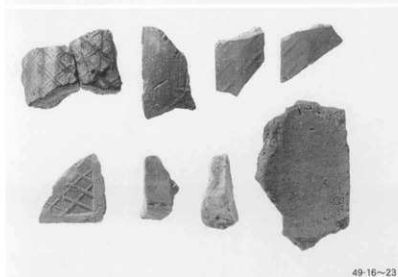
49-1~4·6·8~14



49-5



49-7

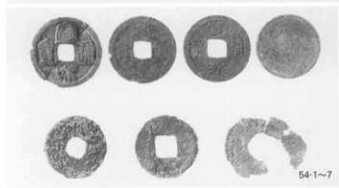


49-16~23

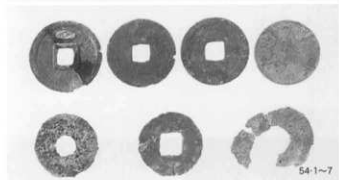


49-15

49-1~15 : 土器・陶磁器類
 49-16~23 : 瓦類
 54-1~7 : 銅銭
 55-1~5 : 金属器・勾玉・石珠



54-1~7

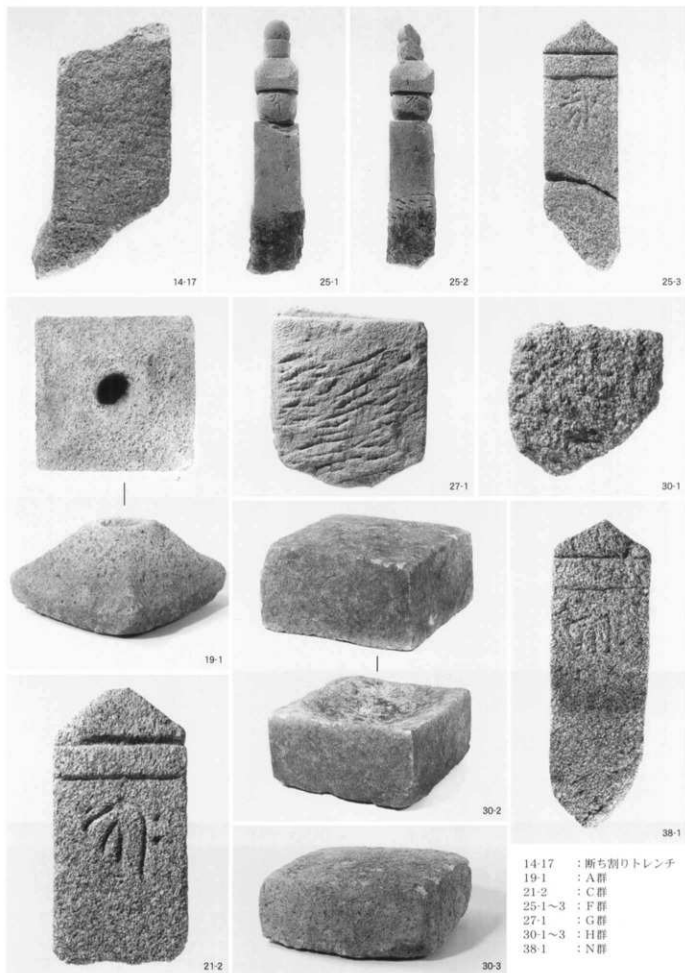


54-1~7

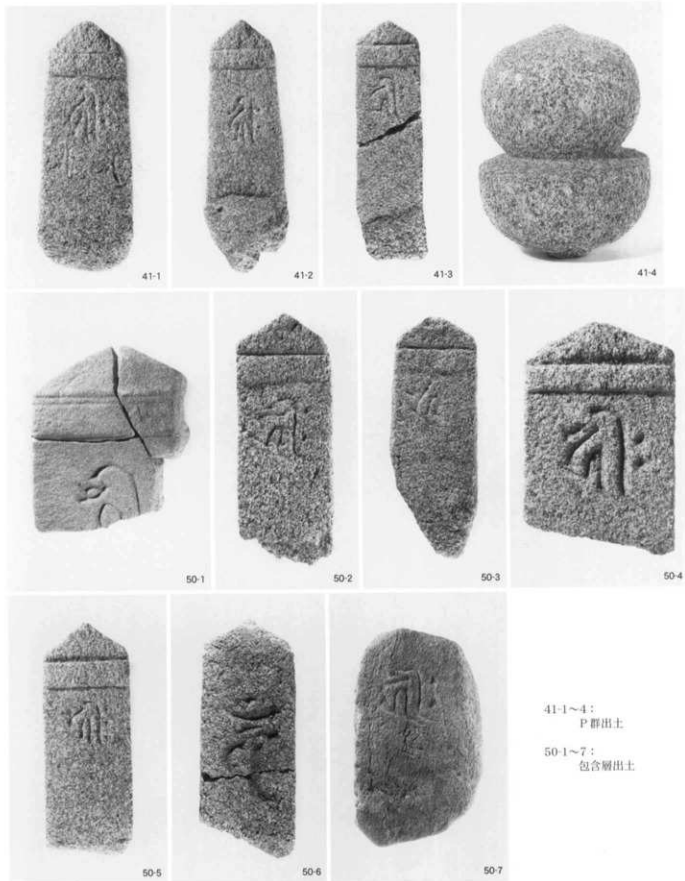


55-1~5

I区~II区(-9~16)・III区包含層出土遺物



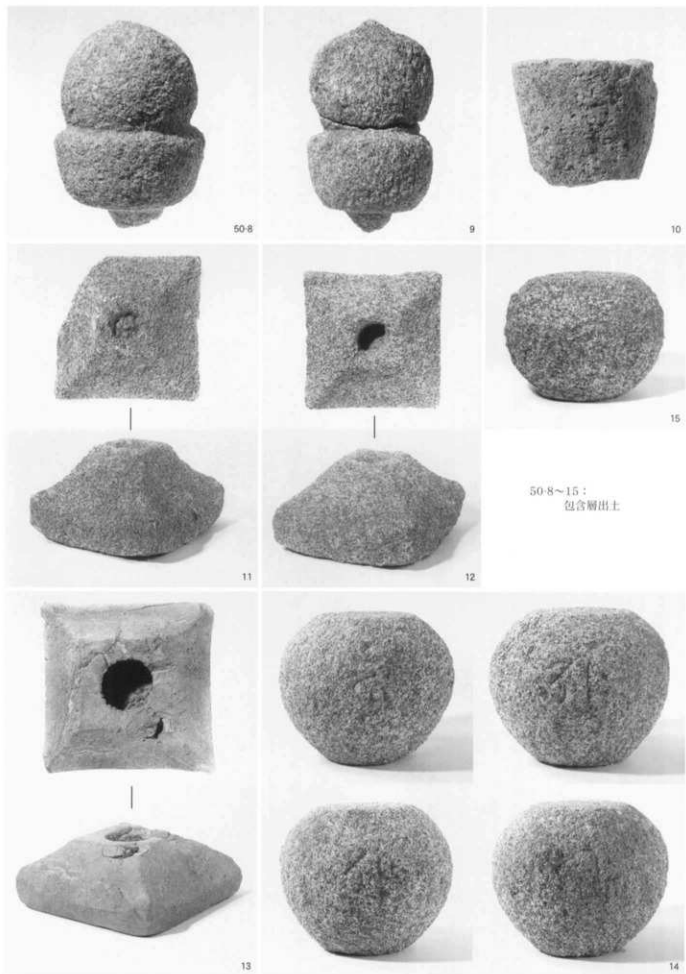
石塔類 (1) (花崗岩・砂岩)



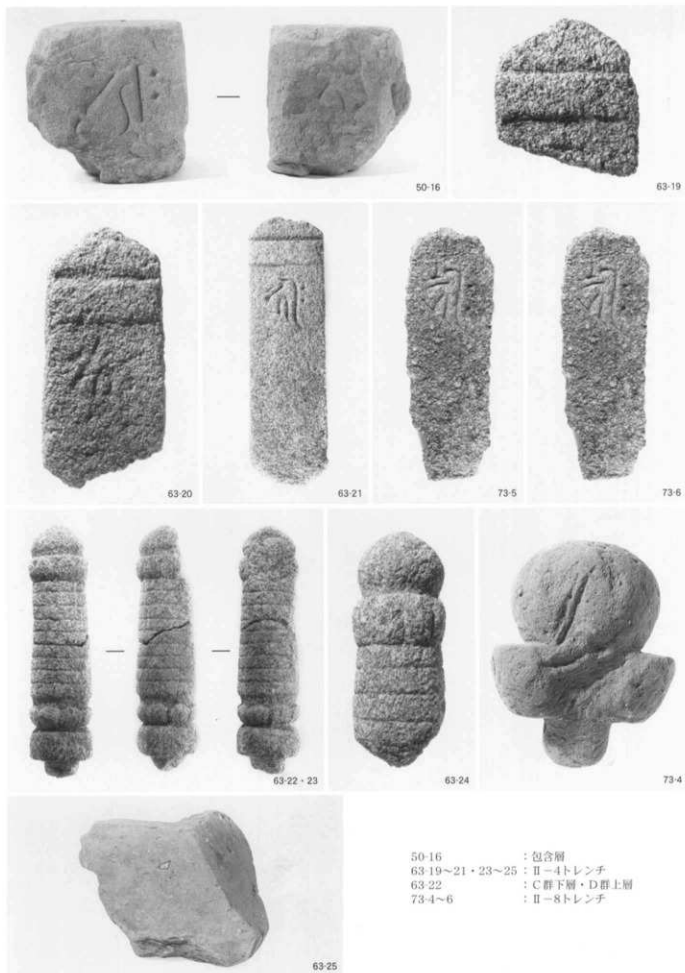
41-1~4:
P群出土

50-1~7:
包含層出土

石塔類(2) (花崗岩・砂岩)

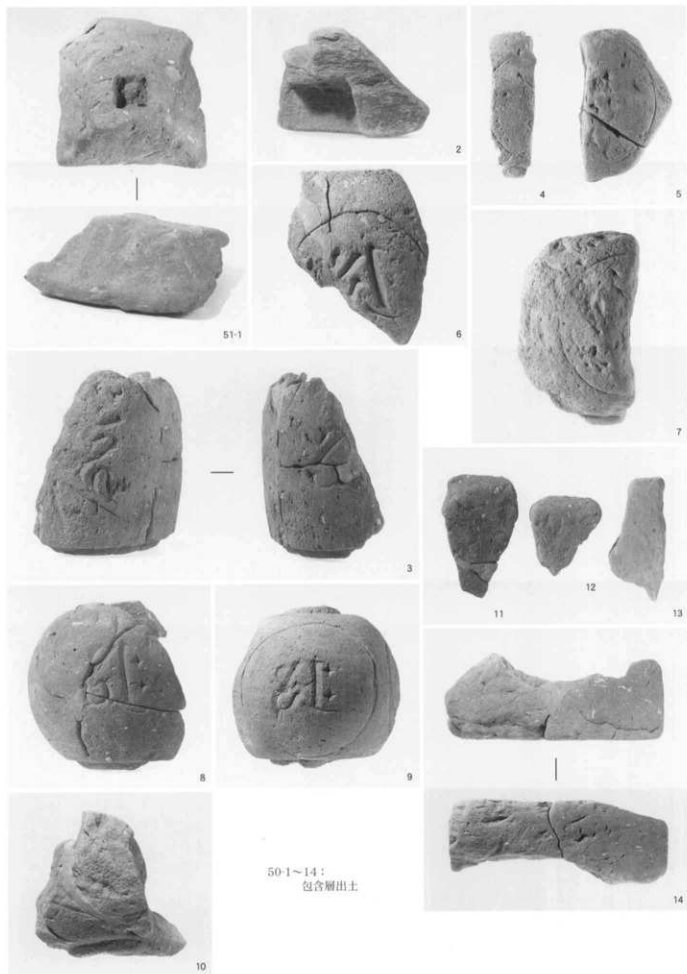


石塔類 (3) (花崗岩・砂岩)

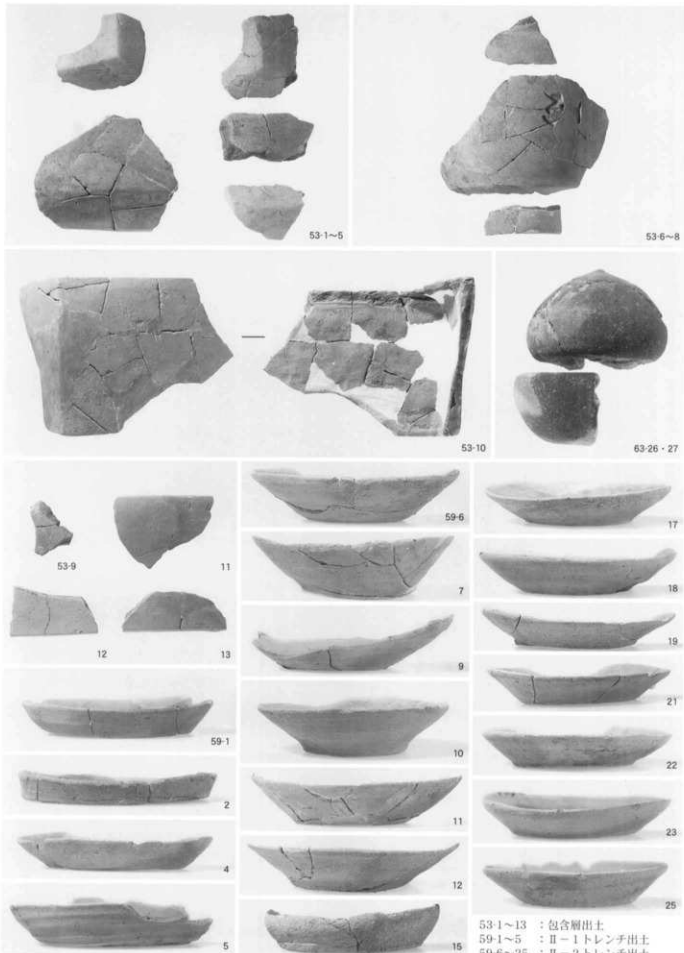


- 50-16 : 包含層
 63-19~21・23~25 : II-4トレンチ
 63-22 : C群下層・D群上層
 73-4~6 : II-8トレンチ

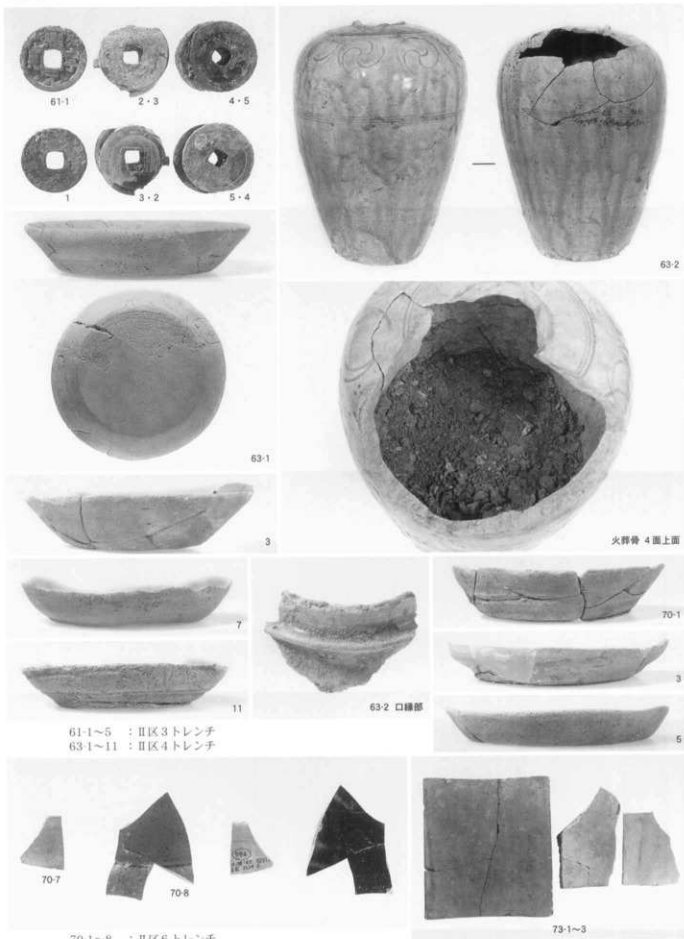
石塔類 (4) (花崗岩・砂岩・凝灰岩)



石塔類 (5) (凝灰岩)



陶製五輪塔・II区1・2トレンチ出土遺物



61-1~5 : II区3トレンチ
63-1~11 : II区4トレンチ

70-1~8 : II区6トレンチ
73-1~3 : II区8トレンチ

II区3・4・6・8トレンチ出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	うらのたいせき							
書名	浦ノ田遺跡Ⅳ							
副書名	九州国立博物館天満宮アクセス道路関係埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第189集							
編著者名	岸本圭, 進村真之, 辻田淳一郎, 坂本真一, 岡寺良, 加藤和蔵, 中橋孝博, 小田裕樹							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812-8575 福岡市博多区東公園7-7							
発行年月日	西暦2004年3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〃〃	東経 〃〃	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
浦ノ田遺跡	福岡県太宰府市 大字幸府 4-934-1	40221	210159	33° 31' 02"	130° 32' 26"	2002.1.8 ～ 2002.11.22	720	九州国立博物館 天満宮アクセス 建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
浦ノ田遺跡	墓地	鎌倉時代 ～ 室町時代	石塔群 火葬墓	土師器・陶磁器・ 板碑・五輪塔・ 蔵骨器・ 銅製筒形容器他				

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2114107
登録年度 15	登録番号 5

浦ノ田遺跡Ⅳ	
福岡県文化財調査報告書第189集	
平成16年3月31日	
発行	福岡県教育委員会 福岡市博多区東公園7-7
印刷	南青雲印刷 北九州市小倉北区清水1-8-7